
C A N C E R (禁断のオンコジーン伝説)

ゆーっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A N C E R（禁断のオンコジーン伝説）

【Nコード】

N 1 3 1 9 M

【作者名】

ゆーっちゃん

【あらすじ】

殺し屋ルイが依頼を受け、そのターゲットである朱里に恋をした。決して結ばれてはいけない二人。未来などあるわけがないのだが、それでも二人は結ばれる。そう、オンコジーンという奇跡の扉を開くことによって。全てを受け入れ、運命を切り開く。辛く長い旅の後に待っている現実とは。運命は今始まった。

第一章 シグナル（刺激）

第二章 プロセス（進化）

第三章 オンコジーン(変異)
第四章 イニシエーション(開花)
第五章 プロモーション(促進)
第六章 プログレッション(増殖)
最終章 CANCER

……物語は終わらない……

CANCER?(不滅のオンコジーン) 第二幕へ

<http://ncode.syosetu.com/n2620r/>

第一章 シグナル（刺激） 1（前書き）

決して開けてはならぬ扉オンコジーン。今、その扉が開かれようとしている。結ばれぬ運命。閉ざされた未来。そこに希望はあるのであろうか。

第一章 シグナル（刺激） 1

昨日の夜から降り始めた雨だが、丸一日続いても一向に止む気配がない。

ジメジメとした気分の乗らない日だった。

いつもなお気に入りのラジオも、その日に限ってノイズが入り、耳障りなので消していた。

夕方、6時を回った頃。 辺りは薄暗く、車のライトもたいして役にたっていない。

少し体を起こし、ハンドルを両手で握り、しっかりと前を見ていないといけない緊張感に疲れ始めたとき、道路の脇に一人の女性が立っていることに気がついた。

どしゃ降りの雨の中、傘もささずに、こちらの方を向いて、親指を上を左腕を上げている。

俺は昔から厄介事には首を突っ込まないように生きてきた。それが一番安全で、楽なことを知っていたからだ。

いじめられた経験もなければ、だれかをいじめたこともない。目立つことはなるべく避けて、余計な争いごとなどは見て見ぬ振りをしてきた。

だから、ヒッチハイクをしている輩を気に止めるようなことは絶対にない。と、その時まででは思っていた。

バックミラーを覗いたが、後方からは車は来ていない。だからというわけではないが、アクセルを踏む足が緩み、車のスピードが落ちた。

その時、ちょうど信号が青から黄色になったので、俺は車を止めた。ヒッチハイクをしている彼女を乗せるために止まった訳ではない。偶然が重なったのだと、自分に言い聞かせていた。

「ありがとう、助かったわ」

2年ほど前に買ったこの中古の車には、オートロック機能などな

く、助手席の鍵はかかっていなかった。

「とりあえず出して！」

俺は何も答えず、アクセルを踏んだ。信号はまだ赤だったが、左右からは車は来ていない。

雨のせいで、少しイライラしていたのかもしれない。

厄介なことに巻き込まなければいいがと思いつつ、早くその場から立ち去りたかった。

「私はジエネ。お願い、これでかくまって」

差し出された彼女の右手には雨で濡れてよれた一万円札が何枚か握られていた。

髪は後ろでひとつに縛り、額は汗か雨かで濡れているのが見えた。十六、七歳といったところだろうか。まだ幼い娘だが、眼だけはスツと何かを見通しているように思えた。

「俺と会ったことは忘れる。今後一切の他言をしない。この条件がのめるのなら、いいが。どうする」

ハンドルを握る手には一層力が入っていた。雨が激しい中、車のスピードを上げなければならなかったからだ。

バックミラーを頻回にチェックはしているが、追っ手などの気配はない。

「名前くらいは聞いてもいい？」

あどけない彼女の覗き込む視線に、俺は少し戸惑った。生まれたばかりの子猫を拾った、そんな気分だった。

「羽衣はころも 琉るい」

本名ではない。本名は知らない。幼い頃に捨てられ、爺に育てられた。この名前も爺が付けたと聞いている。

普段、仕事では名乗ることは御法度であるが、今はプライベートだ。

俺は殺し屋。ヒットマン。

悪事を働いて、のうのうと生きている奴らを抹殺する。それが俺の仕事だ。

だが、表の顔は違う。爺が趣味でやっている骨董屋の店番が昼の仕事だ。

こうしてジエネをかくまうという仕事を、3万円で引き受けることになった。期間は1週間。その後、ジエネの家の近くまで送って行けと言うのである。

誰に追われて、何の理由で逃げているなどは、一切聞いたりしない。それが俺のルールだ。

ただ、任務を遂行する。しかし、どの任務を選ぶかは、自分の判断で行う。

今回の任務は、爺には内緒にしておいた。別に理由などなかったが、報告するほどのこともないであろうと自分で判断したからだ。

爺も知らない俺のアジトが二つくらいあり、その一つにジエネを監禁した。かくまうという以上、ふらふら外に出られては困る。

俺は、昼は骨董屋の店番、夜はジエネの子守と、何の問題もなく1週間をやり過ごした。

「ありがとう。ルイ。ここまでは合格よ。」

何故、俺がジエネと出会ったのか。この時はただの偶然だと思っていた。

「じゃ、最後の難関ね。私を家まで連れて行って欲しいのだけれど、誰にも見つからずに連れていけないかしら」

ここどころ、裏の仕事があまりなかったので、俺は引き受けることにした。

第一章 シグナル（刺激） 2

俺は中古の車にジェネを乗せ、彼女の家まで送った。

彼女の家は、国の保有する広大な山の中にあるという。

地図には、ただの山しか載っていないのだが、そこに住んでいるのだと。

この山の名は果布治（カブジ）という。

その昔、神々が住んでいたという言い伝えがある山であるが、信じているものはいない。

神の山に住む娘との出会い。

「いったい、何者なんだ？」

ジェネは素性を一切明かさなかったが、ただ者ではなさそうだ。

「行けば分かるわ」

彼女はまっすぐに素直な性格の持ち主なのであるが、相当に気が強い。そのせいで、周囲との反発が必至なのである。

山の麓まで着いてからは、車を草むらに隠し、歩いていくことになった。

車ではすぐに見つかってしまうという。

警備員に監視カメラ、見張りの警備犬。侵入者を捕獲するための罠があちこちに仕掛けられているのだと。

ジェネはその多くを把握していたので、秘密の裏道を案内され進んだ。

「あの三本松を目印に、右へ」

「あの岩を目印に、東へ」

裏道は正確だった。俺は帰り道のためにメモを執りながらジェネの後を追った。

車を置いてから、約3時間、距離にして10kmほど歩いただろうか。

やっと城のような建物が見えてきた。

ジェネは疲れた様子一つ見せていない。毎日鍛えているのかもしれないと感心した。

「なんじゃ、こりゃ」

城というよりも、要塞。外からは窓一つ見えない。壁についている黒い点は、レーザーの発射口だという。

周囲が池になっており、一本のつり橋が渡されている以外、出入り口はない。

「どうやって入る？」

つり橋からは入れない、すぐに見つかってしまう。

誰にも見つからないように送り届るのが、今回の任務だ。

「つり橋の下を伝う。出来る？」

つり橋は鉄で出来ていた。そこで用意してきたのが、強力な磁石だった。左右一つずつ磁石を持ち、うんていの要領で、磁石を付けて外してを繰り返して渡れというのだ。

俺は、小さい頃から、過酷な訓練を受けてきた。ヒットマンになる為には、ありとあらゆる能力が求められる。中でも体力系は要だ。いろいろ訓練メニューがあるが、30kgの重りを背負って懸垂100回というものもある。

だから、体重40kg前後のジェネを背負って、50m越のつり橋をうんていで渡るのは可能ではあるが、俺以外の普通の一般人ならば、きつと難しいであろう。

ジェネは、俺が渡れることを分かっていたのだろうか。

「しっかり捕まってる」

橋の上には警備員が4人。見張り台の上に2人。

なるべく音を立てずに渡るには神経を使う。

難なく城へと渡り終え、警備員には気付かれず城の中に入ることが出来た。

要塞は、外見は古めかしく見えていたが、中は相当ハイテクだ。

玄関は指紋認証システム。

俺は、予め作っておいたジェネの指紋テープを付け、玄関はすんなり通過した。

「誰も傷つけちゃダメよ」

誰にも気付かれぬ、それが今回の約束だった。

俺が用意したのは、サイレント麻酔銃。弾痕が残らない特注品だ。

城の中に入ってから、警備員はサイレント銃で眠ってもらい、監視カメラは電磁波発生装置でノイズを起こしながら進み、ジェネの部屋を目指す。

大きな城の中は、まるで迷路だった。

隠し扉、トラップなどまである。

「EPI?」

城の中では、この文字の書かれた家具やインテリアを見かけた。

「そう、ここはEPIの屋敷よ」

やっと、ジェネの部屋にたどり着いたようである。

そこは、見晴らしのよい、最上階の部屋だった。

「EPIって、あの『絵卑』か?」

絵卑（EPI）、それは国有数の財閥の一つである。機械工業系から、電子工学、医療にまでと幅広く手がけており、普段の生活でEPIの字を目にしないことはないだろう。

地図にすら載っていない城というのも納得が行く。

「そう。私の名前は絵卑慈恵音よ」
えびじえね。それが彼女の名前だという。

第一章 シグナル（刺激） 3

ジエネは絵卑家の一人娘だったのだ。

「部外者を入れていいのか？」

廊下などには至る所に監視カメラがあっただが、ジエネの部屋には何もないさそうだ。

「あら、泥棒にでもなるの？」

俺が殺し屋であることは、ジエネがアジト来る前に、他言しないと約束させて話をした。彼女が裏切れば、消すだけだ。

どちらにせよ、ジエネは肝っ玉が据わっている。殺し屋を前にしても動じたりもしないし、俺の言うことを素直に聞き入れるだけの度量がある。視野が広いというか、もっと大きなモノを見ているような感じがした。

「どうして私がここを飛び出したのか、聞かないのね？」

自分の部屋でくつろぐジエネは、生娘の顔を覗かせる。まだ丸みを帯びた顔の輪郭は、これからの成長を匂わせる。きっと美人になるであろう。

「興味ないな。俺のターゲットにならにように祈ってるよ」

暗殺のターゲットといえば、汚い政治家か、どこかの金持ちと相場は決まっている。

今までに絵卑家をターゲットにしたことはないが、絵卑家の悪い噂も聞こえてこないわけではない。

「ルイに殺されるなら、それもいいかもね」

まだ若い彼女が、どのような立場で、これから自分の宿命を受け入れて生きていかなければならないことは一般人には想像もできな

い。だが、彼女は自分の運命以上に、人生を切り開いて行ける何かがあるような気がした。

「ありがとう、ルイ。幾ら払えばいいかしら」

そういつて、彼女は財布を探していた。

俺は、綺麗に掃除され、整理整頓された広過ぎる部屋で、高級なソファに腰掛けているのがどうも落ち着かなかった。

「いいよ。最初に3万もらったから」

殺し以外の仕事はなるべくしないようにしている。だから報酬をもらうのに気が引けた。

「いいか、俺に出会ったことは忘れるんだ。約束通りにな。じゃあな」

まさか、ジェネがこんな大金持ちの娘だとは思ってもみなかったが、なんとなく住む世界が違う人種なような気がしていた。

これで俺の任務は完了した。長居は無用だ。

「じゃ、代わりにこれ上げるわ」

そういつて彼女が差し出したのは、正三角形の金属でできた板のようなものだった。純金ではなさそうだが、高価なものなのだろう。手のひらにすっぽりと治まるくらいの大きさで、厚さは五ミリほどだ。

「この間散歩している時に裏山で見つけの。調べてみたけど、何かは分からなかったわ」

ジェネが調べたというのだから、それは最先端技術でもってしても、解読できないモノということである。

「成分は鉄と銅だから、たいしたお金にはならないと思うけど。記念に持って行って」

こうして、この三角形の金属の欠片は俺のもとへとやってきた。

そう、これが運命の始まりだった。

いや、運命はそのずっと前から始まっていたのかもしれない。

ほんの少しの偶然と、多くの必然と陰謀とに翻弄され、過酷な旅が始まるうとしていた。

「じゃあな。楽しかったよ」

俺はジエネの部屋を後にした。

来るときにサイレント銃で眠ってもらっていた警備員たちを起さないように。よく見ると結構な数だ。

ジエネに教えてもらった裏道。メモの通り戻ると、何の問題もなく車の隠してある場所まで戻ってくることが出来た。

車に乗り込み、神の山『カプジ』を後にした。

第一章 シグナル（刺激） 4

それから幾日が過ぎ、俺はいつもの平穏な日常へと戻り、骨董屋の店番をしていた。

店番は嫌いではない。客はほとんど来ないので、その間は色々な本を読むことが出来たし、たまに来る客は、俺よりも、ものすごく骨董品に詳しいので、いろいろと教えてもらえる。

突然、店の電話が鳴った。

店の電話が鳴ることはほとんどないので、電話をかけてくる相手はいつも決まっている。

「ルイ、仕事じゃ」

殺しの仕事はいつも爺からの情報だ。爺の情報はどこから収集するのかわからないが、誰も知りえない裏情報が満載だ。そして信頼性がとても高い。

仕事の資料は、いつも骨董屋のレジ下にある金庫に入っている。

俺は、それを取り出して自宅へと持ち帰り、仕事にかかる。

いつもの仕事であれば、一晩で遂行し、終了するはずである。

爺の資料では、いつも事細かにスケジュールが示されており、暗殺するタイミングまで指示がある。

だが、今回の仕事はいつものとは違った。

いつもは、人目を避けた場所で、遠方からの射撃が多い。

その後、他のだれかが遺体を始末することもある。

俺の仕事は暗殺のみだ。

しかし、今回の司令は、『自殺に見せかけて殺す』だった。いつも詳しい指示があるのに、今回は何の指示もない。

何かおかしい。

爺らしくない指示の仕方であるし、情報が薄過ぎる。

暗殺理由は、『罪のない人々を奴隷にし、殺人を快楽として、人体実験などを行っている』とだけ書かれている。

仕事は自分で選ぶ。それが俺の主義だ。

俺がやらなければ、きっと他のだれかが殺るのであろう。だから、自分で殺す相手くらいは、自分で選ぶ。

「確かに、ひどいやつだな」

情報から読み取れるのは、極悪非道の殺人者ということだけだった。

情報の最後に、顔写真と姿写真が入っていた。

それは、とても綺麗で純粹そうな女性だった。

すらっと伸びた細い顎、鼻先はすっと伸び、あきらかに美人だ。

背中まで伸びるしなやかな黒髪、誰もが振り返る要素が満載である。

資料によれば、年齢十九歳の短大生。身長155センチ。体重4

3Kg。視力は両方2.0。

顔や外見にだまされはいけない。

悪事は、仮面の裏側にあるのである。

両親は、日本一の大金持ちと噂される、韻一族だという。

確かに、何かよくない事がありそうだと思うのは、固定観念なのかもしれない。

俺は、真実が知りたくなった。

この爺の資料に、嘘はないであろう。今まで嘘であったことは一度もない。

だが、この写真の女性が、資料の中に書かれているような事が出来るのかどうか、疑問でならなかった。

いつもとは違う資料のいい加減さ。
やはり腑に落ちない。

「爺、引き受けた」

電話で返答をしたが、まだ仕事には取り掛からない。
そう、まずは真実を自分の目で確認する。

第一章 シグナル（刺激） 5

韻一族は、云わば投資家である。金融も担っており、その影響力は計り知れない。

彼等のさじ加減で、多くの企業が作られ潰れていくのである。

その一族の末娘、韻朱里いんしゅりが今回のターゲットだ。

彼女は一人娘で、謎が多いとされている。

住んでいるのは、蘭夏留らんげりゅうという大きな街だ。

車で5時間。今回の滞在は少し長くなるかもしれないと、身支度を整え出発した。

その街は、人口が多く、活気があった。多くの高層ビルが立ち並び、交通量も多い。行きかう人々は世話しなく何かに追われているかのように早足だ。

夕暮れを過ぎ、俺は蘭夏留の街についた。なるべく展望のよいホテルを探した。

街の真ん中辺りに、街一番の大きな建物がある。最上階は雲の上で見えないほどだ。

この建物の中に、韻朱里は住んでいる。

ホテルの窓からは、ちょうど彼女の住む建物が見えた。

早速、夕飯がてら夜の街へと散策に行くことにした。まずは情報を少しでも多く集めたい。

それから、自殺できそうな場所を探さなければならない。

依頼を受けたからには、確実に遂行する。それが俺の使命だ。

街の真ん中にある、街一番の大きな建物の一階と二階は飲食店が入ったテナントになっており、そのバーへと足を運んだ。

店の中は多くの仕事帰りの客で賑わっている。独り者の客も多数いた。

俺はカウンターに座り、ビールを注文した。

横に座っていたのは中年の男性だ。バーテンとは顔見知りらしく、親しそうに話をしている。大分アルコールも入っているようだ。話の内容から、彼はどうやら、このビルの警備員らしい。

「このビルに最上階に住んでいる人ってのはどんな人なんだい？」

酔っ払いの相手は、爺に訓練されていたのでお手の物だ。まだ一杯しか飲んでいなかったが、酔っ払いに成りますます。

「誰って、朱里さんのことかい。いい女だよなあ」

彼は何の疑心もなく話をしてくれた。

すかさずビールを足してやる。

「でも性格が悪いという噂じゃないか」

酒の肴といえば、他人の悪口と相場は決まっている。噂話が嫌いな酒飲みなどはいやしない。

「おめーもあれだな。風刺にさせられるタイプだろ。でもあれは嘘だな。彼女はそんな人じゃない。純粹で、やさしいいい女だぞ」

風刺とは、おそらく人身売買の話である。お金の力で奴隷を囲っているというのが専らの噂だった。

「そんなにいい女なのかい？」

情報には、正しいものと、作られたものがある。見極めは難しいが、

「あつたりめえよ。ただの一警備員の俺なんかに、毎日ちゃんとか挨拶してくる。名前だつて覚えてくれてるんだぜ。このビルの警備員達は、皆彼女のファンさ」

極悪非道の人体実験、そんな話は一切出てこない。

まさか、爺が情報を読み間違えたか。

それとも、偽りの姿を見せているのだろうか。

この国で一番の大金持ちだ、何があってもおかしくはない。

この警備員の名前はシーズと呼ばれていた。

皆から信頼も厚く、仕事熱心でまじめな仕事ぶりだそうだ。遅刻や欠勤などもなく、残業も進んでやるという。

警備員になる前は警察官だったのだが、理由があって転職したと。正義感が強いのも納得がいく。

俺は、一通りの情報を集め、ホテルへと戻った。
これからの作戦を練らねばならない。

第一章 シグナル（刺激） 6

情報を整理すると、朱里に関する悪い噂は根も葉もない情報で本当はやさしく気立てのよい娘だということ。

朱里のファンは多く、信賴されており、美人であるということ。お金持ちではあるが、周囲の人からは感謝されている一族だということ。

俺はホテルから朱里の部屋を望遠鏡で観察していた。

夜は十二時を迎えようとしていた。月が出て来ており、朱里のいるビルは最上階までくっきりと見える。

最上階は電気がついており、カーテン越しに人の気配があった。

「何故、爺の情報とは違う」

苛立ちを抑えきれず、飲み終えたビール缶を床へ投げ捨てる。

その時、望遠鏡の向こうに、突然女性が現れた。

朱里だ。写真で見えるより、ずっと大人っぽく見える。

黒髪は背中がすっぽり隠れるくらい長く、蛍光灯を反射して頭の上で光りの和が出来ている。

すらっとスタイルもよい、非の打ち所がない女性だ。

カーテンが閉まっていない一室があり、そこから彼女は外を眺めていた。

一瞬、目が合ったような気がした。

彼女の透き通った黒い瞳に吸い込まれそうになり、あわてて望遠鏡から眼を離れた。

今回のターゲットが彼女ではなかったら……爺の依頼を受けたことを後悔し始めていた。

今まで、殺す相手に感情移入したことは一度もない。

それは、其れ相応の悪事という裏づけがあったからである。

あくまでも仕事のひとつと、割り切って殺すのがプロの仕事である。
う。

だが、今回だけは事情が違う。彼女を殺すことができるのである。
うか。

翌日、俺は仕事にとりかかった。

潜入して彼女に近づくことにした。

いつもはこのようなまどろっこしい方法は取らないのだが、今回の指令は「自殺にみせかけて殺す」ことにある。

そうになると、自殺するような環境をつくらなければならない。

昨日、警備員のシーズに、仕事がなくて困っているので警備員見習いにして欲しいと嘆願し、とりあえず面接しれくれることになっていた。

シーズは多くいる警備員の中でも主任クラスで、彼の意見は概ね通るという人物だった。

お陰で面接もすぐに終了し、早速警備員見習いとして働くことになった。

「ほら、あれが朱里さんだ」

ビルの一階から五階までは吹き抜けになっており、ガラスで囲われたエレベーターが降りて来るところだった。

今日は髪を後ろで縛っており、顔がくつきりと見える。

「おはよう、シーズ」

エレベーターを降りて、まっすぐ玄関へと歩いて来たところで、俺とシーズの警備している方へと顔を向けた。

「あら、新人さん？」

シーズの横に立つ俺を見て、新人と気付いた。彼女は警備員顔を皆覚えているのだろうか。

「今日から見習いに入った、ルイスだ」

シーズが俺を紹介してくれた。『ルイス』はいつも使う偽名のひとつだ。

「頑張つてね！ルイスさん」

そう言つて、まるで天使のような笑顔を見せ去つて行つた。

俺は胸の奥で鼓動が早まるのを感じた。今まで恋などろくにしたことはない。だからこのような感覚は初めてだった。

冷徹な殺人鬼、それがヒットマンだ。感情などあつてはならない。そう訓練されてきたのだ。

第一章 シグナル（刺激） 7

警備員として働くことになり、俺は好期を伺った。

潜入してみると、ますます朱里の人柄やまじめさが伝わってきた。毎日決まった時間に学校へ行き、その後は料理教室や多くの習い事などを熟し、夜遊びなどすることもなく、多くの人々に愛されていた。

「彼女も可愛そうなもんさ」

休憩時間にシーズはつぶやいた。シーズにも一人娘があり、親の反対を押し切って家を飛び出し、ミュージシャンの卵と一緒に暮らしているという。それがきっかけで、妻とは離婚。警察官を続ける氣力を失い、こうして警備員として働いている。今では娘の結婚を反対したことを後悔しているのだと。

「結婚相手がまずいのか？」

まだ二十歳にも満たないが、もう結婚話がでているのだろうか。朱里のことは氣になってしょうがなかった。

「ああ、そうだ。二十歳に結婚しなければならない仕来たりも可愛そうだが、よりによって相手が最悪だ」

朱里のこれからの事に関しては何も知らなかった。シーズは『仕来たり』と表現したが、実は親同士が勝手に決めた政略結婚なのだという。朱里は親に逆らうような事はしないし、それが幸せなのだと信じている。

「なんで、そんな最悪のやつと？」

朱里の結婚相手は、すぐ隣の町に住む石油王の息子だという。女たらしでどうしようもないが、表向きには紳士な坊ちゃん通って

おり、親たちはそのような悪事を知らないらしい。

「韻一族が繁栄していくには、それしか道がないのかもな」

シーズは遠い他の世界の話をしているかのような口調だった。自分には関係のない事なのだと。

朱里は石油王の息子と、二十歳で結婚することが決まっている。

彼女が二十歳になるまであと十ヶ月。この状況で、彼女を殺すことでいったい何のメリットがあるというのか。誰の企みなのだろうか。彼女がターゲットになった理由が分からない。

しかし、自殺の理由としては、許婚が女たらしというものであれば、辻褄が合う。

朱里が死んで得をする人間はいつたいだれなのだろうか。

俺はチャンスを待った。

そして、警備員の見習いとして働き始め、一月ほどたったある日、朱里が旅行をするという情報が入ってきた。

結婚をする前に、一人で各地を見て回りという。期間は十日。

ただ、厄介なのは朱里の護衛に黒服が二人同行するという。暗殺のタイミングは難しいが、またとないチャンスだ。

俺は警備員の見習いを、朱里の旅行の三日前に退職し、朱里の旅行予定を事前に入手した。

親の決めた結婚相手が女たらしだと発覚したが、それを誰にも言えず苦にして自殺。これが筋書きだ。

警備員の見習い中に、俺は朱里の筆跡を手に入れていた。

そう、遺書を書くために。

準備は全て整った。

第一章 シグナル（刺激） 8

朱里一行が出発の日を迎えた。お供は二人で、一人は頭脳派で無口なサイモシン。もう一人は、身長百九十センチもある腕っ節の強いインフェだ。この二人のコンビは仲が良く、朱里からの信頼も厚かった。

出発後、俺は三人の後を追った。行き先は計画書で概ね把握できているが、ほとんどが自由行動となっているので、どこへ立ち寄るかは、その場所場所で変わってくる。チャンスはいつ訪れるかわからない。

移動手段は車だったので、俺は朱里の乗る車に発信機を付けておいた。

「最初で最後の旅ね」

少し高音の、透き通るような声。そう、朱里の声だ。俺は、車内に仕掛けた盗聴器の電波を拾って聞いていた。

「護衛なんてよかったのに」

旅行気分で、声は弾んでいる。運転しているのはサイモシンだ。彼はレーサーの免許を持っており、とても運転が上手だ。俺は尾行に気付かれないように、朱里の車からは見えない位置から、発信機を頼りに追っていた。

「そうは行きません。あのようなことが再び起こると大変ですから」話し相手はインフェのほうだ。格闘技に精通している大男なのだが、性格はやさしい。『あのようなこと』とはいったい何があったのだろうか。俺が警備員をしている時には、そのような話は聞かなかった。

「あれは事故よ、きつと。椅子が油圧式だったのがよくなたっかのよ」

外部には一切、知らされていない事故だ。朱里の落胆が伝わってく

る。

「しかし、もし朱里様を狙った犯行だったらと思うと……」

心配症のインフェが答える。

朱里用に購入した椅子を、搬入した者が、偶然座ってみたのだという。その後爆発し、搬入者は即死だった。それが事故だったのか、故意に仕組まれたものなのかは不明のままだという。因果関係がはつきりするまでは、外部に情報が漏れないようにしていたのだと。

「さ、暗い話はこれくらいにして、あなたたちも旅行を楽しんでね」
朱里は周りの人たちを幸せにする力を持っている。彼女の明るい微笑みで、どれくらいに人が癒されるのであるう。

「あななたちが危険にさらされないよう、私も気をつけますね」

旅行は三日目に入り、街からは随分と離れた秘境の温泉地に来ていた。

秋の夕暮れ、もうすぐ日が沈もうかという時に、事件は起こった。

朱里達は車を降り、紅葉を遠めで見ながら、川に掛かるつり橋の真ん中で風情を楽しんでいる時に、つり橋の両サイドから黒い服の何者かが近づいて来る。

数は合わせて6人。挟み撃ちだ。

サイモシンとインフェは、朱里を挟む格好で、敵と対峙した。

朱里は、俺以外の人間からも狙われていたのだ。

やつらは何者なのか分からないが、手には拳銃が握られている。

朱里達を殺したいのであれば、遠くからライフルか何かで狙えばいい。しかし、そうしないのは捕獲が目的だからであろう。つまり、金目当ての誘拐。

俺は草むらから出て、つり橋へ向かった。

持って来たのはジエネを送り届けた時に使用した、サイレント麻

酔銃だけだった。朱里を自殺に見せかけるといふ任務のため、拳銃は持ってきていない。

しかも、睡眠薬入り弾は、六本しかない。黒服達と朱里の護衛。弾が足りない。車に戻れば補充の弾はあるが、今戻っていては間に合いそうにない。

朱里を殺すことが俺の任務だ。他のやつにさらわれる分けにはいかない。

第一章 シグナル（刺激） 9

川岸の砂利道をつり橋の方へと走っていくと、川沿いにボート置き場があった。

五艘の手漕ぎボートと、一艘のスクリュー付のモーターボートがあり、俺は後者に乗り込んだ。

拳銃の柄でモーターの起動部を壊し、中の配線を直結する。

三度目の直結でやっとエンジンが掛かった。

ボートは弧を描きながら急発信し、つり橋へと向かう。

ダン！

銃声が轟く。山々に木霊し、生命の危機を知らせた。

俺がつり橋の下あたりまで来た時には、インフェは一人倒し、あと二人と対峙している。相手が拳銃を持っているので、安易には攻撃できないようだ。硬着状態が続いていた。

一方、サイモシンは拳銃で肩を撃たれていた。サイモシンが銃を抜こうとした時に撃たれ、銃を川へと落としてしまったようだった。朱里は悲壮な顔で怯えていた。

俺は小型の手榴弾をつり橋の付け根付近に向けて投げた。

朱里から見てサイモシン側のつり橋の付け根が爆発する。

破壊力はそれほどない手榴弾だが、つり橋を破壊するには十分だ。つり橋は木と縄でできていたので、すぐに切れた。

片方の支えを失ったつり橋は、九人を川へと放り投げた。

「朱里さん、つかまれ」

俺はボートを操縦しながら、片手を朱里の方へと伸ばした。間一髪、川面に落ちる前に朱里を掴むことが出来た。

細いしなやかな腕をグツと引き寄せ、ボートへと転がり込む。

ダン！ ダン！

川に落ちた奴らが発砲したが、その頃には俺と朱里は遙か下流へと進んでいた。

「サイモシン、インフェ」

朱里の涙交じりの声が跡に残った。

「大丈夫だ、大丈夫」

銃弾に当たらないようにと、朱里の頭をボートに押さえつけるように低い体制を保ちながら、俺は朱里に声を掛けた。

「あなた……、ルイスさんじゃないの！」

朱里は、ようやく俺の顔を覗き込み、何が起こったのかを理解したようだ。

「ありがとう。でも、彼等は大丈夫からしら」

もう、つり橋は見えない。ボートはスピードを落とさずに走り続けている。

朱里は止まらない涙を必至に拭いながら、つり橋のあった方向を見つめている。

「いったい誰に狙われているんだ？」

大分川を下ったので、追っ手もこないだろうと一息ついた。

朱里を川べりに降ろし、ボートを草むらへと隠した。

「わからないわ。父の関係かもしれないし。もしかしたら……」

そう言いかけて朱里は口を摘むんだ。何かわけありなのだろうか。

第一章 シグナル（刺激） 10

どのくらい歩いただろうか。

追っ手は来ない。

車のところへ戻るのも危険だったので、このまま先へ進むことにした。

ここは秘境の山奥。

街まではどのくらいあるのか見当もつかない。

「でも、どうしてあなたがここにいらっしゃるの」

朱里は落ち着きを取り戻し、懸命に歩いている。

「偶然さ」

世の中に偶然なんていうものはそうはない。俺が朱里暗殺を引き受けたことも、偶然ではないのだろう。爺は俺が引き受けるのを分かっていたのだと思う。あのいい加減で嘘の資料は、俺をその気にさせるためのお膳立てだったというわけだ。

しかし、朱里があまりにも素敵な女性だったことは偶然だが。

「どうして警備員をお辞めになられたの」

警備員をしているときには、毎朝声をかけてくれた。いつも笑顔が素敵だった。

「二十歳の誕生日に結婚するのかい？」

俺は、朱里の質問には答えなかった。なるべく素性は知られたくない。

「ええ。するわ。親が決めたことかも知れないけど、それが私と、韻一族、牽いてはこの国の安泰へとつながるのですから」

朱里は素直だった。だが、心の強い女性だった。全てを受け入れ、それが幸せだという。

俺には全く理解出来ない世界だった。

自殺に見せかけるには、いい期会だったのかもしれない。
だが、俺が朱里と去る所を、朱里の護衛の二人に見られている。
ここで殺せば、俺が殺したものと疑われるであろう。

いくら遺書を残しても意味がない。

俺は、一度朱里を家へ帰すことにする。

今すぐに朱里を殺さなくてよい……という事実には、少し安堵していた。

こうして俺と朱里、二人の旅は始まった。

それは、ただの旅ではなく、運命との戦いの旅だ。決して結ばれてはいけない二人。

一緒になっではいけない定めだというのに、二人は出会ってしまったのだ。それもまた、運命なのかもしれない。この時の俺は、辛く、切ない未来が待っているとは、知るよしもなかった。

辛く、長くて険しい道のり。

過酷な旅の始まりだった。

「さあ、帰ろう」

俺の差し出した右手を、朱里はしっかりと掴んでくれた。

細くしなやかな指先が、俺の平常心を奪う。

初めて望遠鏡で朱里と眼を合わせた日のこと思い出し、再び自分の心臓が脈打つ音がうるさく、どこか心地よく聞こえた。

第一章 シグナル（刺激） 11

さて、朱里を家に届けるにしても移動手段がない。

朱里を助けるために慌てて飛び出したので、荷物などは車の中だ。持ち物といえば、サイレント麻酔銃に、小型手榴弾があと2個、それに小銭が少し入った財布くらいしかない。

朱里も軽装で、カバンなども持っていない。

タクシーなども見つかりそうにない山奥だった。

偶然見かけたバス停の時刻表には、朝十時と、夕方四時のみと書いてある。

あたりは薄暗くなり、途方にくれた。

暗くなると、途中すれ違う車すらない。

なるべく遠くへ、町を目指して歩くより他なかった。

「大丈夫か」

朱里は限界に来ていた。それほど高くないハイヒールだったが、足に血が滲んでいる。

ちゃんと舗装されていない道を歩くことに慣れていないのだろう。

靴は砂埃で真っ白だ。

「ええ。大丈夫よ」

辛さを必至で押し殺し、笑顔を見せる。

「今日はこの辺で休んで行こう」

秋の夜は寒い。岩で出来た窪みのような場所を見つけ、そこで休むことにした。

木の枝や、落ち葉などを集めて、風を遮る防御壁を作る。

山肌と一体化し、寝床の区別はつかないよう迷彩を施す。

寒さに震えている朱里に、俺の上着を被せ、枯葉のベットへと寝

かせた。

「それは……拳銃？」

俺が上着を脱いだ折、麻醉銃とホルダーが露わになった。

朱里の眼は困惑している様を映し出していた。

「ああ。俺はその……ボディーガードをしていたことがあって。これは拳銃ではなく、麻醉銃なんだ」

普通の人は拳銃など持ち歩いたりはしない。

拳銃を持っているとすれば、警察か、もしくは裏家業かのどちらかであろう。

「そうなのね。それで安心したわ」

安堵の表情を浮かべ、朱里はそのまま眠りに着いた。

俺は見張りを兼ねて、座ったまま過眠をとった。

ハクション！

「大丈夫？ごめんなさい。私のために」

さすがに寒くて風邪をこじらせたか。タンクトップのシャツ1枚では秋の夜には勝てないのかもしれない。

心配して朱里は眼を覚ました。

「大丈夫。さあ、寝ておかないと。明日も長旅になる」

朱里は頷いたが、体を起こした。

そして、そつと俺の首に手を回す。朱里の体の温もりが伝わってきた。

俺はスツと眠りに落ちていた。

それは温かい毛布に包まれているような、俺の心の闇を照らしてくれているような。

そんな気持ちだった。

ガサッ

すぐ近くで物音がする。

俺は、ハッと気がついて眼だけを動かし、辺りを見回す。

まだ朱里は俺の首に手を回したまま寝ていた。

枝と枯葉で作った防御壁のすぐ向こうに人の気配があった。

ボートは隠し、痕跡を残していないつもりではあったが、甘かったか。敵も素人ではなさそうだ。

俺は息を呑み、じっと動かずに待った。

どうやら、黒服のやつらが追ってきたようだ。

車を止め、こちらへ二人。反対側へ一人。合計三人の位置が把握できた。

朱里を起こさないように、サイレント式の麻酔銃の引き金を引いた。

ドサッ

目の前の一人の男が倒れこんだ。麻酔の効き目は約六時間。

事態に気ががついたもう一人の男が拳銃に力を込めながらこちらへと向かって来る。

防御壁の隙間から銃口のみを出し、もう一人の男も仕留めた。

「どうかした……」

朱里が眼を覚ました。何が起きているかわからない様子だ。

俺は朱里の口を手で塞いで、敵がいることを合図した。

敵はあと一人。

第一章 シグナル（刺激） 12

三人目の敵は、俊敏で隙がなかった。
倒した他の二人とは、腕が違う。

俺の放った麻酔銃は空を切る。
相手は車を盾にして、こちらに銃口を向けていた。
大よその位置はバレている。
このままでは不味い。

ダン。ダン。

敵の銃弾が草むらを射抜く。俺の鼻先をかすめる。

「朱里さんは頭を低くして、じつとしてるんだ」

俺は草むらから転がり出た。彼女を危険にさらすわけにはいけない。
い。

麻酔銃を二度打ったが、外れる。

あと一発しか残っていない。

大木の陰に身を隠し、敵の動きを伺った。

ドカーン

俺は小型の手榴弾を、敵の車にめがけて投げつけた。
車は見事に大破し、敵は一寸早く車から離れた。
その隙を見逃さず、俺は敵を射抜いた。

が、同時に、敵の銃弾が俺の肩を貫いたのだった。

「さあ、急ごう」

俺は朱里の手を取り、その場を離れようと促した。
「大丈夫！血がでてるわ」

銃弾は貫通している。出血もひどかった。

少しめまいを覚えたが、気力で平静を装う。

敵が持っていた銃を三丁を手に入れ、そのうちの二丁は弾だけ抜き取り捨てた。

打たれた右肩を左手で抑えながら、かろうじて右手で拳銃を持ち、その場から立ち去ろうとした時、先ほどの車の爆発を聞きつけて、もう一台同じような黒い車がこちらへ向かってきていた。

中には拳銃を持ったやつらが見える。

仲間がやってきたのだ。

俺達は再び草むらに身を隠し、敵の動きを伺う。

今度も三人。運転手以外はすぐに車から降りて、辺りを警戒している。

俺は最後の手榴弾を、敵の一人の方へ向かって投げた。

爆発とともに、敵は倒れ込む。

それに気をとられている間に、もう一人の腕を狙い引き金を引いた。

俺の銃弾は敵の拳銃を命中し、吹き飛ばした。

残るは車に残る一人のみ。

なぜか車の中の男は拳銃を持っていないようだった。

俺が拳銃を向けると、両手を上に挙げ、車から出てきたのだ。

俺たちは、車に乗り込み、その場から離れることが出来た。

右肩からはドクドクと血が流れだしており、意識が薄らいでくる。車を奪って逃げたのだが、一キロメートルも走らないところで気を失った。

第一章 シグナル（刺激） 13

運が良かったのは、朱里が運転免許を取得していたことと、奪った車にナビが付いていた事だ。

「ここは……」

痛みはいつもまにか消えていた。

よく眠っていたようで、清々しい気分で俺は目覚めた。

ゆっくりと目を開けると、眩い蛍光灯が幾つもこちらを照らしている。

どうやらベットの上で寝ているようだ。病院かどこかだろうか。

はつと気づくと、肩には包帯が巻かれており、すっかり治療が済んでいる。

上半半身は裸だが、空調が調節されており、調度良い温度で寒くもない。

辺りを見回したが、見たこともない部屋だった。

「まだ寝ていらして。麻酔が切れれば、また痛みだすかもしれないから」

突然自動ドアが開いたかと思うと、見覚えのある顔が入ってきた。白衣の下は襟のピンと尖ったシャツを来ている。

「お話するのは初めてね。ルイスさん。アデポネよ。宜しくね」

彼女は朱里の世話係である。時々一緒にいるところを、警備をしていたときに見かけた。

俺は会釈だけして、再びベットへと横になった。

「もう少し運ばれてくるのが遅かったら、死んでいたかもしれないわ。朱里に感謝するのね」

アデポネはそう言って、俺の肩の包帯を丁寧にはがして行き、消毒をしてくれていた。

彼女は医師なのだろうか。朱里の世話係ということ以上の情報は知らなかった。

「大丈夫？ルイスさん」

息を切らしながら、急いで朱里が飛び込んできた。

部屋の天井を見ると、監視カメラが動いている。

「君が、ここまで？」

意識を失った後、何があったのかわからないが、ここは朱里の家で、彼女が俺を運んでくれたことは確かである。

「無事でよかった」

彼女の目には涙がいっぱい溢れ出していた。

思わず、隣にいたアデポネの肩にしがみつく彼女を見ながら、彼女に命を救われたことと、彼女の優しさと愛に触れ、俺は彼女のことを好きになつてる自分に気がついた。

「あなたにお願いがあるの」

そういつて涙を拭いて朱里は白い歯と笑顔を見せた。

「私のボディガードになつてくれないかしら」

唐突な申し出だった。昨夜、俺が麻酔銃を持っていたことを誤魔化すためについた嘘を信じたのだった。

ターゲットに感情移入してはいけない。これは鉄則だ。

どんな状況であろうと、任務を遂行する。これがプロとしてのプライドであり、ルールだった。

つまり、ルールを守れないものは、死を持って償うしかないのである。

それが裏社会というものであり、例外は許されない。

そんなことは百も承知で、俺は朱里のボディガードを引き受けた。

第二章 プロセス（進化） 1

夜の街に出て、今ではすっかり少なくなった公衆電話を探していた。

爺との連絡に携帯は使わない。それが約束だったからだ。

「爺、なぜいい加減な資料をよこした？」

七度目のコールで電話に出る。それもいつもの事だった。

そもそもの発端は爺の資料にあった。嘘の資料では仕事ができない。

「資料に嘘はない」

俺が調べた限りでは、爺の資料にあるような人体実験などの情報は一切ない。

それとも、まだ俺の知り得てない情報があるとでもいうのか。

「もう少し時間をくれ。資料が正しければ、仕事はきちんとやる」

仕事というのは、朱里を自殺に見せかけて殺すということである。ただ、資料が正しければという条件付でだが。

「ルイ、お前まさか……。分かっておるじゃろうな」

俺が今まで仕事をしくじったことはない。

爺からの信頼も厚かった。

「心配するな、爺。俺はバカじゃない」

仕事を遂行できなければ、俺は自殺を選らぶであろう。その覚悟は出来ていた。

「ルイよ、期日は娘が二十歳の誕生日になるまでじゃ。わかったな」
朱里の誕生日まではまだ半年以上ある。すぐに殺せと言われなかったことに安堵していた。

「最後に一つだけ教えてくれ。朱里は誰かに狙われているようなのだが、心当たりはないか」

朱里を狙っていた奴らが持っていた拳銃は、素人が闇で手に入れるような安っぽい拳銃ではなかった。

高性能の、軍事的目的で作られている代物なのだ。

何か嫌な予感がする。

裏で何かが動いているかもしれない。

「ワシの所には情報が来ていない。一応調べておく」

爺が知らない情報ということは、裏の世界の話ではないということなのかもしれない。

表の世界……それは、公的機関。警察、自衛隊。そのあたりか。

俺は受話器を置き、電話ボックスの天井を仰ぐ。

最終的には朱里を殺さなければいけない。

結局の所、俺は殺し屋なのだ。

第二章 プロセス（進化） 2

俺は正式に朱里のボディガードとして雇用されることになった。それは朱里の強い希望があつてのことだと聞いている。

俺が朱里の命の恩人だということが、その理由であるのだが、本当は彼女を殺すことが目的だったのだ。

噂では、今までのボディガードを務めていたサイモンは重症を負い、入院治療を余儀なくされ、インフェももう一度特殊訓練を受けるために仕事を離れたということだった。

俺のような新参加者が、朱里の第一ボディガードになるのは異例の事だとか。

外出時には、常に朱里の傍らに付き添う。

「ルイ、これを見て」

ボディガードを引き受ける条件として、俺の名前を『ルイスさん』と呼ばないこととした。

彼女が手にしているものは三角形の板のようなものだった。

「穴蔵であなたに頭を押さえつけられた時に、目の前に落ちていた物なの」

人目のあるところでは毅然とした振る舞いを崩さない朱里だが、俺と二人きりになった時には、別人のように親しく接してくれる。内緒の関係のような、そんな振る舞いがとても心地よかった。

だから、俺も同じように、二人きりの時はボディガードは止めて素に戻るように心がけた。

「辞典とか調べたり、科学班とかにもあちこち聞いてみたんだけど、何かわからないんだって」

朱里の目はいつもキラキラ輝いており、たまに覗かせる八重歯がとてもかわいらしい。

あんまり顔が近づき過ぎた時には、わざとらしく離れる。監視力メラがいたところにあるので、気を使った。

「あつ。俺のと同じかな」

驚いて、朱里の持っていた三角形の板を覗き込んだ。

手に取って比べてみると、大きな形はまったく同じだった。

ただ、三角形の二辺にギザギザがついた凹凸があるのだが、よく見るとその凹凸が少し違う。

材質も少し違うようだ。

朱里の持っていた板は、肌ざわりがつるつるしており、石のような物だった。宝石のような類かもしれないが、朱里が調べてわからないということは、一般的な宝石ではないのであろう。ただの石かもしれない。

俺のは金属質である。同じ形でありながら、質感の異なるふたつの板。

いったい、何なのだろうか。

「ええ！ ルイも持っているなんて！ これって絶対運命だよ」

はしゃぐ彼女を横目に俺は二つの板に見入っていた。

俺は、運命などという言葉は信じていない。

多くの事象は予め決められているか、そうなるように仕向けられているだけだ。もしくは、なんの因果関係もなく影響を与えないもののどれかだろう。

だが、今回の朱里が見つけたものと、俺がジエネからもらったものが同じ形状だったのは、ただの偶然なのである。

「価値あるものだといいな」

いつの間にか朱里のボディガードという仕事に万進している。

体も心も、彼女を守りたいという気持ちが芽生え始めている自分に気づいていたが、その気持ちをセーブする気にはなれなかった。それほどに、彼女との時間は愛おしく、そして心地よいものだったのだ。

俺はもの心つく前に捨てられ、爺に拾われ育てられた。だから、母親の愛情などはどんなものなのかも知らない。そして、殺し屋として厳しい修行の毎日だったので、愛などという世界とは無縁の生活を送って来たのだ。

「じゃ、二人だけの秘密ね」

朱里は二十歳の誕生日に結婚することになっている。その事実が変わらない。その日までに俺は彼女を暗殺する。

だが、今はその現実から目を背けるしかなかった。

日に日に近づく朱里との距離、膨らみ続ける想い。そして抑えがきかなくなりそうな欲望。

おそらく朱里もその事には気が付いている。そして、結婚しなければならぬことも受け入れている。だからこそ、今この瞬間を精一杯楽しんでいるに違いない。

だが、彼女は一線を越えるようなことはしない。俺と朱里が、いくら惹かれあっても、結ばれることはないのだろう。

彼女は、真面目で、優しい、本当に素敵な女性だった。

第二章 プロセス（進化） 3

朱里のボディーガードを引き受けてから2ヶ月くらいたった頃、朱里の結婚式の準備が始まることになった。

結婚式まで半年。親同士の身勝手な話合いで決められた結婚。

「最近、ため息がおおいね」

ボディーガードの仕事は退屈だった。

何もすることがない毎日。

以前、狙ってきた奴等も、その後はなんのアクションも起こして来ない。

そんな日々を過ごす間に、朱里のため息は日に日に増えていく。

「え。あ、そうかしら」

結婚することは小さな頃から決まっていたのだという。それを受け入れるようにと教育されてきたのだけれど、納得など行くはずもない。

「結婚するの、止めにしない？」

この質問をするために、どれだけ悩んだらうか。それは、彼女との距離が近くなったと思えたから出来るのかもしれない。

朱里が結婚しなければ、俺の任務も変わるかもしれない。なぜかその時はそういう風に考えていた。

彼女が結婚するから、殺さなければならぬのだと。

「ムリよ。ルイ。実は、韻一族はもう落ち目の。残念だけど。だから、この結婚を逃したら、きっと皆路頭に迷うことになるわ。何万もの従業員達がね」

朱里は遠くの方を見て答えた。これは自分だけの問題ではないの

だと。

「それに、相手の男って、ひどいやつなんだろう」

結婚相手の男が、やさしくていい男であれば、まだましなのだが、
よりによって、最悪の男なのである。

「いい加減なことは言わないで！ いい人よ。誠実で礼儀正しい紳士だわ」

朱里は真実を知らされていないのだ。箱入り娘の彼女のところには、入ってくる情報までもがコントロールされているのかもしれない。

これが朱里との初めての喧嘩だった。

楽しかった毎日が突然グクシヤクしたものになる。

それは辛いことであつたが、それ以上に、朱里に真実を伝えたいと思つた。

そうすれば、彼女は結婚を思いとどまるかもしれない。

いや、それでも彼女は受け入れるのであろう。ただ、万が一可能性が残されているのであれば、それに賭けるしかない。

俺は証拠を探した。朱里の結婚相手がひどい人間だという、決定的な証拠を。

昼間はボディガードの仕事しながら、夜は街に出て情報を集めた。

朱里の結婚相手は、朱里の住む街から、大きな川を隔てて対岸にある街だった。

川を渡る橋は一本しかなく、船での行き来が多い。朱里の住む街の名は辺汰^{ベタ}といい、対岸の街を亜流布^{アルフ}という。辺汰と亜流布とを併せもつ県を蘭夏留^{ランゲル}という。

アルフで一番の大金持ちで勢力を振るっているのが、今回の結婚相手となる栗夏グリゲの一族なのである。

石油王として、国の財政をも左右する彼等に逆らえるものはいない。

つまり、彼等にとって『よくない情報』は整理され、流れないようになっているのだ。

なかなか栗夏の尻尾は掴めなかったが、以前、栗夏の下で働いていたことのあるという人物がいるという。その人物は今は朱里の下で働いているという噂が耳に入ってきた。

もちろん、公にはされていない情報だ。

親しくなった警備員のシーズによると、運搬屋のミイフであれば何か情報を持っているかもしれないという。

ミイフは、お偉いさん方御用達の運び屋なのである。

俺はミイフとコンタクトを取った。

第二章 プロセス（進化） 4

週に一度、ミイフは朱里の屋敷へと足を運んでいた。

それ以外にも、急な荷物の要請があればすぐに飛んでくるのが、ミイフの好かれていた理由だった。

まじめで、約束をきちんと守る男だった。

「で、俺に話ってなんだい？」

居酒屋で酒を酌み交わすことになった。これもシーズの計らいがあつてのことだ。

シーズも、朱里がだまされて結婚するのは見るに忍びないということで見解が合致していた。

ミイフは、久し振りの友との酒に、上機嫌だった。

「以前、栗夏のところで働いていて、今は朱里さんのところで働いている人がいるっていう噂を耳にしたんだけど、知らないか？」

シーズとミイフは古い付き合いだった。旧友の頼みとあらば仕方ないという表情を見せる。

本来は、口も堅いまじめな男なのだ。

「ああ。見たことはあるが」

シーズは歯切れの悪い返事をした。

きっと、それ以上に何か知っているに違いない。が、それ以上は話そうとはしなかった。

「名前だけでもいいから教えてくれないか」

栗夏の悪態ぶりは、アルフの方では有名だが、川向うのこちら側のベタまでは伝わって来ない。

それは、暗黙で公然の事実なのである。

だれも栗夏一族には逆らえない。

もちろん、ミイフにとってもそれは自分の身を削る行為に他ならない。

栗夏の悪口を言おうものなら、即刻仕事はなくなる。

それでも、ミイフは朱里の事が好きだった。

密かに想いを寄せているのはミイフだけではないが、結婚に反対なの彼も一緒だったのだ。

「栗夏だけには、朱里さんと一緒にさせるわけにはいかない」
お互いの利害が一致した。

こうして、ミイフは名前だけ教えてくれた。

それは、アデポネだった。彼女は看護師として今は朱里に使えているが、2年前までは栗夏の下で働いていたのだという。彼女は突然、栗夏の下を去ったということだけしか話してくれなかった。

何故、アデポネは栗夏のもとを去ったのだろうか。きっと何か原因がある。

その原因を直接聞いてもいいのだが、それを朱里から聞いてもらおうということになった。

本人からの話のほうが信憑性があるし、俺達が入り込むような話でもない。

その晩は、すっかり意気投合し、夜遅くまで飲み明かした。

味方は一人でも多いほうがいい。

後は、朱里がどうやってアデポネから話を聞き出すように仕向けるかだ。

朱里とアデポネはとても仲がよかった。
そこに付け入るしかない。

「朱里、残念だけど、フィアンセはやっぱひどい人間だったよ」
次に日の夜、俺は朱里を呼び出した。

「まだそんな事を言っているのね。あなたは最低よ」

朱里の視線は冷たかったが、本当のことを、どうしても伝えたかった。

それがこの国を揺るがすことになっても、彼女に真実を。

「アデポネが全てを知っている。でも、彼女は本当のことは語らない。いや、語れないんだ。理由はわかるだろ？」

第二章 プロセス（進化） 5

その後、朱里がどのような行動をとったのかは分からない。

俺は、置手紙を残して朱里の下を離れることにした。

ボディーガードとしての仕事は楽しかったが、朱里の結婚する日は近づくばかりだったし、自分の中で抑えきれない感情の行き場をどうしていいのか分からなくなっていたからだ。

そして運命の日が来るのを待った。

朱里の誕生日に結婚式が行われる。

結婚式はベタにある由緒正しい教会で挙げることになっており、街からは少し離れた見晴らしのよい高台で行われる。

街の人は皆祝福し、結婚式の前日には街中をパレードすることになった。

その結婚式の前日までに、俺は朱里を抹殺する。

朱里の結婚式におけるスケジュール、人間関係、警備の人数など、全て把握した。

後は、自分自身の感情をいかにコントロールするのだが、答えは決まっている。

血で汚れた俺の手では、朱里との未来など築けるはずなどはないのだ。

朱里の下を離れる日に、俺は朱里のパレードの下見をしていた。

出発は朱里の家の前から始まり、街中を抜け、ベタとアルフとを繋ぐ大きな橋を渡り、アルフを一回りし、再びベタへと戻ってくる。その後式場の高台まで行き、そこで前夜祭が行われる予定だった。

俺は高台に立って、この二つの街を見下ろしていた。

高台は、丁度二つの街の真ん中あたりの山肌に位置している。
見晴らしのよい場所だった。

「ここで朱里を殺るのか」

朱里の結婚式まであと3ヶ月と迫っていた。

朱里のボディガードとして働いていた時にも、人体実験などの情報は得られずままであった。

朱里を殺す明確な判断材料もなく、彼女に好意を持ったまま彼女を殺すことなどできるのだろうか。

せめてもの救いとして、彼女が結婚を諦めるといふ決断を下してくれるのなら……。

そのような事を考えていた時だった。

ふと足元を見ると、何か光るものが目に入った。

夕日に反射して赤く光るもの。

「何か埋まっているのか」

俺は足元の土を掃って、光りを反射するものの正体を探った。

それは、またもや三角形の板のようなものだった。

そう、ジェネにもらったものと同じものだ。

朱里の持っていた石の形状のもではなく、金属質の方の三角形の板。

その板が光りを反射してよこしたのだ。

三角形の二辺には凹凸が付いていたが、俺の持っていた板とは合致しない。

「これ以外にもまだあるのか」

これはただの偶然ではない。奇跡などの類でもない。

意思のある物体は持ち主を選ぶという。

そこに『あった』のではなく、随分以前からそこにあることを定

められていたのだ。

そして、俺がここに立つことも。

選ばれし者。

いや、俺が選んだ道なのかもしれない。

何れにしても、このときは、この板の持つ意味がまだ分からなかった。

第二章 プロセス（進化） 6

ドン。ドン。

朱里に近づくためにホテル暮らしをしてから半年、久しぶりに我が家へと帰って来て、爺の部屋の扉を叩いた。

わざわざ戻ってきた理由は、爺に真意を確かめるためだ。いい加減な返答では許さない。

「爺、出て来い。いったいどういことだ」

古ぼけた大きな木製の扉の向こうで、鍵の開ける音が聞こえる。

爺は八十歳を超えているが、足腰は丈夫だ。

爺に子供はいない。『分けあり』の子を引き受け、俺のように『仕事』のできるエキスパートに育てるのが爺の役割だった。

爺に育てられた子は俺の知る限り三人いた。

一人は俺より十歳年上で、仕事は情報を得るエキスパート。いつも情報はこちらから流れてくる。

もう一人は、三歳年下の俺と同じ殺しの技を教えられた女の子だった。俺が仕事をしくじれば、彼女がその後を全うする。

「おお、ルイよ。今回の仕事はまだ終わらんようじゃな」

長い白髭を触りながら、杖を支えにソファーへと深く腰掛けた。

テーブルの上を見ると、資料のようなものが置いてあった。

「答えはそこにある」

爺は俺が何をしに帰ってきたのか察しがついていたようだ。

半年もの間徹底的に朱里の周囲を調べたが、何一つ出てこなかったのだ。

俺は爺の資料を見て、わが目を疑った。

そこにあつたものは朱里の住むビルの地下の見取り図だった。それも幾重にも階層に分かれている。

機密事項は外部には漏れないように、入口は地上の金庫室の扉だけとなっていた。

防犯カメラをハッキングした白黒の写真が、奴隷と思われる人々を映し出していた。

誰も知らない闇の世界。そんなものが本当に実在しようとは。

そして、この情報を知っているものは数少ないという。

よく資料を見てみると、『韻一族は、罪のない人々を奴隷にし、殺人を快楽として、人体実験などを行っている』と書いてあった。今回のターゲットが朱里だったので、俺はてっきり朱里が人体実験などを行っているものとはばかり思っていたのだ。そして、韻一族の末裔で、最後の血族として朱里の名前が上がったのだということを知った。

「やはり、彼女は白だな。それでもやるのか、爺」

朱里は潔白だ。何より、やさしい心の持ち主である。一族が、どのような悪行をしようとも、彼女が責められるは言いがかりも甚だしい。

「実はな、ルイよ。これは国家機密なんじゃ。つまり、公然と行われとることなのじゃよ。そして、お前がやらぬなら、妹の出番となるだけじゃがな」

世の悪を絶つ。それが俺の使命なのだと、小さい頃から教えられてきた。その教育に間違いはないと信じている。罪なる者は罰せられなければならない。だが、現実はずう。金持ちや権力者が事実を捻じ曲げ、罪を正当化し、あらゆる理由をつけて罪を蔓延^{はびこ}らせる。

「それから、この間言っておった件じゃが」

朱里を狙う何者がいることが気がかりだった。

「おそらく……、地下組織に反感を持つ勢力があるらしいで、そいつらの仕業かもしれん。」

情報通の爺のところにもはつきりとした事がわからないという。ゲリラ的組織なのか、それとも宗教がらみなのか。いずれにせよ、朱里の関係のないところで事態は起きていたのだ。

「最後にひとつだけ教えてくれ。なぜ朱里の誕生日までが期日と言った？」

爺の資料をすべて受取り、部屋を出て行く前に立ち止まった。

「韻一族が、栗夏の一族と手を結べば、全ては水の泡じゃ。事實は闇に葬られ、誰も手だしのできない組織が誕生するであろう。そうなっではお仕舞いじゃ」

俺は決意を胸に爺の部屋を後にした。

このために俺は生まれて来たのだと、その時は確信していた。

第二章 プロセス（進化） 7

祭りの準備に取り掛かる。

ありとあらゆる武器弾薬をかき集めた。装備出来る数はそれほど多くはないが、補充用も必要となるであろう。

最新鋭の武器と言い難い代物もあるが、それでもないよりはましだった。

念入りに、火薬は湿気ていないか、トリガーの動きはスムーズかなどチェックし、足りないものは補充した。

これほどの大舞台は初めてだった。

いつもの暗殺であれば、一人を狙うのが常だったのだが、今回はいったい幾つもの死体が出るのか想像も出来ない。

「さあ、行くか」

普段は身に付けない防弾チョッキを纏い、車へと荷を積み込む。

『朱里の暗殺』この指令が爺の所へ来たのは、事が大きくなっては困る者がいるということだ。極秘裏に勧めなければならない。政治家なのか、国家権力なのか、それとも異国からの侵略なのか。

大きな陰謀の匂いがする事案ではあるが、その真意はわからない。だが、俺に出来ることは一つだ。

そう、悪を憎みそれを正す。

簡単なことではないことは承知しているが、それ以外に俺の生きる意味などない。

それに、俺が今やらなければ、その役割は他の者に移り、結局は成し遂げられるに違いない。

俺が殺さなくても、朱里は必ず殺される。

そうつ世の中なのだ。逆らっては生きていけない。

俺は、忘れずに三角形の板を二枚持った。朱里との間の絆のよう

な気がし、これからの俺の行動を守ってくれるような安心感が持てた。ただの願掛けのようなものだ。

革で作った腰のベルトには、三角形の板が丁度入るようにポケットを作り、肌身から離れないよう工夫していた。

三角形の板は、正三角形だったので、もし集まって亀の甲羅のような六角形を形成するのであれば、六つの三角形があるはずである。俺が二つ持っており、朱里が一つ持っている。残りはあと三つある可能性があった。

板の二辺付けられているギザギザの凹凸が、他にも板があるぞと示しているのだ。

そして車を走らせた。ハンドルを握る手に力が入る。
再び朱里のいるベタへと。

そこで待っているのは、明るい将来などではないことだけは確かだった。

まずは、警備員のシーズに会いに行った。

念入りに立てた計画の鍵を握るのはシーズの動きにかかっている。
「頼めるか？」

シーズには概ね本当のことを話した。あまり深入りしすぎて、彼の身に危険が及ぶのは避けなければならいが、それを承知の上で彼は聞いてくれた。

「そういう事情だったのか。俺に出来ることがあれば協力する。それがこの国のためにもなるのなら」

韻一族の悪行、それを阻止するために俺は雇われたヒットマンだという事、結婚してしまってから遅いという事。地下施設の写真の資料は説得力があった。

「連絡係には、ミイフを使えばいい。やつは口が固いし、栗夏を憎んでいるからな」

目立つ行動はなるべく控えなければならない。シーズも立場上、自由に動くのは難しい。

何より、目的が明確であり、賛同してくれる同胞が出来ることは心強かった。

「恩に着る。この貸しはいずれ」

誓いの挨拶とばかりに、拳と拳とを合わせた。

俺が死をも覚悟している事が伝わったのであろう。シーズは熱い視線をよこした。

第二章 プロセス（進化） 8

その後、いろいろと準備を整え、決行の日を待った。

一月に一度、朱里の住むビルのセキュリティに隙が出来るとい。コンピューターのサーバーのフルバックアップのために、一時的に外部との接触が絶たれる時間帯があるという。その間、内部の電源に切り替わるのだが、その切り替わる一瞬がチャンスだとシーズが教えてくれた。

電源が切り替わるときに、一部の電源をショートさせれば、回復するのに3時間くらいはかかるはずだというのだ。あくまで理論上であって、試したことはないそうだが。それでも、願ってもないチャンスだ。

これで、内部と外部は完全に遮断され、しかも監視カメラなどの情報もシャットダウンされるという。

電源が落ちるのは、情報系統だけなので、普通の電源などは変わらず、監視カメラの見張り番以外の人間には気付けないであろうということだった。

この監視カメラの見張りを、当日シーズがやってくれることになっていた。

「やあ、元気だったかい？」

久しぶりに見る朱里は、一段と綺麗になっていた。胸の熱い想いは、好きという気持ちなのだとはつきり自覚している。俺はミイフに頼んで、朱里との密会の時間をとってもらっていた。

「ひどいじゃない。突然いなくなるなんて。私のボディガードがいなくて、狙われたりしたらあなたのせいなんだからね」

彼女の目には、うつすらと涙が浮かんでいるのが見えた。

もう、結婚式までは時間があまり残されていない。

思わず抱きしめたくなったが、まだ理性が効いた。理性などなければいいのにと、本気で思った。

「アデポネは話したか？」

朱里はゆっくりとうなずいた。あの後、アデポネを時間をかけて問い詰めたそうだ。

アデポネは以前栗夏の下で看護婦として働いていたが、栗夏に気に入られ、言い寄られていた。貧しい家で生まれたアデポネは、病気の親の生活費と治療費を稼ぐために、収入のよい栗夏の下で働かざるをえなかった。そこに付け込んだ栗夏は、首をちらつかせたり、ボーナスを上げるといったような非情な手段をとり、アデポネを思いのままに従わせたのだった。

栗夏は朱里との結婚という面子があつたので、公には女関係を持つことは出来ない立場である。だから、アデポネは一時の遊び相手として、誰にも知られてはいけいない秘密の関係として付き合わされたいのだった。

しかし、その関係も、アデポネの妊娠により終わることとなった。アデポネは栗夏以外の男性と関係を持ったことはなかったのだが、栗夏のほうは、自分の子供だということが認められず放り出したというわけだった。

仕事も失い、病気の両親を連れて路頭に迷っていたときに、偶然朱里と出会い、雇われたという経緯だったのだ。

アデポネは、その事実を直向きに隠してきた。もしそれがばれようものなら、彼女と、彼女の両親の命の保障はなかった。

朱里はそんなアデポネを憂い、何があっても守ると約束をして、彼女を受け入れたのだ。

「最低の人間だわ……。でも」

その後続く言葉は分かっていた。それでも朱里にとって、栗夏の一族との結婚は避けては通れぬ道なのだ。

韻一族の崩壊、それは巷の噂になるほどだった。

もう朱里だけの問題ではないのだ。

彼女の背中には、多くの人々の生活がかかっていた。

「納得していればいいんだ。ただ……」

これから俺のしようとしていることが、正しいここなのかどうか分からない。でも、朱里だけには分かってほしかった。

「信じられないかもしれないけど、韻一族がひどいことをしている。俺はこれからそれを阻止しようと持っている。もし、阻止できたら、韻の一族は滅びるかもしれない。そうしたら、朱里、君は自由になれるしだいだろうか」

朱里には、全てが絵空事のようにだったに違いない。

今までの裕福の生活が、何不自由のない人生が、全て虚構の上に成り立っていたらというのだ。信じられないのも仕方ない。だが、事実は事実だ。

俺は、計画を朱里に話した。

韻一族が奴隷を使って人体実験をしている事。

そして、俺が殺し屋である事、朱里を殺すはずだった事。だが、朱里を好きになってしまった事。今回の任務が命がけであること。捕まれば死刑は免れない。

「朱里、君を助けたい」

思わず朱里を抱きしめていた。

第二章 プロセス（進化） 9

朱里はしばらく直立不動であったが、やがてゆっくりと両手を俺の背中へと回した。

そして、俺の胸に顔を埋め、回した手に力を込めた。

どのくらい時間がたっただろうか。おそらく数分、いやそれほど経っていないのかもしれないが、ものすごく長い時間に感じられた。その一瞬が永遠だった。

ただ、愛おしく、そしてそれは二人だけの時間だった。

「でも……、でもね、ルイ。もし、あなたの言うことが本当だったら……。父と母がそのようなことに手を染めていたとしたら。私、生きてはいけないわ」

朱里も、世間の流布を知らないわけではない。だが、信じてはいなかった。地位や財産があると、それをよく思わない人たちがいるものだと、常々教育されてきたからだ。

「朱里が悪いわけじゃない。君は潔白だろ。だったら、生きるべきだ」

子は親を選べない。不運にも不幸な家に生まれたとしても、どう生きるかは自分次第だ。

「俺は今回で、殺し屋の仕事から足を洗おうと思っている。それは、任務を遂行できなかったからだ。君を殺すことが出来ない……」

足を荒らう。そんなことは出来るはずがない。それは、つまり、爺を敵に回して戦い続けることを意味する。爺に指令を出している組織が、俺を許すはずがないからだ。

「でも、後悔はしない。それが俺の生き方だから」

朱里にも、朱里の人生を歩いて欲しかった。

親が決めた人生など、なんの価値もないことを。

他人のために生きるのではなく、自分のために生きてほしかった。

「手紙の返事なんだけど……」

俺が朱里の前からいなくなる前に渡していた置手紙。あの時は、まだこのような運命になるとは思ってもみなかった。

「その答えは、今度会った時に聞くよ。その時まで生きてなきゃいけないね」

まだ伝えたいことはいっぱいあった。聞きたいことも山ほどあった。もつと長く、少しでも近くにいたかった。

だが、俺にはやらなければいけない事がある。

自分のために、朱里のために。

まだ、感情に流される時ではない。

朱里には、決行の日、巻き添えにならないようにと、建物の中にいないことを約束させた。

その後も、長期雲隠れできる体制と準備をするように指示し、誰にも他言しないとを約束させた。

これで準備は全て整った。

朱里の結婚式まであと一ヶ月。街中は少しずつ警備員などが増え始めており、お祭りムードに包まれ始めていた。

ホテルは、特に監視の眼があつたので、俺はシーズの家身を寄せていた。

車には武器弾薬が積んであるので、納屋を借りて隠しておかなければならなかった。

シーズがいなければ、ここまでしつかりとした計画は立てられな

かつただろう。

「シーズ、いろいろと世話になったな」

明日の決行の日を前に、最後の晩餐だった。シーズは、離婚後してから一人暮らしをしていたので、隠れ家としては打って付けだった。

「ま、退屈しのぎにはなったな」

最初は嘘について警備員見習いにさせてもらったのに、彼はそんなことを気にしない大きな懐の持ち主だった。

いつものビールに、いつもの愚痴。

結構楽しい毎日だった。

「死ぬなよ、ルイ」

シーズにはまだルイスが偽名であることも話していた。

彼との友情はきつとこれからも続くであろう。

「幸せになれるといいな」

俺が朱里に好意を持っていることも、シーズは知っていた。

その上で、今回の計画に賛同してくれたのだ。

多くの犠牲を出すかもしれない。しかし、俺がやらなければなら
ないのだ。

第二章 プロセス（進化） 10

バチッ！

俺は、深夜零時きっかりに、配電盤の一部をショートさせた。

一瞬ではあるが、ビルの電源が落ちる。

だが、すぐに他の回線へとつながるので、その一瞬はどこかで落雷があつたかのようにも見えた。

運よく天が見方したか、雷こそ鳴ってはいなかったが、外では雨が降り始めていた。

急いで、地下一階にある大金庫室へと向かう。

警備の配置、時間、行動。全てシーズとの打合通りだったので、誰とも遭遇することなく、配電盤室から、金庫室までたどり着けた。金庫の番号は入手済みだ。それはアデポネが調べてくれたものだった。彼女は看護師でもあるが、コンピューターにも詳しい。内部に入り込んで、毎月変更になる金庫の番号を入手するのは朝飯前だ。

大きな金庫の扉を開けると、中は二十畳以上はありそうな、大きな部屋になっており、いくつかの扉が見えた。

爺の資料によると、そのうちの一つが地下へと入り口となっている。

そこにも、やはり指紋認証システムでロックがかかっている。

この指紋は、シーズが朱里の父親からの手紙を受け取る時に入手したものだった。

鍵は開き、地下への階段が現れた。

真っ直ぐな階段を下りていくと、六畳広間くらいのエントランスとなっており、そこにも暗証番号付きの扉があつた。外部との接触を一切断つための大掛かりなシステムだ。

俺はその扉に小型のプラスチック爆弾を取り付け、階段を上り、一度出る。

金庫室の扉は頑丈で、遮音性も高密度だ。爆発の音はほとんど外部には漏れない。

普段であれば、火災報知機が鳴るはずだが、シーズが情報管理室でセンサーを切ってくれている。

再び扉を開き、催眠ガスの缶を放り込んだ。

しばらくしてから、専用の暗視ゴーグルと、鼻栓とを装着し、下へと降りる。

爆発を聞きつけた警備員たちが五人ほど倒れている。二人は爆発でふっとんだ跡だった。

案の定、下は大騒ぎだった。

俺はサイレント麻酔銃で、片っ端から眠らせて行く。

やむなく地下二階は制覇し、地下三階へと降りる。

そこには、奴隷となった人々が収容されている檻がいくつもあった。

まず守衛達を眠らせ、檻の扉に小型爆弾を片っ端から付けていく。順々に爆弾は爆発し、奴隷達は自由になった。

「さあ、自由だ。みな上を目指せ！」

俺の合図とともに、歓喜の声上がり、皆一目散に階段を駆け上った。

次は地下四階へと降りる。

至る所にある点滴装置、乱雑おかれているおびただしい数の注射器、ここは人体実験の現場であった。

実験体にされた人々は、正気を失っているものも多く、ともに歩けるものはほとんどいない。

中には、息をしていない者も何人かいた。
とりあえず守衛を眠らせたはものの、彼等を上まで連れて行くのは不可能だった。

「後は警察に任せるしかない」

俺はさらに最下位の地下五階へと降りた。

制限時間は三時間。残された時間はあと三十分を切っていた。

爺の情報は、地下四階までしかなく、その下には何があるかわからなかった。

第二章 プロセス（進化） 11

警察には、シーズから連絡が行っていた。

俺が突入すると同時に、多くの捕らわれた人と、薬物中毒者が多数いることも言い含めてあり、それなりの部隊と、救急車がこちらへと向かっているはずだった。

地下四階まで降りてきたが、朱里の父親も母親も、その他一族の顔もまだ見ていない。

深夜なので、仕方ないが、彼等主犯が捕まらないことには事は収まらない。決定的な証拠を握り、突きつけるしかない。それが今回の目的である。

人体実験の現場や、有り様は、デジカメにて撮ったが、それだけでは不十分だ。

奴隷となっていた人達の名簿や、出所の分かる資料がある。

さらに下へと階段を降りる。

地下五階に降り、扉を開けると、そこは豪華な大広間になっていた。

深夜にもかかわらず、煌煌と大きなシャンデリアがついており、中央には、大理石のテーブルに、床もおそらく大理石だ。

奥にいける扉が二つ見える。

そこに人の気配はない。

足音を立てずに、右側の扉へと向かう。

ガチャ

鍵が掛かっていない。

静かに扉を押す。中は真っ暗で何も見えない。

懐中電灯を口にくわえ、前を照らしながら奥へと入って行った。

部屋の中は結構広く、奥にはベット、シャワールーム。手前の大
きなテーブルの上にはパソコンが置いてある。

引き出しには鍵がかかっていた。

時間が惜しいので、引き出しの鍵を銃で壊した。

同時に、パソコンの電源も入れて、持ってきたUSBを用意した。

「そこまでだ」

はっ、と声の方を向くと、そこには大男が立っていた。

気配などは微塵もさせずに。

部屋は暗く、逆光のようになっていたので、はつきりとは顔を見
れなかったが、見覚えのある風貌だった。

俺が拳銃を構えるより速く、俺の胸には麻酔の弾が突き刺いた。

ここまで来るのに、手強い相手はいなかった。

用心棒などの類の者が一人や二人いてもおかしくないはずなのだ
が。

そして主犯なども、誰一人としていない。

俺の計画が漏れていたということなのか。

薄れ行く意識の中で、朱里の笑顔が浮かんだ。

これで彼女が救えたのだろうか。

第二章 プロセス（進化） 12

どのくらい眠っていたのだろうか。

緊張と疲労も重なり、随分時間が経っているように思う。

目は閉じているが、瞼の向こう側は明るい蛍光灯で包まれているが分かる。

手足は金属質のもので板に固定されており、身動きは出来ない。ベットではなく、机かなにかの上に乗せられているようだ。

「お目覚めかな」

耳元で聞きなれた声がする。懐かしい声だ。幼い頃はよく一緒に修行した。いつまでも超えられない壁でもあった。

「リコ・兄さん」

十歳年上の、俺と同じように拾われ訓練されてきた義兄だった。リコはどんな情報でも得られる技を鍛えてきた。今回の俺の行動も当然のようにお見通しだったというわけだ。

「何故、実行する前に止めなかった？」

リコであれば、俺を止める事などわけのないことだろう。

「いろいろと事情があつてな。ま、お前を捕まえるには、隙がないと出来ないしな」

つまり、今回の襲撃により、最後に俺に隙ができるまで待っていたと言うのだ。

リコは、完璧主義者で、いつも人の先を考えて行動をとる人物だった。

「俺は用済みか？」

この部屋にはリコしかない。しかし、監視カメラが作動してい

るのが見える。きつと爺も見ているに違いない。

「残念だが、それが掟だ」

刃向かうものには死あるのみだ。リコは残念そうにこちらを見下ろしている。

「奴隷たちは逃げれたのか？ 朱里は？」

まだ意識ははっきりとしていなかったが、あの後どうなったかが気がかりでしうがなかった。

「奴隷たちは、こちらで確保したよ。実験の結果もすべてこちらで処分した。証拠は一切残っていない」

リコの話によれば、韻一族は、国の防衛庁と手を組み、独自に実験などを繰り返し返していくうちに、勝手にいろいろな薬物などを作り始めたということだった。

そして、朱里と栗夏が結婚することで、それらを公に使用しようと企んでいたというのである。

二人の結婚という結びつきがなければ、韻一族と栗夏の一族とが手を組むこともなく、お互いにライバル同士のまま緊張を保てるのだと。

だから、俺の所属している組織、つまり爺に命令を出している組織がそれを阻止しようと手を回したという分けだった。この組織こそが、この国を裏で牛耳っている組織でもあるのだ。

だが、俺が韻の地下組織を襲撃を企んでいることを知った裏の組織は、予め手を回し、韻一族との取り引きをし、俺の単独行動で地下組織を破壊することで、今までの悪事を水に流すことにしたという。

普段であれば、このように裏の組織が表に出てくることなどまず

ありえない。朱里を暗殺して終わらそうとしていたくらいである。
俺の身勝手な行動により、このような結果を招いたのだ。

だが、これで朱里と栗夏との結婚には障害がなくなり、二人は結ばれてもよいということになり、韻の一族は、栗夏の一族に吸収されるという形で幕を下ろすという筋書きにするというのである。

つまり、朱里は栗夏の召使のような立場に立たされるということであろう。

事態は何も変わっていなかった。いや、むしろ悪い方向へと流れ始めようとしていたのだ。

朱里を守ることが出来ると思っていたが、大きな力の前では俺など無力に等しいのかもしれない。

命を賭けてですら、彼女を守ることができないのだろうか。

まだ、ここで死ぬわけにはいかない。

第二章 プロセス（進化） 13

リコは注射器とバイアルを持っており、何かを調合しているところだった。

俺は目でリコに合図を送った。

リコはそれを受け、監視カメラに俺の口元が映らなくなるように体で遮る位置までゆっくりと移動してくれた。

「に・が・し・て・く・れ」

声には出さない。口を動かしているだけだが、リコも俺も口が読める。

リコは情に流されるような男ではない。非情で冷徹な人間なのはよく知っている。

それに、俺を助ければ、今度はリコが始末されることになる。

だが、今回の騒動は、結局はこの国のためになったのである。ただ、指令を無視しただけで始末されるというのも理不尽な話ではないか。きっとリコもそう思っていたに違いない。

「げ・ど・く・ざ・い」

リコは薬を調合をしながら少し間を取ってから続けた。

「じ・い・の・き・ん・こ・の・な・か」

そこまで口を動かすと、リコは再びゆっくりと体を移動させ、監視カメラに俺を映るようにした。

「この薬は、お前が破壊しようとした地下で作っていたものだ。まだ未完成だが、四十八時間で心不全を起こすらしい。残った人生楽しむんだな」

人体実験の最終確認として俺が利用されたわけだ。

つまり、人体実験は継続されているというのか。解毒剤までのだから。

監視カメラからよく見える位置で、リコは俺の腕に注射をした。得体の知れない液体が俺の中へと入ってくる。

これが俺に与えられてた罰だった。残された時間で解毒剤を手に入れなければ俺は病死することになる。

「それと、発信機付の手錠型爆弾な」

外すと爆発する。俺を自由にはさせないということだ。

そして、俺がどこに行くのかを監視する。下手に動くことは出来ない。

「リコ兄さん、ここはどこだい？」

見たこともない部屋であつた。朱里の家からは移されているのだからと予測はしている。

だが、爺の家から遠いとそれだけで時間がかかる。

爺の金庫というのは、いつもの骨董屋の金庫だ。

「ちょうどベタの街と、爺の家との中間くらいだ」

俺の知らない秘密施設は五万とある。

だが、位置からして、車で飛ばせば二時間ほどの距離だろう。

すぐにリコが手枷と足枷を外してくれたので、その部屋を飛び出した。

時間は一刻を争う。

第二章 プロセス（進化） 14

戸を開けて階段を上がると、そこは見ただこともない街だった。

服装は以前のままで、財布などはないが、三角形の板の入ったベルトはそのままだった。

三角形の板を一枚取り出し、頂点を使って道端に止めてあった、車の窓ガラスを破壊した。

車はナビ付のを選んだ。

運よく、ガソリンはほぼ満タンである。

直結してエンジンをかけることくらいは朝飯前だ。

急発進し、とりあえず移動しながら、俺はカプジへと車を走らせた。そう、ジェネの住む神に近いという場所だ。

ここからだと、二時間くらいで着くはずだ。爺の家からは少し遠くなるが、致し方ない。

アクセルをめい一杯踏んで、山奥へと入る。

前回来たときと、同じ場所に車を隠し、ジェネに教えてもらった抜け道を全速力で走った。

やがてジェネの大きな屋敷が見えてくる。

栈橋が降りてくるのを少し待って、橋の下を伝って玄関の前まで来た。

玄関の前に立っている二人の守衛を気絶させ、彼の指紋で中に入った。

以前のように監視カメラを誤魔化していくわけには行かないので、一気にジェネの部屋のある最上階まで駆け上がった。

途中、気付かれて、警備員に後を追われることになったが、それより速くジェネの部屋までたどり着いた。

「ジエネ、俺だ。ルイだ。開けてくれ」

扉にドアノブなどはない。

頑丈な扉だが、声は届いているはずだ。

「騒がしいわね」

そういつてジエネは俺を招き入れてくれた。

そしてすぐに扉を閉め、警備員に連絡をする。

「客人だから、大丈夫よ。何かあったらすぐ連絡するから」

扉の外まで追って来ていた数人の警備員達の足音が遠のく。

「助かった。有難う。ジエネ、急で申し訳ないんだが頼みがある」
さすがにこれだけ走ってきたので、息が上がっていた。

「いいわ。聞いて上げる。あなたには貸しがあるからね」
頼みの内容も聞かずにジエネは答えた。俺が彼女に出来ない頼みをしないことが分かっていたのかもしれない。

ここは地図には載っていない城。

神に近い場所として崇められ、そこに絵卑家の城があることは知られていない。

俺の手元の発信機が指しているは、ただの山奥に違いない。

そして、このカプジという場所には、特有の磁場があった。発信機もそれに同調させなければ、正確な位置は示さない。

「この手錠、外してもらいたいんだ」

小型爆弾のついた左手を差し出した。

絵卑の最新鋭の設備と知識とがあれば、きっと外せるであろうと踏んでここに来た。

「たぶん、うちの技術チームならできそうね」

そういつてジエネは電話をした。何箇所か連絡し、準備が整う。

「代償は大きいわよ」

得意げに鼻を鳴らすジエネは、まだ幼げでかわいらしかった。

「いやな奴を一人、殺してやる」

俺の仕事は殺し屋だ。

「頼む、ジエネ。俺には時間がない」

進む死のカウントダウン。残された時間はあと四十四時間。

ここでこの手錠が外れなければ、俺の未来はない。

第二章 プロセス（進化） 15

まずは、手錠をCTでスキャンし、内部構造を探る。

EPIの科学力は今や世界一だろう。彼等に出来ないことはない。

「あなたって、命を粗末にするのね」

ジェネは物見楽しそうにちよっかいを出して来る。

朱里の地下組織での一件は、全て揉み消されたと思っていたが、ジェネの情報網はそれ以上だった。

「で、惚れたの？あの娘に」

心の中を見透かされるような、ジェネと話しているとまるで自分が裸にされたような気分になる。

今更嘘をついてもしょうがない。

俺は真実をジェネに話した。

今、人体実験の最終段階であることも。

あと数十時間で病死することも。

「ふーん。解毒剤ね。副作用とかないのかしら。楽しみね」

退屈しのぎに丁度いいといった口ぶりだ。

こっちは生死をかけているというのに。

ジェネの屋敷へと着てから十時間が経過し、やっとのことで腕輪が外れた。

同時に、爆弾の処理も終り、安全な腕輪となった。

その腕輪を、宅急便で、朱里の家宛に送ることにした。

爆弾は外して、発信機だけなので、荷物が朱里の家に着くころには、俺は自由になっているはずだ。

「いろいろ世話になったな。この借りは必ず返す」

ジェネの家に滞在中には、食事、休憩を満足に取らしてもらった。さらに、武器として使えそうなものまで用意してくれた。さすがに銃などはないが、ナイフや、小型爆弾、携帯電話、そして金庫を開けるための特殊用具。

そして、俺がジェネの家に来たことなども、一切口外しないと約束してくれた。

リコの情報網を持ってしても、この絵卑家までは及ぶまい。晴れて俺は自由の身となった。

残りの時間は三十四時間。解毒剤の効果発現の時間も考慮すれば、あと三十時間くらいがリミットだろう。

ジェネの家からは、車を一台拝借した。いつまでも盗難車で逃げるわけには行かない。

後は爺の家へと向かうだけだ。

発信機は運搬屋に運ばれて、ゆっくり朱里の家へと向かっているはずなので、俺の足取りは追えまい。

三時間くらい車を走らせ、爺の家へとついた。骨頭屋は店番がいなく、『CLOSE』の看板が掛かっている。

裏口の鍵は古いものなので、すぐに解錠することが出来た。

中には人の気配はない。

早速金庫の鍵を開ける作業へと取り掛かる。

番号は、毎月変更されているので、無理やり開けるしかないのだ。

第二章 プロセス（進化） 16

三時間ほどかかって、金庫を開けた。

だが、中にはいつもの資料と、現金が少しだけ入っているだけだった。

「どういうことだ」

リコによると、ここの金庫には解毒剤が入っているはずだった。まさか騙されたのか。

内腔は小さな金庫なので、見落とすといったことはありえない。

ガチャ

突然、鍵を開けドアノブの回す音が聞こえた。

一瞬、緊張が走る。俺がここに来るということは、リコ以外知れないはずだ。

気配を殺し、様子を伺う。

「だれかいるのか？」

少ししゃがれた太い声。まるで男のような風貌を好んでしているが、本当の容姿はとても綺麗だ。目鼻立ちがはっきりしており、外人とよく間違われるのも納得がいく。

そう、俺の妹として育てられたアデノだった。

「さすがだな。完全に気配は消していたつもりだったけど」

アデノに会うのは2年ぶりくらいだった。彼女の仕事は俺のやらない殺しを引き受けることだったので、直接会う機会はそれほどなかった。

「ルイ。あれ？ もうすぐ病気で死ぬって聞いていたけど。元気じ

やん」

俺が死んだ後釜は、アデノが殺しの仕事を引き継ぐ算段なのである。

だから、彼女がこの爺の金庫へ情報を取りに来たのも納得がいく。俺とアデノは歳が近かったせい、小さい頃から仲がよかった。

「ああ、もうすぐ死ぬんだ。下の金庫の鍵は持っているか？」

骨頭屋の地下室には、別の金庫があった。普段は使っておらず、長期保存されるような機密書類などを専用に入れておく金庫だ。骨頭屋には金庫は二つしかない。

「死ぬ前に、忘れ物を探しにきたんだ」

アデノが事の真相を聞かされていないのが幸だった。もし、知っていたら、彼女とも戦わなければならない。

彼女も俺と同じ訓練を受けており、相当手強い。出来れば殺し合いたくはない。

「死ぬ人が探し物ね。からかってるんでしょ、まったく。あるよ。はい」

そういつて、アデノは下の金庫の鍵をよこし、番号も教えてくれた。

下の金庫はすんなりと開き、中には何種類かのバイアルのセットが入っていた。

これが解毒剤だ。

これで助かった。

リリリン リリリン

突然電話が鳴った。

この電話が鳴るのは、決まって爺からだ。アデノに連絡をよこしたのだから、俺がいることがバレてはまずい。発信機は朱里の家

へ向かっているはずなのだから。

「はい。アデノです」

何も知らない彼女は受話器を取った。

俺はバイアルと注射器をポケットへと突っ込み、すぐに部屋を出た。

ここまで来て捕まるわけにはいかない。

この解毒剤が効いてくれば、俺の命は継がれる。

下の金庫の中には、見覚えのあるものが入っていた。

そう、あの三角形の板のようなものだ。

朱里の持っていたものと同じ、石のような素材で出来ている。

俺は思わずその板も手に持ってきていた。

なぜここにあるのか分からないが、何かに引き寄せられるように、その板は俺の元へとやってきたのだ。

これで四枚の三角形の板がそろったことになる。

そう、運命への序章への足音が、もうそこまで来ていたのであった。

世の平穏は続く。人々は毎日をただ過ごすことにだけ注力し、なるべく悩みなど少なくて済むように祈っている。

それらを横目に、一部の金持ちと権力者がのさばり、彼等の欲のために日々が浪費されていく。

明日は結婚式のパレードが行われる。そして明後日にはいよいよ結婚式の予定だ。

街はお祭りムード満載で、多くの旅行者や、各国のお偉いさん方、有名人が来ていると噂されていた。

普段見慣れない人々が多くなっているので、少しの変装で俺は街へと忍び込むことに成功していた。

解毒剤を手に入れてから三ヶ月、俺は姿を消していた。

誰にも会わず、誰とも連絡をとらず。

生きている痕跡を一切消し去って、この日を待っていた。

俺が解毒剤を手に入れ生きていることを知って、おそらく爺達が俺を必至になって探しているだろう。

俺はひたすら山奥へと入り、生き延びた。

そして決意した。生きる目的を手に入れるために。

「ミイフ、頼んだぞ」

俺は再びベタの地へと戻ってきた。そして計画を実行する。

地下組織の一件は全て闇に葬られたが、その真実を知るシーズと

ミイフは俺の味方でいれてくれたことが何よりも救いだった。

ミイフは信頼のおける運び屋だ。彼に計画の全貌を認めた手紙を、朱里へと届けてもらう。結婚式を前に、朱里の警備は一段と厳しい

ものになっており、一般人はおるか、ほとんどの人は彼女には近づけなかった。

だが、ミイフは運搬業者として朱里に近づける数少ない人の一人だったのだ。

「今度こそ年貢の納め時かもな」

そういつて、二度目の晚餐を俺とミイフとシーズで酒を交わしていた。

地下組織の襲撃は、俺一人の単独行動ということになっており、シーズやミイフは疑われていなかった。だから、シーズの家にはあの時のまま、俺の車と武器弾薬が保管してくれていたのだ。

三人で飲むのも、これが最後であろう。

「まさかルイが生きているとは思わなかったがな」

酒に浸れるとシーズはいつものように上機嫌だ。

公には、俺は始末されたことになっている。罪状は朱里の暗殺を企んだとか。やつらにとって都合のよい解釈が正義なのだ。

「今回も、あんたらは無関係だ。知らぬ存ぜぬで通してくれ」

俺の身勝手な計画に、二人を巻き込むわけには行かない。

ミイフのお陰で、アルフの街の詳しい情報が得られた。

朱里と栗夏の結婚は予定通りだが、やはり韻一族は栗夏の一族の傘下へと入ることが確約されているようである。栗夏の一族は二十歳を迎えると栗夏一人に全ての権限を与えることになっており、栗夏が実権を握れば、ベタの街もどうなるか分かったもんじやないと。

だが朱里は逆らえず、ただ、言われるがままに従うしかなさそうだという。

韻の一族が存続できるかどうかは、朱里の肩にかかっているのだ。

それを知っている栗夏は、朱里を思いのままにするのであろうと民衆は気に病んでいるという。

その現実には耐え切れず、朱里は毎日泣いているという噂であり、彼女は鬱病になってしまったという噂もあった。

噂はあくまで噂だが、遠からずであろう。

このままでは、この国のためにもならない。

何より、朱里が幸せになどなれやしない。

俺たち三人は互いの意志を確認し合った。

「さあ、祭りが始まるぜ」

万全の準備が整い、パレードが始まった。

盛大な空砲とラッパの音がけたたましく鳴り響き、ベタの朱里の家の前から大通りを抜け、大きな橋を渡り、一度アルフへと渡る。朱里と栗夏の二人はオープンカーへと乗り込み、待ち行く人々に手を振り愛想を振りまく。

警備は厳重を極め、大きな建物などには監視の者が多数配置されていた。

二人の結婚は、この国の将来をも左右する重大な意味を持つ。

アルフでは街を一周し、栗夏の城の前を抜け、再び大きな橋を渡ってベタへと戻る。皆が歩いてもついてこれるようなゆっくりな速度で、一日がかりのパレードだ。

その後、二つの街を見下ろせる高台のある教会へと行き、そこがゴールである。そして翌日、その教会で式が執り行なわれることになった。

俺は二人の車が、橋を渡ってベタへと戻って来た所で待ち構えていた。

丁度橋を渡りきった所に、使われていない三階建てのビルが建っており、屋上に見張りが一人いるだけであつた。そしてビルの前の警備をしているのがシーズだ。橋を渡った場所の警備の責任はシーズに任されており、屋上の見張りは麻酔銃で眠らせてある。

橋をゆっくりとこちらへ進んでくる車が見える。

その上には、栗夏と朱里が微妙な距離を保ちながら愛想を振りまいているのが見えた。

ウエディングドレスに身を纏った朱里は、すごく可愛いらしかっ

た。

一族のために自分を偽性にし、夢も希望もない結婚を虐げられた彼女のことを思うと、胸が苦しくなった。

だが、それも今日もまでだ。

車が橋を渡り終え、空きビルの前に差し掛かった時に、爆発が起った。

予め道の四方八方に仕掛けておいた煙幕だ。

風はそれほど吹いていなかったので、煙幕はもうもうと上へ上へと舞う。

煙は朱里達の乗っている車をすっぽりと覆い、周りにいる人たちまで巻き込んだ。

視界はほとんどない。眼を開けると煙が目に入り痛いので、眼も開けられない。

煙幕の少し前方に囷の爆弾が仕掛けてあった。

煙幕と同時にその爆弾も爆発するようにしており、皆の注意をそちらへ反らす。シーズがうまく誘導してくれていたので、警備員達は煙幕の中を、前方の爆発へと注意が向いていた。

「さあ、朱里。行こう」

俺は煙幕の中をゴーグルをしてそつと朱里の車へと近づいた。

朱里は手紙の指示通り、眼をギュツと固く閉じていた。

「き、貴様！ なに奴だ」

煙に巻かれながら、必至に眼を開いている栗毛が横で息巻いている。

そして、拳をこちらめがけて振り上げた。

「お前に朱里を幸せにする資格はない」

カウンターで俺の掌が、栗夏の顎へとヒットする。そのまま栗夏は気絶した。

栗夏も相当訓練を受けており、身のこなしは一流のものだが、煙の前には成すすべなしであった。

「もう、思い残すことはないわ」

そう言って朱里は俺の手をギュツと握り返してくれた。それは彼女の選択だった。一族を捨てて、しがらみから開放されて、自由の身へ。自分の幸せのために。

朱里は俺の手からゴーグルを受け取り装着した。

「ルイ、生きていてよかった」

おもわず抱きしめたくなったが、今は時間がない。朱里を車から降ろし、すぐ脇にある空きビルへと滑り込んだ。

空きビルの中へ入ると、地下へと続く階段があり、俺と朱里は急いで駆け下りた。

昼間であるが、地下は薄暗い。だが、予め用意しておいたロウソクのお陰で躓かずに進むことが出来た。

「さあ、着替えて」

地下には朱里に合う洋服が用意しておいてある。動き易い格好で、靴もスニーカーを用意した。顔を隠すように帽子も用意したが、これは男物だ。逃げることに最優先される。なるべく目立たない方がいい。

「隣の部屋でまってる」

少し気を使い、朱里を一人にしたが、全ては計画の通りだった。無駄な時間はない。

朱里が着替えをしている間に、俺は予め穴を空けておいた床に縄はしごを下ろす。その下は地下道になっており、用水路が通っていた。

「準備できたわ」

Tシャツにジーンズという、色気のない服装だが、それでも朱里の可愛さは際立っていた。

脱いだウエディングドレスは、ダンボールへと詰められ、そのままミイフに朱里の家まで届けてもらう手はずになっている。

地下道を用水路伝いに水の流れる方向へと行くと、ベタとアルフを結ぶ運河へと出る。

用水路の最後は鉄格子が嵌っていて、人が通ることはできない。

背後から、追っ手が来ている声がする。急がねばならない。

鉄格子に仕掛けてあった小型の爆弾を遠隔起動させ、鉄格子を吹っ飛ばした。

同時に、橋の背面に隠してあった小型ボートの固定してある綱も切れるようにセットしておいた。

鉄格子を抜けると、目の前にボートが落ちてくる。

朱里の手をしっかりと握り締め、朱里も遅れまいと必至について来てくれた。

もう、この手は離さない。

「頭を低くして」

ボートに乗り込んだ当たりで、警備員達に追いつかれた。やつらは拳銃を乱発してくる。

小型のボートは勢いよく滑り出し、あっという間に敵を豆粒くらいに見えるほど遠ざかり、自由の海へ先へ先へと進んだ。

「朱里、ありがとう。よく決意してくれたね」

陽はまだ高く、水面に反射する光りもまた心地よかった。

なにより、そこに朱里が居る事がうれしかった。

「ううん。こちらこそ。ルイがしてくれたことは、全て私のためだったのね。ありがとう」

少し照れながら、そっと近くに朱里の匂いがした。

今まで感じたことのない感情、暖かくゆっくりとした包み込まれるような空気。

「昨日ね、父と母と話をしたの。父と母がしたことは、許されないことだし、栗夏の悪態も事実だったし。それに私が結婚したところ

で、ベタの街はもう栗夏のいいようにされるだけだし……」

悔しさからだろうか、寂しさからだろうか分からなかったが、朱里の眼には涙がいつぱい溜まっていた。

拳は力強く握り締められ、その拳の上に涙が伝う。

「心配しなくてもいい。君は俺が守る」

片手でハンドルを操作しながら、もう片方の手で朱里を抱きしめた。

「二人でなら幸せになれるさ」

なんの根拠もなかったが、自信だけはあった。

世界を敵に回しても、悪魔と手を組んでだって、彼女を守りきる。それが俺の存在している意義であり、使命であり、希望であり、願望でもあった。

川を下り海が近づいて来たときに、後ろから何台ものヘリコプターがこちらへやってくるのが見えた。

ボートを海岸の岩場へと着け、俺と朱里は降り、ダミーの人形をボートに乗せて、無人のボートを再び海へと出した。少くくは時間稼ぎをしてくれるだろう。

岩の間を抜けた所へ、以前シーズの家に隠しておいた車を移動させてあった。

何もかもが予定通りだ。

朱里を乗せ、車を出した。

急がないと、道は封鎖され検問に捕まるだろう。

ベタの街を出る時に、教会のある高台が見えた。遠くではあるが、人の姿が確認できる。

「お父様、お母様。ごめんなさい。ありがとう」

朱里は両手を合わせ祈るように眼を閉じた。

朱里の勝手な行動が、今後の韻一族への叱咤へと繋がることは想像に容易い。

それを承知の上で、朱里の両親は、朱里を行かせたのである。自分たちの罪を認め、朱里に最後の希望を託したのであろう。立派な両親なのだと、敬愛した。

「これ、持ってきたわ。三つも集めたって本当？」

朱里の三角形の石をあわせると、全部で四つになる。

もし、正三角形の板が全部で六つあるとすれば、四つは必ずどれかと隣り合うはずだ。

朱里は助手席で四枚の板と睨み合っていた。一個ずつ合わせてみ
ては外してを繰り返す。

「あ！ 合った。ルイ、すごいよこれ。合わせ目がまったく無くな
って、融合したみたいに見えるけど、外せば元に戻るの！」

まるで初めて玩具を見た子供のように、朱里は目をキラキラと輝
かせていた。

「いったいどんな人が作ったんだろう。あれ？何か書いてある」

辺りは夕刻を迎えつつあり、夕日に空は赤く染まり始めていた。

その赤い閃光が三角形を貫く時、板の真ん中に文字らしきものが書
かれているのが分かった。

光りを通す金属の板。もしかすると板に空洞が出来ているのかも
しれないが、なんとも不思議な現象だった。

「金属の方が、H - r a s と K - r a s 、石みたいな方が、L
- m y c と C - m y c って書いてあるわ。どういう意味かしら」
その文字の意味する所は分からない。暗号なのか、それともただ
の名詞類なのであろうか。

いずれにせよ、何かのつながりによって六枚の板は響きあってい
るような気がする。

そして今回融合したのは、四枚のうち『H - r a s』を除くのも
三枚だった。

三枚は石質と金属質のように思っていたが、融合して一つの板と
なった。

不思議な板。偶然の出会い。

俺と朱里が出会ったのも、そんな偶然の一つだったのかもしれない。
い。

「素敵なベルトね」

三角形の板を仕舞っておく用の革のベルト。六つの穴を用意し、四つまでが埋まった。

「朱里にあげるよ」

彼女には少し長めのベルトだが、ジーパンにはよく似合った。

「きっと全部集めると何かいいことがあるわね。夢がかなうとか。物語はだいたいそういうのが多いから」

あどけなく笑う朱里の横顔がとても綺麗だった。

今がずっと続けば良いのにと、心から願った。

警察や警備員などの追従を免れ、ベタの街を出た。

行く先など決まっていはいないが、俺の計画はここまでで、この後は成り行きに任せようと思っていた。

とりあえず、俺のアジトへと向かう。爺に知られていない隠れ蓑がまだあった。

そこなら、当分の間は見つからずに済むだろう。

車を走らせること四時間と少し、途中買い物に寄り食料品などを買い込み、アジトへと着いた。

辺りはすっかり暗くなり、ホツと一息つき、テレビをつけると、大変な騒ぎになっていた。

どのチャンネルも緊急特番として、朱里の誘拐騒動を報じていたのである。

煙幕の中、かすかに俺の顔が映っており、犯人として、全国へと一斉指名手配とされていた。

そして悲劇の主人公として、栗夏が涙ながらに訴えているのである。

「私の愛する人を返して下さい。非道な誘拐犯を私は決して許さない」

栗夏の演技も見事なものだが、朱里を思いどおりに出来ないという下心が見え見えだ。彼等にとって都合のよいことだけが真実なのである。

そして、彼等の追従を逃れるのは簡単な事ではなさそうだ。

「逃げ切れるのかしら」

朱里は不安そうな面持ちでテレビを見つめていた。

今まで箱入り娘として育てられてきた彼女にとっては、このような非現実的な境遇に戸惑っているのだろう。

「大丈夫。俺が命を賭けて守るから」

そう言いながらテレビを消した。真実は二人だけのモノで、それだけでよかった。

「でもこの街には俺の顔を知っている人が大勢いるからな。明日の朝には発とう」

朱里との二人の時間は愛おしく、いろいろな事について語り合った。家族のこと、結婚のこと、お互いの気持ち、そしてこれからのこと。

俺の身勝手でこのような形でしか朱里と一緒にいれないことが残念だったが、後悔はしていない。

「お誕生日おめでとう」

丁度十二時を回った時だった。

そう、朱里の二十歳の誕生日。本当であれば、今日は彼女の結婚する日でもあった。

お祝いにと、さっき買った小さなショートケーキ。

ロウソクに火をともし、二人の間に邪魔をするものは何もない。

そっと近づくと、朱里は静かに眼を閉じた。

熱い口付けは二人を包み込み、俺の心は朱里に包まれた。

決して結ばれてはいけない二人。出会ってはいけない異世界の臨界。

神の定めた順列には、決して背けない。

朝、朝日が昇ろうかという早い時間に出発した。

とりあえず地図を片手に、なるべく人里離れた場所を目指して。とにかく捕まってはお終いだ。

ありつたけの武器と食料とを車に積み込み、ランゲルとは反対の方向へと進むことにした。

「悪かったな、こんなことになってしまつて」

世間では、彼女は人質として脅迫犯に連れ回されているところになっている。

悪者が俺一人であることは都合がよかったが。

「ううん。後悔はしてないから。もう、栗夏の顔を見るのもイヤだし」

昨日の疲れも尾を引いている様子もなく、彼女の声は軽やかだった。

運命の選択の後であつても、持ち前の明るさと、心の強さがうかがい知れる。

「せっかくだから、旅行気分で」

どこまで逃げ切れるか分からないが、もしかするとずっと二人でいられるのかもしれないと、この時は真剣に考えていた。それに、逃げ切れる自身もあつた。

朱里という、守るべきものが出来た以上、どんな相手であろうと屈するわけにはいかない。

いき行く街々では、車の中でも姿勢を低くし、なるべく顔をみられないようにして先を急いだ。

大きな道路などでは検問も実地されているところが多く、地図に載っていないような小道やわき道を選び、人里離れた場所へと進む。ガソリンスタンドは、無人の所が何箇所もあり、人と接触することなく走り続けることが出来た。

三日三晩走り、途中、車で過眠してきたが、さすがに朱里も限界に来ていた。

「ここら辺で休もうか」

辺りは街灯すらない山奥。

虫の声しか聞こえない。

もう何時間も走っているが、家なども見かけていない人気のない場所だった。

舗装された道からは随分離れ、砂利道が続く。

「そうね。こんな場所まで、警察などもこれないでしょうしね」

やっと二人でゆっくりとした時間が取れる。本当は風呂などにも入りたいだろうが、贅沢はいってられない。

昼間に、小川で体を清めるくらいが関の山だった。

「あつ、見て！ 家があるわ」

朱里の指差す方を見て見ると、うつすらと明かりが灯されている家が見えた。

辺りは薄暗くなり始めており、霧が出てきていた。これ以上車を進めるのも限界だった。

俺は車を明かりの点いている家の前に止め、木で出来た引き戸をノックした。

今では珍しくなった藁葺きの屋根がどっしりとした、風情のある家だった。周りには、畑や田んぼが一面を覆っており、裏庭には、水路と水車が見える。

明かりは障子越しに漏れ、中から煮物のいい匂いがしていた。

しばらくすると、中からゴソゴソとした音が聞こえてきて、引き戸が開いた。

「お夕飯時にすみません。道に迷ってしまいまして。宜しければ少し休ませてもらえませんかでしょうか」

車のほうを見て、朱里がいることを知らせる。

電線などがないので、テレビなどはないだろうと推測できたし、こんな山奥まで俺の指名手配の情報が流れてきているはずがないであろうと思っていた。

「まあ、それは大変でしたね。さあ、遠慮なさらずに中へどうぞ」
中から出てきたのは、まだ若い娘だった。朱里よりもまだ若い、十五、六歳といったところだろう。

朱里と俺とを招きいれ、座布団を用意してお茶を出してくれた。

話によると、この娘さんのご両親は早くに他界し、祖父に育てられていたが、その祖父も病に倒れ、先日亡くなったということだった。身寄りもなく、どうしようかと悩んでいるという。

祖父が病に倒れてからは、畑などの仕事も、家事も料理もすべて彼女が一人でやってきたので、食べるには困っていないという。

「今晚は泊まって行って下さい」

久しぶりに話す同世代の女性の朱里を親密に思ってたか、若い娘さんはとても親切にしてくれた。

カキーン

夕食を頂き、くつろいでいた時に、立ち上がろうとした朱里の腰のベルトから、突然三角形の板が滑り落ちた。

皮で作ったベルトなので、易々とは落ちないはずなのだが。

「あ！オンコジーン」

人里離れたど田舎で、若い娘が、三角形の板を見て名前を呼ぶ。一瞬、耳を疑ったが、明らかに板を見ての反応だった。辞書や歴史ものなどには一切情報が載っていない代物であるのにも係らず、それを彼女はオンコジーンと呼ぶのだ。

「知ってるの？」

半信半疑で聞き返すのも無理はない。朱里も不思議に思っていた板なのだ。初めての情報。

「全部で四つあるんだけど」

朱里は腰ベルトを外し、娘に見せた。娘は目をキラキラとさせ、四枚の板を繁々と見つめる。

「伝説は本当だったんだわ……。仙人の言われていた通りだった……。あなたたちが選ばれし者なの？」

それは古くから伝わる伝説だとういう。昔話として伝えられ、娘は仙人から一度見せてもらったことがあるという。

ただ、昔話なので、詳しくは仙人に聞いてみないと分からないという。

「その仙人とやらに会わせてもらえないだろうか」

娘は快く引き受けてくれた。彼女の話だと、仙人は日中しか面会できないということで、明日まで待つことになった。仙人は普段は人と会うことはなく、一人で行に入っているという。

「じゃ、明日までゆっくりしていつて下さい」

追われるようにしてこんな山奥まで来たが、そこで三角形の板の情報が得られるとは思ってもみなかった。

これもまた運命なのだろうか。

板に隠されし真実と、娘の言う伝説とが、俺達を引き合わせここへと連れて来たともいうのであるうか。

その日は久し振りにゆっくりと眠ることができた。

山奥では雑音の類など一切なく、まるで大自然の中で眠っているような感覚だった。

安らかなる眠り。その時は、追われていることなどまるで忘れていた。

次の日、太陽が昇るのをゆっくりと待って、仙人の処へと案内してもらった。

仙人は山頂に住んでおり、下界とは一切のコンタクトを絶っているそうだ。

険しい山肌を、娘の道案内を頼りに、ひたすら登り山頂を目指す。

二時間ほど登ってやっと山頂へとついた。

小さな壊れかけの納屋が一つ。それが仙人の住居だという。

「仙人様。お話をお伺いしたいのですが」

なかなか気難しい仙人だそうで、滅多に会話はしないということだった。

娘も直接話をしたことはなく、祖父に連れられて何度か面識がある程度だという。

「以前、仙人様に見せてもらったオンコジーンと同じものを持っているという方がみえているのですが」

娘はそこまで言って、あとはじっと待っているだけだった。

納屋の中から物音が聞こえる。

しばらくして、納屋の戸が開いた。

「今、なんと申した？」

ゆつくりと長い丈の白装束を身にまとった白髪の老人が出てきた。髭はボサボサで、長らく手入れはされていないようだ。頭のとっぺんはすっかり髪が抜けおち、太陽に反射するくらいすすきりとしている。

靴などは履いておらず、裸足のまま、木の枝を設えた杖を頼りにこちらへと向かって歩いて来る。

「これがオンコジーンなのでしょうか？」

俺は四枚の板を見せた。それを食い入るように見つめる。そして、俺の手から板を取り、納屋の横に置いてあった水ガメに浸した。そして、太陽にかざす。

四枚とも同じように太陽にかざして見てから、仙人は口を開いた。

「確かに、これらはオンコジーンじゃ」

オンコジーンはある一定の波長の光を受けると、中に文字が浮かび上がるという。

水に浸し、日光にかざすことで、一瞬、中の文字を読む事が出来るというのだ。

「オンコジーンは全部で六つ」

ゆつくりと岩へと腰を下ろし、仙人は話始めた。年齢はどのくらいか想像もできなかったが、口調はしっかりとしていた。眼光の鋭さも人知を超える。

「刻まれし文字は、二種類ある。片や金属で作られし変化を呼び起こす『r a s』系の三枚と、片や翡翠で作られし永遠の魂を呼び起こす『m y c』系の三枚。そして、導かれし者が、三枚の板と三枚の石とを集める時、奇跡が起こる。それはいかなる者も止めることは出来ない奇跡なのじゃ」

仙人は遠くのほうを眺めながら続ける。

「そして、オンコジーンは持ち主を選ぶという。わしが導かれし者だと思っておったが、どうやら違ったようじゃな」

仙人は再び納屋へと入っていった。

取り留めのない昔話に、俺たちは戸惑うばかりだった。

「さあ、導かれし者よ。もってゆけ。そして奇跡を起こすがいい」
仙人が納屋の中から持ってきたのは、もう一つのオンコジーンだった。水に浸して日光に透かすと『N - m y c』と書いてある。そう、永遠の魂を呼び起こすための翡翠で出来た三角の石だったのだ。

仙人が長らく生きながらえてこれたのは、オンコジーンのお陰だったのかもしれない。

残るオンコジーンは唯一つ。仙人の話によれば『N-ras』と刻まれているはずだという。六つの板が融合するときに、奇跡は起こるのだと。

「だがな、所詮は太古の昔話じゃ。今までその封印を解き、奇跡に巡り合えたと言う話は聞いたことがない。つまり、伝えられていない部分が存在するということじゃろう」

これがオンコジーンの伝説。決して伝えられてはいけない禁断の紋章。

何かしらのリスクを案じる仙人を横目に、与えられしパンドラの箱を開けなくなった。

仙人に礼を言って、俺たちは山を降りた。

この後、この仙人に会ったものはいない。

「こんな昔話を本当に信じているの？」

五つ揃ったオンコジーンを目の前にしても、朱里はまだ半信半疑といった様子だ。無理もない。降って沸いたような話なのだから。

「迷信の類は信じていないが、さすがに五つも集まると何か起こるような気がしてくるじゃないか」

火のないところに煙は立たない。昔話になったからには、このオンコジーンにもきつと何か根拠があるのだろう。奇跡という扉の向こうに何があるのか。いったい誰にとっての、どんな奇跡が起こるというのだろうか。

「さあ、先を急ごう」

こんな山奥まで警察などが追ってくるとは思えなかったが、田舎の親切な娘にこれ以上迷惑を掛けるわけには行かない。

身寄りのない娘に、朱里は、朱里の家に来て働かないかと提案し、泊めてもらったお礼とした。

「閉じる」

それから二日ほど移動し、小川で体を休めていた時、突然頭上をヘリコプターが通過した。

これほど山奥にヘリコプターが来ることは珍しい。と言うより、見つかったと考えなければなるまい。衛星写真が何かに移動している車が移ったに違いない。そうでもしなければ見つかる筈などないのだ。

「逃げよう」

急いで車に乗り込み、発進させたが、道は砂利の凸凹道だ。思うようにスピードは出ない。

旋回してこつちへと戻ってきたヘリコプターを見たとき、啞然とした。

それは軍事用の超高速でも飛べる戦闘タイプのヘリコプターだったのだ。いつもものミサイルを搭載しており、後ろには何十人も人が乗れるスペースもある。

しかも、ヘリコプターは三台も来ていた。

そのうち二台のヘリコプターからは、ロープを伝って人が降りてくるのが見えた。

俺は運転しながら拳銃でヘリコプターを狙ったが、ビクともしない。防弾ガラスに特殊加工の機体の前には成す術がない。

一方、向こうの攻撃は容赦ない。小型ミサイルを次々に打ってくる。だが、微妙に車をずらして狙っているのは、朱里の安否を気遣ってのことだろう。

それでも車はミサイルを避けるのと、道の起伏とに右往左往し、崖の一手手前で横転して止まった。

ひとまず、朱里に怪我はないが、シートベルとを外して車の外へと脱出するのに手間取った。

その間に、武装した兵士達に回りを囲まれてしまった。

背後は崖、前方には十名を超える兵士。

横転した車を盾にして様子を伺う。

万事休すか。

ここで戦闘を初めてもよかったのだが、それでは朱里を巻き添えにしてしまう。

俺が発砲すれば、向こうも容赦ないであろう。

悩んだ末に、俺はひとつの答えを出した。

「朱里、君の事を誰よりも愛している。だから、君を傷つけるわけにはいかない。俺の分まで生きてくれ」

車が横転した時に、足をやられたようだ。左足の感覚がなかった。

これ以上の逃避は無理であった。

「だめ。私も共犯よ。一緒に捕まりましょう。そして一緒に……」
それ以上朱里の口から言葉が漏れないようにと、口づけで塞いだ。

朱里の目からは涙がこぼれ落ち、俺は力いっぱい彼女を抱きしめた。

「羽衣、おとなしく朱里さんを渡すんだ。無駄な抵抗は死を早めるだけだ」

横転した車越しに音声拡声器で声が響く。周りは完全に包囲されたのだ。

しかも、俺の素性は完全にばれているようだ。

俺を仕留めるために、警察などにも情報を流したに違いない。

「きっとサイモシンの声だわ。話せばわかってくれるかも」

以前、朱里の護衛についていたサイモシンが、今は特殊部隊の指揮をとっているのだろう。相手が知り合いで少しほっとした。手荒な真似はしてこないであろう。

「よかった。これで君は助かる。いいかい、俺に連れまわされていたこといするんだ」

そう言って俺はロープで朱里の両手を縛ったり、ガムテープで朱里の口を塞いだ。

「撃つなよ」

俺は両手を見えるように高く挙げ、武器などを持っていないことをアピールした。

朱里の人生をよりよいものに変えようと志したが、所詮俺一人の力ではどうにもならないことだったのかもしれない。現実から逃げる事が精一杯の抵抗だったのだ。非力な自分が情けなく、悔しかった。

「隙を見つけて逃げるから、安心して」

最後にそれだけ言っただけで笑顔を作った。さようなら朱里。心の中ではそう呟いていた。

捕まれば最後、きっと極刑になるだろう。つまり死刑。

俺の知る限り、いくら悪あがきをしたところで、逃げることなど出来やしない。

こうして俺は捕まった。無駄な血を流さなくて済んだが、結局朱里を守りきることができなかった。

サイモシンに手錠を掛けられ、ヘリコプターへと乗せられ、連行される。行き先は刑務所であろう。

「彼女はどうなる」

俺の行く末などはどうでもよかった。気になるのは朱里の進退である。メディアによれば、彼女は全くの被害者ということになっていた。

「ああ。おそらく栗夏様とご結婚されて、幸せになられる」

サイモシンをはじめ、彼等護衛部隊が国家の安全を守っているのである。

そして、誰も栗夏がひどい男であることを口にはせず、朱里が幸せになるものと信じている。

「そして、お前はたぶん、死刑台へと送られるだろうな。国家一級の犯罪者だからな。栗夏様が全てを仕切っており、誰も異論はないからな」

栗夏は俺に殴られたことを根に持っているのかもしれない。

それとも、花嫁を奪われた屈辱が、奴のプライドを傷つけた仕返しだろうか。

どちらにせよ、相手が悪い。

公平な判断が出来る相手ではない。

奴が死刑といえば、死刑となるのだ。

ヘリコプターの着いた先は、脱走不可能で有名な、凶悪犯の収容

される刑務所『レバ』だった。

レバは島になっており、朱里等が住んでいるランデルの海岸から見える位置にあった。

レバに着くと、いきなり拷問室へと連れて行かれ、殴る蹴るの暴行を受けた。目的は、朱里を誘拐した動機を吐かせるというものだった。

俺は正直に、栗夏の悪行を並べたが、相手にされず、意識がなくなるまで続けられた。

足の傷もそのままで、ろくに動かない。

手錠に足枷が重く、呼吸しているのがやつとの状態だった。

「おい、犯罪者。眼が覚めたか」

水を被せられ、うつすらと目を開けると、そこには栗夏が来ていた。

暴行されて口の中には血が溢れており、話すことも出来なかった。

「いいか、よく聞け。お前に朱里は渡さない。朱里は俺のものだ。あんないい女はそうそういないからな。俺の好きにする。彼女もそれを望んでいる」

栗夏はこれでもかと思下し、優越感に浸っている。

床に横たわりながらも、栗夏を睨み付けるくらいしか、今の俺には出来なかった。

「そして、お前は死刑だ。それも屈辱的に、公開処刑にしてやることにした。ありがたく思え。しかも、朱里の目の前で殺してやる。ざまあ見ろだ」

やはり大分性格が歪んでいる。こんな奴に朱里をいいようにされるのかと思うと、腹立たしくて憎かった。

「今から一カ月後に、俺様と朱里との結婚式をやることにしたからな、お前の処刑の日もその日にしてやる。精々一ヶ月の間、もがき苦しむがいい。毎日集団リンチのメニューを加えておいてやったからありがたく思え」

今回の暴行も、おそらく栗夏の指示だったのであろう。
どこまでも卑劣な奴だ。

「処刑台に立つまで、死ぬんじゃないぞ。はははは……」
声高らかに部屋を出て行く栗夏を見送り、俺は現実を受け入れるしかなかった。

死ぬ前に、もう一度朱里に会える。そう思えるだけで、一ヶ月の間、生き永らえる意欲が出てきた。

そして、牢獄での、集団での暴行が日課の毎日が始まった。
ひと月後、死刑執行の日まで。

第四章 イニシエーション（開花）

1

……その後、朱里は ……

「ご無事でなによりでした」

縛られた縄を解き、口にされたガムテープを外してくれたのはインフェだった。彼はいつも優しく接してくれる。兄のような存在だった。

「ええ。ありがとう」

ヘリコプターの音で耳が痛かったのと、ルイが捕まってしまったことで心が痛かったのが重なり、それ以上話をする気分にはなかった。

ルイの乗っているヘリコプターが前方に見え、彼はそのままレバへと送られるのであろうと予測できた。

「ルイ、死なないで」

彼なら逃げ出せる。きっと何があっても。根拠のない自信、というより願望に希をかけるしかなかった。

日に日に彼を思う気持ちが自分の中で大きくなっているのにも気がついていたし、その気持ちに嘘はつきたくなかった。

ヘリコプターは直接、自分の家の屋上へと帰還し、屋上では父と母とが揃って出迎えてくれていた。

全てを知って見守ってくれた父と母には感謝の気持ちで一杯だった。

「お父様、お母様。ご迷惑をおかけしました」

父と母は何も言わず、ただただ、抱きしめてくれた。

「帰って来て草々で何なんだが……」

父は口ごもりながら話を始めた。父にとっては、韻の一族を守ることが何より大切なのは分かっていた。それでも、自分の人生は自分で責任を取りたいと、今は強く思っている。それもルイという心の強い人に会えたお陰だったのかもしれない。

「実は、栗夏殿から、結婚式をひと月後に執り行いたいという申し出があつて……」

申し訳なさそうな父が少しかわいそうにもなったが、父は父なりに考えてのことだろうと憶測した。

「そんなに早く？　栗夏さんはもう少し節度のある方だと思つていましたわ」

もちろん、父も栗夏の女癖の悪さや卑劣さは話してある。それでも嫁に行けというのだ、一族のために。

悲しさを通り越し、哀れむしかなかった。

「わかりました。お受け致します。そう栗夏殿に伝えてください」
今回のルイを捕まえるにあたって、騒動を大きくしたのは間違いなく栗夏であろう。おそらく、ルイの犯罪、刑罰など、すべてに口を出しているはずである。

そして、処刑が決定されれば必ず栗夏が立ち会つてであろうと考えた。

つまり、栗夏にくつついていれさえすれば、ルイに会えるかもしれない。もしかしたらルイを助け出すチャンスがあるのかもしれない。

甘い考えなのかもしれないけれど、今の私に出来ることはそれぐらいしかなかった。

一か月もの間、栗夏と親密にならなければならぬ屈辱は耐えがたいものだろう。

だけど、ルイが殺された後のことはなるべく考えないようにした。そうしないと自分の心のコントロールができなくなりそうだったから。

万が一、ルイを助ける手だてがあるのなら、それに全てを賭ける覚悟をしていた。

ひと月後に結婚式が執り行われるというニュースは、瞬く間に全国へと知れ渡った。栗夏が大々的にマスコミ発表をしたおかげだ。それと同時に、私を誘拐した罪で死刑宣告を受けたルイの事もわざわざ報道したのである。

全ては栗夏の思い通りの筋書きであるにもかかわらず、あくまでも被害者を装った演出だった。

それからは慌ただしく結婚式の準備が始められた。

結婚式は、以前と同じく教会で挙げることになっていたが、唯一違ったのは、結婚式の直前に刑務所レバでの公開処刑を見物してから式へ行くというスケジュールが追加されたことだった。

私を誘拐した犯人を、私がとても憎んでいるので、その腹いせにという筋書きだった。

私の気持ちなど栗夏は一切聞こうとはしない。

それどころか、ただ意見を押し付けてくるだけなのだ。

韻の一族を吸収することで、全てを手に入れたと錯覚している節があった。

栗夏とは何度か接見し、結婚式の打ち合わせを行ったが、二人きりになることはなるべく避けた。

栗夏も結婚式が終われば私を自由にできると思っていたらしく、特に接近もしてこなかった。

むしろ、結婚式よりも公開処刑の方に関心が大きいらしく、そちらの準備に忙しいようだ。

「ああ。どうしよう。このままだとルイは殺されてしまう」

公開処刑まであと二週間と迫っていたが、これまで特に収穫らしいものもなく、ルイの処刑を止められそうにはなかった。そればかりか、ルイに面会することすらできなかった。

国家一級の犯罪者。それは何人たりとも寄せつけてはいけないう法律なのである。

もちろん、弁護士や神父などの接見すら許されていないのだ。

「あと二週間、まだ出来ることはあるかもしれないわ」

私の気持ちを心からわかってくれるのは、看護師のアデポネだけだった。

いつも励ましてくれて、応援してくれていた。彼女がいたからこそ、挫けないで栗夏との対話に応じることができたのだった。

「でも、もうどうしたらいいのか」

八方塞がりだった。思いつくままに、あれこれ可能性を試してみたい、あらゆるコネを使ってルイの処刑を阻止しようと動いてみたけれど、栗夏の影響力は強く、誰も親身になってくれない。

「いざとなったら、私が栗夏を訴えるわ」

アデポネは力強く言ってくれたが、そんなことをしたら即刻消されるだけである。

何もいい案が浮かばないまま焦っていた。

「……あとは、奇跡を祈るしかないわね」

溜息まじりにアデポネは肩を落とした。

最後は神頼み。どうしようもない事実を受け入れることができない時、頼るのが神なのだ。神様も厄介な役を引き受けたものだ。

「キセキ。奇跡ね！あるわ、アデポネ！奇跡が起こせるかもしれない」

体中に電撃が走った。指先まで痺れる感覚。今まで神頼みなど、迷信に他ならないと高をくくっていた。

だが、もし。もし、迷信が真実であれば、奇跡は起こせるのかもしれない。

そう、オンコジーンの伝説を花開かせることができるのであれば、一里の望となる。

私はアデポネにオンコジーンを見せ、山奥で仙人に聞いた話を聞

かせた。そして、奇跡が起こることを。

彼女はじっとオンコジーンを見つめて、考え込んでいる。

「私……、この板に見覚えがあるわ」

アデポネは三角の板を見つめながら記憶を辿っている様だった。

「これ、栗夏の所で見た事があります！」

彼女の話によれば、栗夏は宝石などを集めるのが趣味で、いろいろな宝石を宝石棚に飾ってあるということだった。その棚は、栗夏専用の寝室にあるという。

「以前、宝石を一つもらったことがあるんですが、その時に、同じ棚に並んでいたような気がします。宝石ばかりなのに、なんでこんな板がつて思っただけで記憶に残っていました」

アデポネの話には信憑性があった。確かに、宝石にはとても見えない。残る一枚は金属質の板のはずである。

金目のものとも思っただのだろうか。

「よりによつて、寝室かあ……」

他の場所ならなんとかなりそうだが、栗夏の寝室となれば、どうしても彼に近づかなければならない。

想像しただけでも吐き気がしてきた。

だが、それも仕方ない。

もし、本当に再後のオンコジーンがあるのであれば、きっと何かが起こるはず。

奇跡という名の何かが。

一里の希ではあるが、賭けて見るしかない。

「アデポネ。彼のこと、何でも教えて。弱点とか、何でもいいわ」
栗夏はスポーツも万能で、体力系ということだった。

だが、酒には強くなく、酔って記憶をなくすことは茶飯事だとい

う。しかも、酔っている時は女に弱くなるという癖があるのだと。だから、なかなか自分からは酒を飲むことはしないということだった。

そのほかにも、栗夏は女性のネグリジェに興奮するとか。好む匂いとか。

栗夏に接近するには十分の情報を元に、彼の所へと向かう決心をした。

まずは日程を調節する。もし、オンコジーンが見つからなかったことも考えて、少し余裕を持って会いに行くことにした。結婚式の一週間前、二泊三日の滞在を希望し、これを栗夏は快く受け入れた。

「さあ、言ってくるわ。無事を祈っていてね」

アデポネに別れを告げ、単身栗夏の下へと向かった。本当はアデポネにもついて行って欲しかったが、栗夏にされたことを思うと、とても連れては行けなかった。

オンコジーンは引き合うつと、仙人は言っていた。
見えない力が背中を押してくれているような気がしていた。

栗夏と結婚するなんて真つ平だ。あんな最低な奴と一緒にいるくらいなら、死んだほうがましである。

もう、自分の人生は自分で決める覚悟は出来た。

誰にも邪魔されないし、誰の指図も受けない。

そう、それが幸せになる為の条件なのだと、やっと気がついたのだ。

栗夏と面会の日がやってきた。彼とは幼少の頃に何度か会ったことがあった。親同士の勝手な政策の一つとして、許嫁とされていたことに納得はしていなかったが、仕方のないこののだと諦めていた。

「ようこそ、朱里さん。お久しぶりでございます」

栗夏はとても礼儀正しく、紳士な振る舞いで、誰にでも好かれるような好青年だった。

身長も高く、鍛えられた肉体が、シャツの上からでもはつきりと見て取れ、男としての自信が満ち溢れている。

「お会い出来て光栄ですわ」

思わず、彼の雰囲気飲み込まれそうになったが、意識をはつきりと持ち抵抗した。駆け引きは上手ではないが、彼に引き込まれてはいけない。

「あなたを誘拐した不届き者の処罰は私に任せてください。あなたの目の前で処刑して差し上げますので」

笑いがこらえきれないといった表情で勝ち誇った台詞を吐く姿は、まるで悪魔の化身のようにも見えた。

きっと、ルイのことがなければ、栗夏に心を奪われていたのだろうと思った。

「いくらなんでも処刑は可哀そうではありませんか」

大きな部屋の、大きなテーブルには、ものすごい数の御馳走が並べられ、壁際のステージでは、控え目にクラシック音楽を演奏する人たちが座っていた。栗夏の合図とともに、音楽が奏でられ、食事

の時間となった。

「お優しいですね。国家一級の犯罪者にまでもご慈悲をかけられるなんて。ますますあなたの事が好きになりました」

調子のいい口調で、話はさら々と流され、結婚式の話であるとか、その後の新居の話であるとかにすり替えられてしまった。今回の接見の演題は結婚式についてなのだから仕方のないことなのだが、これとルイのことになると、流されてしまう。

ルイの処刑回避は絶望的だった。栗夏の意志は固く、絶対に許さないという気迫に満ちているのだ。フィアンセの意見など聞く耳持たない、いや他の誰の意見もきくと聞きはしないであろう。

「美味しいお食事をありがとう。明日、夜は、お食事の後、二人きりでお酒でも飲みませんか」

明日の日中は、結婚式のリハーサルなど予定が詰まっていたので、自由になれるのは夕食後でしかなかった。

「も、もちろんですとも。では、ラウンジでお待ちしております」
彼は少し慌てて返事をよこした。女性からの誘いであれば断らない。それが栗夏という男なのだ。

おしとやかで、自分の意見は言わず、三步下がって付いてくる……。栗夏にとつて、私はそんな女性だと思っていたはずである。今までそのように振る舞いをしてきたし、それが私の表の顔だった。そんな私が、まさかルイさんと一緒に逃避行するなんて、夢にも思わないのでしょうか。

だから、私がお酒に誘うなんてことも意外だったに違いない。これが吉とでるか凶とでるかには分らないが。

食事が終わると、客間へと通され休んだ。次の日も、日中は忙し

くスケジュールを熟し、栗夏と二人きりになることはなかった。

滞在期間は、二泊三日。

チャンスは一度きりしかない。

もし栗夏の寝室にオンコジーンがなければ、他を探さなければならぬのだ。

失敗は許されない。

明くる日の夕食後、ラウンジへと招かれ、そこには彼一人が座っていた。だが、お酒を作るバーテンもいる。

アデポネの話だと、女性には強いお酒を出し、栗夏はほんの少しの量のお酒をウーロン茶で割ったものを飲んで、女性を酔わせるのがいつもの手だという。

「カクテルを下さる」

私自身はお酒は弱いほうではないが、今日ばかりは酔うわけにはいかない。カクテルであれば、何杯かいけそうだった。

夜景の綺麗なラウンジで、少し薄暗い照明が二人の時間を演出する。

「初めてですね、あなたとこうしてお話するのは」

栗夏はあくまで紳士的態度は崩さない。女性を口説くことに長けているのであろう。

「あなたのことをよく知りたくて」

来週には結婚する。そして、この男の妻とならねばならない。本来であれば、この男と一生添え遂げる覚悟をしなければならなかった。

「それは光栄です。あなたの夫として、あなたを一生幸せにするのを約束します。一族と、この国の将来のためにも。今夜は飲み明かしましょう」

栗夏は上機嫌だった。ひとまず、彼に接近するという課題はクリアした。

それから何杯かカクテルを飲み、時間が進む。

栗夏も赤ら顔になってきたのが分かった。

「このカクテルおいしい！栗夏さまも飲んでみて」

私の差し出したカクテルを断る分けにはいかない栗夏は、一気に飲み干した。

プライドの塊のような彼は、決して弱みは見せないのである。

だが、この一杯が効いたようだ。見る見る蛸のように真っ赤になり、少し呂律も回らなくなり始めている。

私も大分酔っていたが、まだ正気は保っていた。

「あなたの寝室へ行きませんか？ここではなんですから」

あくまで酔った振りをして、栗夏を誘惑する。彼はすぐその気になって、案内してくれた。

寝室には大きなベットに、四人がけくらのソファ、大きな窓の外にはベランダがあり、シャワー室と洗面所、トイレなどが設置されていた。

「シャワーを浴びてきます」

栗夏は、そのままベットへと横たわっていた。

早々にシャワーを浴び、栗夏が好きという香水を少しだけつけ、もって来たネグリジエに着替えた。

胸元が少し開いたネグリジエ。こんな服装で男性の前に出るなんて、考えられなかった。下着こそ見えないが、とても人前に出る格好ではない。お酒が入っていたせいもあり、少し大胆になれてはいたが、全てはルイのためと、心に言い聞かせて恥ずかしい思いを力ずくで封じ込めた。

「ねえ、栗夏さま。あそこの宝石、ひとつ私にくださらない」

香水の匂いが、栗夏に届く距離まで接近し、横たわっている彼の

体に触れた。ここまではアデポネとの打合どおりの展開だ。

ガバッ

突然、栗夏の力強い腕に抱きしめられ、息が止まる。彼は酔っていたので、条件反射のようなものだったのだらう。なんとか這い出て、宝石の棚へと向かい、宝石を眺める振りをした。

突然の出来事に、心臓がバクバクしている。危うくキスされそうになったが、寸前で回避できてよかった。

「宝石棚の鍵がこちらの引き出しに入ってる。好きにしてい」

宝石棚の鍵の在り処が分からない。これが唯一の難関だった。これさえ手に入れば、栗夏には用済みだ。

早速、鍵を取り出し、棚を開けた。大小さまざまな宝石に眼がくらむ。

その中に、確かにあった。

最後のオンコジーン。

三角形の輝く板が。

これできつと奇跡が起こせる。

「ありがとう、栗夏ちゃん」

その頃、栗夏はもう夢の中だった。最後に栗夏に渡したカクテルには、睡眠薬を少し入れておいた。薬が効き始めるのに約一時間。計画は無事成功した。

さて、これでオンコジーンを全て手に入れたわけだが、どのようにしてルイを助け出すかが問題だった。

処刑執行まであと五日。

おそらく、六つのオンコジーンを合わせる時、何かが起こるのであろう。

オンコジーンを二つ三つと合わせるとそれらは融合するのである。それぞれの持つ凹凸がなくなり、ひとつの板となる。

これをルイの前で完成させなければならぬ。何とかしてルイと接触する期会を作らなければならなかった。

今完成させてしまつて、私が奇跡の当事者になつてしまつては、ルイは救えないのかもしれないと考えた。

私は再度、栗夏と連絡を取った。

「お願いがあります。死刑囚と、最後に話をすることは許されませんでしょうか」

先日の出来事の後、初めての栗夏との会話だった。

受話器の向こうでの栗夏の様子はわからないが、素直に返事をもらえた。

「あなたがそれを望むのであれば、そのように」

彼の心境の変化は分からなかったが、とにかく、処刑の前に話をする期会を許されたのだ。

これで万事整った。

処刑の一時間前、処刑台の上での接見だった。場所はどこでもよかった。すべてはオンコジーンの奇跡にかけるしか、もう方法は残っていないのだから。

もし、失敗したら。もし伝説などがなかったら。そう考えると、

怖くて震えが止まらなかった。だが、もう信じるより道はない。あとは野となれ山となれだ。

オンコジーンが手に入り、安堵していた所へ、アデポネから呼び出しの連絡があつた。普段、彼女から呼び出されることは滅多にないことだったので、不思議に思い彼女の部屋へと出向いた。

彼女は、住み込みで働いているので、同じビルの中に住んでいる。

「どうしたの？急に。トラブルでもあつた？」

アデポネに招き入れられ、ソファーへと腰掛けた。彼女はそわそわと落ち着きがない様子だった。

「これを見て。サイモシンに無理を言つて入手したんだけど……」
そう言つて彼女が持っていたのは、血液検査の結果のようなものだった。

難しい記号が並んでいる検査結果を見ても、何のことか分からない。

「それがどうかしたの？」

それは、ルイのものだった。

彼の採血の結果が何を意味するというのか。

もうすぐ処刑される人の採血結果など、誰が興味を持つというのであろう。

それに、結果が悪かつたとして、いったい何を伝えたいというのか、アデポネの意図が全く分からなかった。

「順を追つて説明するわね」

彼女の話では、ルイが『異人血』の持ち主であるというのである。以前、地下組織での一件で捕えられ、人体実験にされる時、もしか

したら『異人血』を持っている可能性があると疑われた故に抹殺されるはめになったというのだ。『異人血』の検査には三週間ほどかかるのだが、今回はつきりとその結果が出たというのである。

「ちょっと、待って。それじゃ、公開処刑の本当の目的は、誘拐と結婚式の妨害という第一級の国家犯罪ではないというの？」

あくまで、公開処刑は建前なのである。

アデポネはコンピューターに忍び込み、ルイの機密ファイルを見つけたというのである。

さらに、検査結果まで見せられては、信じないわけにはいかない。

そもそも、なぜアデポネがそんな情報を掴んだのか。不可解でなかった。

彼女が言うには、地下組織の一件を調べていたら、機密ファイルにぶつかったというのである。そのファイルをこじ開けてみると、ルイの処刑計画が記されており、彼が異人血である可能性ありとあったという。

その後、死刑囚の採血結果は全ての指揮を任されているサイモシンの所にあることを突き止めたのだ。

「もし……、もしこれが本当だったら」

血の気が引くのが分かった。考えたこともなかった。ルイが異人血の持ち主だなんて。

『異人血』とは、普通の人間が持ち得ない血液のことである。普段生活している分には、自他共に全く影響などはない。だが、特殊な環境に陥ると、狂気になったり、他人を殺めたりすることが知られており、法律では隔離することとなっている。だが、多くの人々は彼等を獣の如く扱い、抹殺を求めるのである。

その上、異人血を持つ人と、正常な人が結ばれて子を産むと、必ずといって災いの基になると恐れられ、厳しく禁止されているのだ。

「残念だけど」

アデポネも肩を落とし、がつくりとしていた。せつかく幸せになれるかもしれないオンコジーンを集めたのに、こんな事になるなんて。

だが、異人血と分かった以上、ルイと結ばれることはありえない。

「ルイ……」

それから丸三日、私は一人で部屋に籠りつきりになった。全ての人との接触を絶ち、泣いては悩み、悲観しては運命を呪い、絶望と焦燥とを繰り返し、一つの答えにと、たどり着いた。

そして、父と母に宛てた手紙を書いた。

私のわがままを、許して、見守って欲しかった。許されないことなのは分かっていたが、他にどうしようもなかった。

もし、ルイを助けることが出来なかったのなら、私も彼の後を追う。

それが私の出した結論だった。

異人血を持つ彼とでも、普通の生活は出来る。子供さえ作らなければよいのだ。

異人血は感染したりする類のものではない。

後悔はしていないし、これからもすることはない。

それが自分で選んだ道なのだから。

愛する人を助けられなくて、幸せなどつかめるはずがない。

一生に一度、逃げてはいけない勝負がある。

今がその時だと、心に言い聞かせた。

オンコジーンは、実は、ただ集めても何の奇跡も起こさない。

そこには、強い意志が必要なのだ。

オンコジーン同士が引き合うのは、実は、各々の板同士が引き合っているわけではない。

意志のある所へと引き寄せられていくのだ。

集められしオンコジーンは、希望、存続という強い意志により、花開く。

選ばれし者の手により、奇跡は起こる。
開眼した運命は、時空を越える。

そして、ついに運命の日が訪れた。

監獄レバの中の処刑場には、大勢の人々が群れをなし、全国民へと生中継がされる予定であった。

そのため、警察や軍隊などが総動員され、今か今かとその瞬間を待っている。

国家一級の犯罪者だとしても、ここまで大掛かりな公開処刑は初めての事だった。

観客とは別の所に、特別席が設けられ、そこに栗夏と、私が座る席が用意されていた。

「この間はすみませんでした。どうもお酒に酔い、眠ってしまったようで」

あの後、彼と顔を合せていなかったたので、彼の面持ちが以前とは違ったものになっていることに気がついた。

もじもじしている彼が可笑しかった。

「あの、その。続きは今夜にでもどうでしょう」

栗夏の顔が少し赤らんでいる。以前の堂々たる彼からは想像も出れない醜態だ。

それほどまでに、あのネグリジェが効果的面だったのかと思うと、恥ずかしい思いでいっぱいだった。

あの時は、ただ無我夢中だったので、羞恥心などはどこかへ追いやってしまったのだ。

「ええ。待っていて下さいね」

作り笑顔を返すのと、笑いをこらえるのとで、顔が引きつっていないか心配だったが、栗夏には伝わっていないようだ。

期待に胸膨らませる栗夏を横目に、ルイとの面接の時間を待った。

公開処刑は正午きっかりに行われる予定で、その三十分前に、控え室での再後の面会を許されていた。

面会の時間は五分。もちろん、栗夏も同行するという条件付であったが、問題はない。

栗夏以外にも、警備の人間が控え室の周りを厳重に警備していることである。

そこから逃げ出すことなど出来ない。

この状況下で、オンコジーンはいつたいどんな奇跡を見せてくれるというのだろう。

自信や根拠などはなかったが、もう、委ねるしか道はなかった。

「さあ、そろそろ参りましょうか。罪人の再後の言葉を聞きに」

意気揚々と栗夏は立ち上がり、私の手を引っ張って、ルイの待つ控え室へと案内してくれた。

私は、もう片方の手でしっかりと腰のベルトを握り締め、失敗したら死ぬ覚悟をして彼の後に続いた。

「こちらです」

栗夏のエスコートで、ついにルイのいる部屋へと着いた。

頑丈な扉を、門番が二人掛かりで開けるのをじっと待った。

「……………」

ひと月ぶりに見るルイの姿は、以前とはまったく別人のようだった。

殴れ続けられたようで、顔は形を変え、片方の目はもう開く事が出来ないかのようにふさがっている。

体は痩せ細り、囚人服の下は、傷だらけなのが見て取れた。

椅子に両手両足を縛られており、この様子だと、一人で歩く事は

困難に思えるほど衰弱しきっていた。

「しゅ……り……」

声にもならない声。今にも消えてしまいそうな彼の声を久し振りに聞いた。

思わず、涙が溢れてこらえきれない。

すぐにも飛び出して、彼を抱きしめたかったが、ぐっところえた。処刑が決まっているにも係わらず、何の権利があつてここまで彼を痛めつけなければならなかったのだろうか。

自分の握り拳に力が入り、爪が手のひらに食い込み、血が滲む。

それは怒りの感情だった。憎悪。そして、悔しさがこみ上げてくる。

希望と願望と、さらには欲望とがそれらの感情をさらに刺激する。

これら各々の感情たちが、一つ一つのオンコジーンと共鳴していることに、その時は気がつかなかった。

だから、ベルトに納まっているオンコジーンが、少し光り輝いていることにも気づくはずもない。

「手錠だけでも外してあげてもらえませんか」

必至で涙をこらえ、溢れ来る感情を押し殺し、言葉を出した。

栗夏は私の要求をすぐさま受け入れ、看守に目くばせをする。

手錠が外されても、ルイは腕をだらりとさせたまま動かない。いや、動く体力すら残されていないのだろう。

栗夏にも、看守にも気づかれないように、私は腰のベルトに納まっているオンコジーンを六つ取り出した。

順番にひとつずつ。

一枚、一枚、隣り合わせになったオンコジーンは融合していく。

後ろに手をまわしながら、ベルトから引き抜いているので、手探りで合わせて行く。

もう何度も何度も練習した作業なので、失敗はしない。

もちろん、誰にも気づかれてはいない。

そして、五枚まで融合させたオンコジーンを右手の中で握り、残り一枚を左手の中に握りしめ、そっと彼のもとへと近づいた。

「羽衣さん。あなたの罪は消えません」

ルイのつま先まで歩み寄り、彼の前で膝を着いて、手を握る振りをして、彼の手の中へオンコジーンを滑らせた。もう一方の手にも同じように。

後ろで見えている栗夏には、私の背中に隠れている位置なので、見えない。

ルイの後ろに立っている看守も気付いていない様子だ。

「死を持って償ってください」

私は、手をルイの手の上に乗せ、祈りを込めた。

集めたわよ。最後の一つも見つかった。これで奇跡が起きないのなら、神など絶対に信じない。

お願い、神様。彼を助けて！　そして、私も……。

ゆっくりとルイの手が動く。

彼の片方の目は、しっかりと私を見つめていることが分かった。

彼の意識ははっきりしている。

そう、生きることを諦めてはいなかったのだ。

彼は、彼の意味で、再後のオンコジーンを合わせた。

決して結ばれはいけない二人。

だが、二人は一緒になる決意をしてしまった。

それもオンコジーンをという名の禁断の果実に触れて。

奇跡は起こるものではない。

そう、起こすものなのだ。

オンコジーンは奇跡などではない。

選ばれし者の、道を照らし出す光。光源。

歩いていくのは、本人の意志なのである。

二人の奇跡、軌跡はここから始まった。

「見つけてくれたんだね。最後の一つを」

途切れそうな意識をしつかりと持ち、朱里が手の中へと入れてくれたオンコジーンを見つめた。

五つは融合し、あと一箇所を合わせるのみだ。

もう片方の手には、三角形の板がある。

残る力を振り絞り、再後のオンコジーンを合わせた。

カチッ

六枚の板は完全に一つになった。

融合した板は、今までの質感とは全く違う素材へと変化したようだった。

そして、ほんのり光り輝いているのに気がついた。

「あれ…、何も起きない」

板が融合して、十秒、二十秒、三十秒と経つが、一向に何か起りそうな気配はない。

そして、オンコジーンの光りも消えていた。

「やっぱり、だたの迷信だったっていうの？」

朱里の悲壮な叫びが耳に届く。

彼女が、どんな思いでオンコジーンを集めたのか、どのような覚悟でここに来たのか。

握る手からそれが伝わった。

「何をゴチャゴチャ言っている。さあ、面会の時間は終わりだ」

栗夏が肝を焼いて、横槍を入れてきた。

彼が、俺と朱里の間に割って入ろうとした時に、突然地面が揺れ

る。

ゴゴゴゴ

大きな物音がどこからともなく轟き、薄暗い監獄の中の壁にヒビが入る。

そして、突然、天井から落ちてきた照明の笠が、栗夏の後頭部を直撃し、彼はそのまま倒れ込んだ。

今までに経験したことのないほどの大地震だった。

栗夏を直撃した照明の笠は、その後俺の足元へと飛んで来て、偶然にも足を縛ってある縄を切断し、跳ね返ってもう片方の足の縄も切断した。

体力などほとんど残っていないと思っていたが、自由になった足は動くし、手にも力が入る。

これがオンコジーンの奇跡なのだろうかと思議に思いながらも、とにかくこの場から逃げ出さなければならない。

「朱里、行こう」

彼女もまだ何が起こっているのか把握できていないようだった。まだ地震の揺れは続いている。

天井から、今度はコンクリートの塊なども落ち始めていた。

彼女の手を引き、監獄の一室から出た。

偶然にも、見張りの警備員達は、落ちてきたコンクリートの下敷きになって身動きが取れないようになっていた。

廊下を走りぬけ、出口を目指す。

その頃には、地震は治まっていた。

外はそれほど地震の被害はなさそうだ。

片方の手にはオンコジーンを握り締め、そしてもう片方の手には

朱里の手をしっかりと掴んでいた。

もう離さない。何があっても。

世の中に偶然など、そうはない。

ましてや、奇跡など起こるものではない。

だが、この時ばかりは、この地震が、オンコジーンの奇跡なのだと信じるしかなかった。

監獄ベタから脱出するために棧橋へと向かう。
観客達の船やボートが所狭しと並んでいる。豪華客船なども見え
た。

手ごろなボートを探している時に、その中の小さな二人乗りのボ
ートにエンジンが点いているのに気がついた。

「朱里、こっちだ」

警察や、警備の人達が追ってくるのが遠目に見て取れた。
急いで、彼女と二人で、ボートへと乗り込んだ。
ボートは勢いよく走り出す。

追っ手も、大小様々なボートで追撃してくる。
しかも、向こうは武装しており、容赦なく銃撃してくる。

「頭を低く」

朱里はしっかり俺にしがみついていた。

堤防の先端に一人の女性が立っているのに気がついた。

まるで見送りをしているかのような。

よく見るとそれはジエネだった。

俺の処刑を見物に来ていたに違いない。

だが、俺が逃亡していることがどうして分かったのだろうか。

公開処刑場の位置から、この船着場は丁度島の反対側にあった。

先回りしていたとしか考えられない。

手を振る暇はなかったが、ジエネの悲しそうな表情が見て取れた。

海はいつになく波打っていた。

そう、地震の影響で、津波が起こっており、その余波で嵐でもな

いのに、高波が押し寄せていたのだ。

偶然にも俺のボートは波と波の間をすり抜け、波のトンネルをくぐり、追い波に乘せられて、あっという間にベタの岸へと漂着した。追撃のボートなどは、皆波に吞まれ、転覆したり、逆走したりして、ベタの岸まで辿り着く追っ手は一人もいなかったのだ。

「奇跡は起こったのね」

海岸から監獄レバの方を眺めながら、朱里は俺の腕に寄り添い、肩に頭を乗せた。

体のあちこちに痛みは残っており、歩くのはやっとだったが、逃げ切れたことは事実だった。

処刑も免れ、今こうして朱里と二人でいる。そう、これがきつと奇跡なのだ。多くの偶然が重なり、それは奇跡と呼ぶに相応しい現象だったのだ。

「さあ、行こう。今度こそ本当の未来へ」

海岸には、地震によると思われる津波の爪あとが残っていた。木は薙ぎ倒され、流木が道を占拠し、泥があちらこちらにと散らばっている。

車なども横転したままの格好で置き去りにされていたのだが、動きそうない台を見つけた。

鍵などは掛かっておらず、二人で乗り込む。

エンジンは直結ですぐに始動した。津波による被害はなさそうで、シートなども濡れてない。

「伝説……、開けちゃったね」

ベタの街を横切りながら、朱里はもうもどれないであろう生まれ故郷の街並に別れを告げているようだった。

きつとまた追われる日々になる。そんな予感がしていた。

たとえオンコジーンの奇跡の力を借りたとしても、現実はずうは変わらないのである。

ベタの裏山には、朱里の別荘があり、ひとまずはそこへ身を隠すことにした。普段使われていない別荘で、長期休暇の時以外は閉鎖されていているらしい。

彼女は鍵の隠し場所を知っており、おそらく気づかれないだろうというのである。

「よく最後のオンコジーンが見つかったな。どこにあった？」

車を走らせながら、窓を開け、気持ちのよい秋の風を受ける。街で買いい物を済ませ、夕暮れも近かった。

「もう二度と御免だわ。あんな思いをするのは」

風に揺られる髪を抑えながら、朱里の顔が赤くなったのに気がついた。

彼女が、栗夏を誘惑し、最後のオンコジーンを手に入れた経緯を聞き、思わず笑ってしまった。

「よく何もされなかったじゃないか」

女には目がない栗夏の事だ。何もなかったなんて不思議ではない。がない。

いくら睡眠薬の効果だったとしても、それに打ち勝つくらい女々しい奴であるに違いない。

「俺のために、そこまで……。ありがとう」

感謝の気持ちは伝えても伝えきれない。

彼女がオンコジーンを集めてくれていなければ、俺はもう処刑されていた。

彼女の愛が伝わり、その愛らしさがとても魅力的だった。

「愛してるよ、朱里」

運転中も彼女の手は離さない。

こうして、朱里の別荘へ入り、二人での生活が始まった。

今回は、前回の逃亡のときとは違い、警察や軍隊などが捕まえにくる気配などはまったくなかった。

不思議なことに、テレビなどもメディアにも全くもって登場しないのである。

オンコジーン力なのか、それとも裏で何かの力が動いているのかは分からなかったが。

とにかく、誰の干渉も受けることなく過ぎていく日々不安を感じながらの生活だった。

とりあえず、別荘の裏には使われていない畑があったので、朱里と二人、自給自足の生活に毎日が楽しく過ぎて行くのであった。

「ルイ、あなたは異人血の持ち主だって知ってた？」

ある日の夕暮れ、今日も一日無事に終わったことに感謝しつつ、朱里の手作りの料理に舌鼓を打ちながらくつろいでいる時に、彼女は切り出した。

「何？それ。有名人なの？」

まったく初めて聞く言葉だった。小さい時は、殺しの修行ばかりしていたので、一般的知識が少し足りないのかもしれない。

「ううん。なんでもない。気にしないで」

朱里の説明によれば、その異人血のおかげで俺は殺される運命にあったとか。そして、俺との間に子供が生まれれば、災いと呼ぶとされ、きつとどんな手を使っても抹殺しにくるであろうというのだ。

たとえコンコジーンの力があつたとしても、そこまで現実を捻じ曲げることはできないであろうという。

俺達二人が幸せに暮らせれば、それ以上のものは望まない方がいいのではないかと話し合った。

異人血を持つものと、愛し合つてはいけないというルールはないのだ。

純粋な愛だけが、それを許し、包み込む。

「でも、気を付けてね。いつ狙われるか分からないから」

朱里はいつも心配をしてくれた。オンコジーンの奇跡があれば大丈夫と、言つて聞かせてはみるものの、何の自身も根拠もない。願うは、今の幸せが一日でも長く続くことだけだった。

そして……三年の月日が流れた。

俺と朱里は、変わらず二人だけの平穏な日々を送っていたその時である。

朱里と二人で畑仕事をしていた時、突然戦闘機が頭上をかすめて飛んで来た。

家の周りを何度か行き来した後、狙いを定めて攻撃して来たのだ。

間一髪ので、ミサイルから逃れたものの、畑も家も全て破壊されてしまった。

急いで岩陰へと隠れ様子を伺う。

「怪我はないか、朱里」

彼女は震えていた。無理もない。テレビでしかみたことのないような戦闘機が頭上を飛び交っており、こちらに標準をあわせているのだ。

「なぜ今になって狙ってくるのかしら」

彼女を岩肌にある洞窟へと身を隠させた。そこには、いざという時のために武器などが隠してある。

そして、ひとつの拳銃を手に取り、予備の弾をポケットへと仕舞う。

この拳銃の名は『CAナインティーン』ナイン』（略してナイン）と言う。裏で手を回し、大金を積んで購入した拳銃だった。

「朱里はここで隠れてるんだ。様子を見て来る」

俺は洞窟を飛び出し、攻撃された家の方へと向かった。戦闘機は

どこかへ飛んで行き、静けさに包まれている。

辺りを伺っていると、戦車部隊がこちらへと近づいてきているのが分かった。

こっちはたった二人しかおらず、武器などもろくに持っていないというのに、随分な歓迎だ。

七台の戦車に、騎兵隊が列をなし、総勢五十人は超える。

最後尾には、黒い車が見え、どうやらそれが指揮官のようだ。

攻撃からみても、容赦はない。つまり、俺達を殺しに来たのだ。

俺は木の蔭に隠れて彼等と対峙した。

戦車からはミサイルが次々と放たれ、いつ直撃するか分からない。

すかさず、『ナイン』で戦車を狙う。『ナイン』は、鉄板など貫くほど威力を持っている拳銃なのである。

戦車の給油口辺りを狙って打ったので、大きな音とともに爆発し炎上した。

あっという間に七台の戦車を大破させ、その隙に渦中へともぐりこむ。

何人かの敵を倒し、最後尾の黒いセダンの車まで走り抜けた。そして、ボンネットの上に上り、拳銃を向け中を威嚇する。

「何者だ」

車の中には、一人の男性と、一人の女性が乗っていた。

二人とも見覚えのある顔だった。

「ジェネ……、それに、リコか」

両手を挙げて車から降りてきた二人に、思わず言葉が出なかった。

まさか、二人が俺達を狙ってきたとは。

「ジエネ、大人になったな」

三年前とは別人のように成長したジエネだった。以前のような幼げな表情は消え、すっかり大人の女性へと成長していた。

何故二人が一緒にいるのか。面識などあるはずがない。

「予想以上ね」

ジェネは以前と変わらぬ口調で、こっちを見据える。空爆も戦車も彼女の仕業だとういうのか。

よく見ると、破壊した戦車の破片にはEPIの文字が書いてある。つまり、彼女の戯言に使われたということだろう。

「ま、この程度であなたを仕留められるとは思ってないわ」

この国で随一の大金持ちの一人娘が、いったいどのような要件でこのような非常手段をとったというのか。

「これで、上も動かざるをえなくなるでしょう」

続けるジェネの話の意図がつかめない。

ダン

ジェネと話している途中に、リコが引き金を引いた。

「兄さん……。腕が鈍ったか」

銃声は俺の方だ。リコより一瞬早く引き金を引いた。リコ相手に、急所を外している余裕はない。

その場にリコは倒れこんだ。

以前の俺ならば、よくて相打ちだっただろう。

訓練の成果なのか、オンコジーンの異変なのか、とにかくリコよりも腕が上だったことは確かだ。

「あの時、あなたに渡した物が、オンコジーンという物だったなん

て……。私にも責任はあるわね」

リコが打たれても、ジエネは微動だにしない。両手を上に挙げたまま、じっとこちらを見つめている。

「分かるように説明してくれ」

最後のオンコジーンを合わせる瞬間は、隠しカメラによって、お偉いさん方に見られていたという。

そして、彼等の指示で、オンコジーンがどのような物で、どのような力を発揮するのかを見物することにしたというのである。

今まで3年もの間、誰の干渉も受けてこなかったのは、そういう経緯だったのだ。

だが、ジエネは反対した。

一刻も早く対処しなければ、手遅れになると。

そして、彼女のできる最大限の力を集結して今回の計画を立てたのだという。

「何故リコを巻き込んだ」

弾丸はリコの心臓を貫き、息はない。

血は継ってないとはいえ、同じ兄弟として育てられた兄を殺さなければならなかった。

「彼が協力してくれなかったら、私一人じゃここまでできなかったわ」

リコが協力した。つまり、爺の命令なのだろう。爺の指示ということは、その上からの指示。

つまり、ジエネがいう『上の者』の仕業なのかもしれない。

「でも、ルイ。あなたたちって、もっと野望とかないの？ 国を治めたいとか、頂点に立ちたいとか。二人で毎日野良仕事ってどうな

のよ。せつかく、奇跡とやらを手中に収めたのに、まったく宝の持ち腐れね」

気付かなかったが、監視はされていたようだ。当然といえば当然だが。

「何でもお見通しなんだな」

拳銃を構えたままジェネを威嚇する。本気で俺たちを始末しにきたという事は間違いない。

「これは忠告よ。この国の全ての戦力を結集してでも、あなたを倒すわ」

ジェネの眼もまた本気だった。それが彼女の使命でもあるかのように。

「誰にも迷惑をかけていないつもりだったが。何故そこまでして俺たちを狙う」

オンコジーンは、それほどまでに脅威だというのか。誰にも知られていない伝説などではないのだろうか。

「今のうちにあなたたちを駆逐しておかないと、取り返しがつかないことになるからよ」

ジェネは再び車へともどった。今度は運転席の方へ。そして車をバックさせ、ユーターンさせて立ち去った。

まるで俺が引き金を引かないのを知っていたかのように。

そこに残された生き残りの兵士達も、各々車などに乗り合わせ立ち去っていく。

戦いが終わったことを察して、朱里がこちらへと向かって来ていた。

「始まったわね」

彼女もまた、この襲撃が始まりだと感じていた。

残された兵士たちの手当てを二人でし、彼等はそのまま放置した。

すぐに迎えがくるであらう。

俺たちは、今後の見の振り方を考えなければならなかった。
以前のように、もう逃げ回るのはゴメンだ。

正々堂々と、戦う。だが、無駄な血は流したくない。話し合いで済むものならそうしたい。

できれば今までのようにそっと置いて欲しかった。

野良仕事で汗を流し、朱里との二人の時間をゆっくりと過ごして
いたかった。

オンコジーンの奇跡は、望むものが手に入るということではない
というのだろうか。

野望や、欲などはない。

ただ、幸せが欲しいだけなのだ。

その反面、少し期待している面もあった。

殺し屋の血が騒ぐといったところだろうか。

強い相手に、自分の力を試してみたい。誇示したいという衝動が
あるのも事実だ。

現に、リコを倒した満足感はとてもこちよいものだった。

この二つの相反する感情が俺のなかに渦巻き、やがて自制出来な
い所まで行くというのだろうか。

「朱里、もし俺が暴走したら、その時は俺を殺してくれ。そして、
オンコジーンも破壊するんだ」

彼女は何も言わず、ただ、抱きしめてくれた。

彼女の存在がすべてだった。決して彼女を不幸にはしない。

そう、強く願った。

家が破壊され、住む場所がなくなったので、とりあえず、朱里の
実家へと向かうことにした。

朱里の別荘から、朱里の本住んでいたビルまではすぐの距離にあり、朱里は時々両親と過ごすために帰ったりもしていたので、交流があった。

彼女の両親も協力的で、朱里の願いは大概聞いてくれた。
お金の援助もしてくれ、よき相談相手でもあった。

「当面はここで暮らしてOKよ」

朱里の説得で、彼女の住んでいたビルの最上階に居候することになった。

朱里の両親に経緯を全て話をし、俺たちを狙う上の者との話合いを持ってないかどうかと相談した。

彼女の両親は、上の者とのコンタクトを持っており、何とかしてみると心強い返答をもらえたのだ。

これで無駄な血は流さなくても済むかもしれない。

「ルイ、久しぶりだな」

俺と朱里が戻ったことを聞きつけて挨拶にやってきたのはシーズだった。

彼はその後も警備隊体長としてその職を全うしていた。

「以前は世話になった」

全てを知る人物はこのシーズくらいかもしれない。彼の助勢がなければ、生きてはいられなかっただろう。

「聞いてくれ、ルイ。朱里さんも。栗夏の奴は、やはりどうしようもないぜ」

シーズの話によれば、三年前のあの事件以降、ベタとアルフの街を統治するのは当然の如く栗夏の一族となり、二十歳を迎えた栗夏は全ての実権を握ったのである。

本当であれば、朱里と結婚し、ベタの街は朱里の管轄となる予定であったが、結婚相手が逃げたとなって、彼は本性を現したのである。

権力を傘に、その統治はやりたい放題だった。特別徴収などで、税金は上がり上がり、栗夏一族が石油関係を独占していたので、石油の値段を高騰させ、そこに住む人々から自由を奪っていったのである。

全ては栗夏一人の欲望のために。

お陰で、街の治安も悪化し、夜は一人で出歩けないほどになってしまったというのである。

「それは済まない事をした。知らなかったとはいえ、もとは俺が蒔いた種だ。何とかしよう」

朱里とも相談し、栗夏と直談判に行こうということになった。

もし、こちらの要望を聞き入れない場合は、力ずくでも言う事を聞かせなければならない。

暴力は反対の立場を取っていた朱里だが、栗夏を懲らしめるのであれば、目をつぶるといつてくれた。

まずは、ミイフに頼んで、ことの経緯を手紙で栗夏に送ることにした。

彼に頼んでおけば、他に情報が漏れる心配がない。

必要であれば話し合いの場を持ってもらいたいと提案したのだが、帰ってきた返答は、意もしないものだった。

「卑劣な悪党と話し合う必要などはない。果し合いで決着をつけよう。明日の正午に、ルイ一人で来い」

とだけ、手紙に記されていた。

「きつと罠だわ。行っちゃダメよ。よってたかってあなたを始末する気よ」

朱里は心配して俺を行かせまいと必死だった。

「でも、俺がやらなきゃ、この街もよくなることはない」

全ての根源は、栗夏の悪政なのである。これも朱里という錘が外れた結果なのだ。

責任は俺にある。

何とか朱里を説得して、一人で栗夏の下へと出発した。
罨かもしれない。だが、その罨にさえ、期待に胸膨らませていた
のである。

栗夏の城へと足を踏み入れるのは初めての事だった。朱里の描いてくれた見取り図は完全に頭に入れ、武器は持つて入れないだろうということ、予めミイフに頼んで、城の中へと持ち込み隠しておいた。

「羽衣が来たと、栗夏に伝えてくれ」

門番に要件を言い、すぐに中へと通された。案の定、武器などの一切の所持品は一時預かるのが規定だという。

そして、栗夏の待つ部屋へと案内された。

「よく来たな。頭の悪い奴だ。わざわざ殺されに来るとはな」

栗夏は大きな部屋の真ん中あたりにある大きな椅子に座っている。その側近には栗夏の世話係らしい女が両サイドに一人ずつ立っていた。

「朱里は返してもらう。あれは俺の女だ。必ず俺の言う事を聞かせてやる」

以前の栗夏の面持ちではない。悪の化身が如く、吐きすれる言葉までもがおぞましい。

この三年間、彼に権力を持たせたがために、彼自身をも変えてしまったのだろう。

「無益な争いは避けたいのだが、仕方がない。この前の礼もしないといけないしな」

栗夏の直接会うのは、これで三度目になる。一度目は結婚式のパレードで奴を殴り、二度目は処刑場でリンチにされ、そしてこれが再後の戦いとなるであろう。

「ははは。どうやら奇跡とやらを手に入れていい気になっているようだ。だが、それも今日までだ。お前らを自由にさせておいたのは誰のお陰だと思っている」

今まで、警察や軍隊などから一切の干渉を受けてこなかったのは、栗夏の指示があつてのことだったと言う。

「おしゃべりはそのくらいにしておけ、栗夏。お前がもう少し利口であれば、私の仕事も楽になるのだが」

栗夏の右方にいた女性が、口を開いた。

栗夏は緊張した面持ちで口を噤む。

「巻き添えにならないように、引っ込んでな」

そう言つと彼女は拳銃のようなものを構えた。銃口は拳銃のものよりも随分大きい。

「お前は何者だ。裏の組織の人間か？」

栗夏に対する言動からすると、栗夏を操る陰の存在といったところだろう。とすると、爺の所属する組織に繋がる可能性もある。

グラニニュー

「私は特攻隊長の紅羅丹生よ。すぐに殺されるあなたには関係ないけど。絵卑の娘が余計なことばかりするもんだから、私ばかりが苦労するはめになるのよ。まったく」

いつの間にか、グラニニュー以外の人は部屋から非難しており、彼女と一騎打ちとなった。

が、こちらは丸腰で、彼女は拳銃のようなものを持っている。

正々堂々と戦う気などは鼻からなく、ただの処刑に過ぎないのであろう。

境遇が過酷になるほど、血が騒ぐ。彼女の攻撃をかわし、勝つた

めにはどうすればよいのか。

瞬時に判断し、一瞬の迷いは命取りとなろう。

「死ね」

グラニユウは拳銃の引き金を引いた。

グラニニューの持つ拳銃から放たれたのは、シャボン玉のような泡だった。

拳銃から作られた泡の大きさは、手の平くらいのサイズで、風になびかれるかのように、こちらへフワフワと飛んでくる。

「黒幕はお前なのか。俺達が共存できる選択肢はないのか？」

シャボン玉を避けることは容易だった。速度は遅いので、当たるわけがない。

朱里の両親に、上の者とのコンタクトを依頼してあったのだが、このグラニニューが上の者だという可能性もある。

「冥土の土産教えてあげるわ。この国を治めしは、我が四天王よ。我らの決定は絶対で、絶大な支配権を誇示しているわ。我らの存在を知る者は一部の上層の者達だけだね」

四天王……つまり、グラニニューをはじめ、あと三人の強敵がいるというのか。この国を裏で納める四天王。彼らを全て葬れば、その時こそ真の自由を手に入れる時がやってくるのかもしれない。

ポン・ポン

シャボン玉は次から次へと放たれる。速度はゆっくりなのだが、数が異様に増えてきた。

俺は、シャボン玉の攻撃をよけながら、部屋の中央へと進んだ。そこには大きなテーブルが置いてあり、そのテーブルの背面には、俺の愛用の拳銃『ナイン』が隠してあるはずだ。

玉を避けるフリをして、机の下へと滑り込む。

シャボン玉は、机に当たって割れた。割れたシャボン玉の中からは液体が流れ出し、その液体に触れたものは瞬く間に溶けだしたの

である。これがグラニユウの攻撃の正体だ。

俺は、机の下に隠してある『ナイン』を取り出し、グラニユウへと向けた。

「馬鹿ね。そんなものが通用すると思っているの？なぜ私たちが四天王と呼ばれているかわかる？あなたたちとは次元が違うのよ」

グラニユウは、シャボン玉を自分の足元へと並べ始めた。シャボン玉は壊れず、上へ上へと積み上がって行き、やがて塀のようにグラニユウを守る。

ダン

試しに打ってみたが、彼女の言うとおり、弾丸はシャボン玉に当たり、その内用液により溶かされてしまう。

そして、壊れたシャボン玉の位置には、すぐに違うシャボン玉が補充され、隙はない。

その上、壁のなかからシャボン玉がこちらへと向かってくる。まさに完璧な攻撃だ。

武器などは役に立たない。

常識では考えられない攻撃、これが四天王の実力なのか。

「さあ、そろそろ終わりにしましょう」

グラニユウは、シャボン玉の壁の向こうから、シャボン玉の連射を始めた。

手のひらサイズのシャボン玉が、もの凄い数で向かってくる。

ダン・ダン

俺はすぐ側の机や床を狙って撃った。銃弾は机や床に当たり、木片や石片を飛び散らす。その飛び散った破片が、シャボン玉に当たると、シャボン玉は溶けてなくなった。

手当たり次第撃ちまくった。

『ナイン』は十二発の弾丸が込められるが、予備の弾丸は六十発しかない。残りが尽きる前に勝負を決しなければならぬ。なるべくグラニユウの方へ向かう道筋を作りながら、破片を飛ばした。

シャボン玉は次々に溶けて、床もその液体にさらされて溶け始めている。

石の欠片を投げつけ、それを弾丸で飛び散らせて、ついにグラニユウの一手手前まで接近することが出来た。

グラニユウは変わらずシャボン玉を撃ち続けている。

このままではこちらの残弾がなくなる。決死の覚悟で、俺は左腕をシャボン玉に突っ込んだ。

シャボン玉は壊れ、中の液体に曝され、腕は煙を上げながら溶け始める。

それでも、拳をグラニユウの方へと力を込め突き刺した。

グラニユウに拳が当たるころには、手の皮は溶け、骨がむき出しになっていた。

その骨さえも溶け初めている。

痛みをこらえながら、突き出した左腕に沿うように『ナイン』を連射し、グラニユウを撃った。

弾が尽きた。

左腕の感覚もない。

その頃には、シャボン玉は体のあちこちに接触し、壊れ、液体をばら撒いていた。

全身の痛みのあまり、意識が遠のく。

弾丸がシャボン玉を貫通し、グラニユウまで届いたかどうかは定かではない。

シャボン玉の攻撃をともに喰らい、その場へ倒れこんだ。

「ルイ、すっかりして。大丈夫？」

どのくらい時間がたったのであろうか。心地よい声が体を包む。眼は開かなくとも、そこには美しい景色が広がっているのが分かった。

「ここは天国か」

そこは、いつしか運び込まれた朱里の家の医務室だった。横にはアデポネもいる。

「助かってよかった……。あとすこし遅かったら」

朱里の顔は涙で濡れ、包帯だらけの俺の胸に顔を埋めた。

「奴は、倒したのか」

弾が尽きたところまでははっきりと覚えている。その後、グラニユウはどうなったのか。

「死んだわ。誰なのかしらないけど、強い相手だったみたいね」

届いていたのか、再後の攻撃が。なんとか四天王の一人を倒せたというわけだ。

朱里達が駆けつけた時には、グラニユウは倒れ、栗夏達は逃げ出した後だったという。

部屋中に妙な液体が散乱しており、助け出すのに一苦労だったと。

「あと三人……。三人倒せば、自由になれるんだ」
朱里に全てを話した。

三日三晩眠っていたそう。その頃にはすっかり体力も回復しているのに驚いた。通常であれば全治六ヶ月は下らない。だが、回復力が以前とは比べ物にならないくらい向上している。これがオンコジーンの奇跡の力なのだろう。

「もう無茶はしないでね」

朱里のやさしい声が心に響く。そう、彼女を守るためにも、そして自由になるためにも戦わねばならない。

栗夏はグラニユウを倒した俺に恐れをなし、無理な統治はしないと約束したという。民意を聞き入ると誓いを立て、朱里の意見を受け入れると。つまり、こちらの力による支配に屈したのだ。結局は強いものが支配する世界。その縮図は変わらない。

「父が、四天王とかいう人とコンタクトを取って、ルイに会いたいて言っているそうよ。話し合いがしたいそうだから、今度は争いにならなくて済むかもしれないわ」

朱里の心配そうな面持ちは変わらないが、少しの希望に託す気持ちが伝わってくる。

「それに、今度は何人で来てもいいっていつているし、武器を持ってきてもいいって」

余裕なのか、それとも本当に話し合いでの決着をしようとしているのか。とにかく行ってみないことには真意は分からない。

「よし、行こう。でも他の人たちに迷惑をかけるわけにはいかない。だから、今回も俺一人で行く。武器さえあれば大丈夫だし」

前回の戦いを教訓に、『ナイン』以外にも、盾を作っていた。

「ダメよ。絶対ダメ。話し合いをしたいって言っているのよ。平和的和解があるかもしれないわ。私も参ります。四天王とまで呼ばれている人ですもの、嘘をつくわけがないわ」

朱里の意思は固かった。俺が一人で死ぬのを許さないであろう。死ぬ時も一緒、そんな気迫が伝わってくる。

「分かった。では二人で行こう。相手が攻撃してくるまではこちらも手を出さない。それでいいね」

朱里は頷き、ありったけの武器を用意して、四天王の下へと向かった。

四天王が待つのは、スプリンという地名の場所だった。朱里らの住むベタからは車で二時間ほどの距離にあり、

ただの田舎町である。そこに世界を裏から牛耳る四天王がいるのだ。

「グラニユウは尋常ならない攻撃をしてくる敵だった。次もきっと常識では考えられない攻撃をしてくるかもしれない。その時は、何があっても逃げるんだ」

朱里との三年の幸せな時間はかけがえのないものだった。それが終わろうとしている。強靱な力によって。

奇跡を手に入れた俺たちに取って、どんな障害でも乗り越えられるはずなのだが、何故か破滅の予感がする。

「分かってるわ。ルイの気持ちも。平和的解決が望めないと分かれば、私はすぐに退散するわ」

朱里には、俺の身に起きたような変化は見られなかった。体力の回復も、技術的な亢進もない。つまり、オンコジーンの奇跡を享受できたのは俺だけだったのだ。

「やつらの狙いは、多分俺一人だろう。異血とやらを持つ俺の命が狙いなんだろう」

もちろん、オンコジーンも持ってきている。紐を付けて、首からぶら下げないようにし、胸の中へしまっておいてあった。

「奇跡。もう一度起こるといいな」

前回、処刑場での地震のような、天変地異が見方してくれるのであれば、俺にも勝機はある。

朱里の父に教えてもらった地図に従い、スプリンの町に着いた後、町の中央にある教会を訪ねた。

そこには牧師さんがおり、教会の地下へと案内された。

地下は最新の電子機器で埋め尽くされた大きな施設となっており、まさにこの国を牛耳るに相応しい機器が揃っている。田舎町の地下の意外な光景に驚かされたが、通された応接室はこじんまりとした殺風景な一室だった。

「まさか、こんな施設があるなんて」

朱里の驚きも無理はない。影の組織が存在する。だが、その存在を知る者は誰もいないのである。

「油断するな。いつ襲ってくるかわからない」

敵陣の中に飛び込んで来たのだ。いくら武装しようとも、簡単に捕らえられるであろう。それを承知でここまで来たのだ。俺は『ナイン』の引き金を引いて待ち構えた。

十五分くらい待たされただろうか。

「うつっ……」

突然、朱里のうめき声が上がった。

苦しそくに前のめりになり、胸のあたりを押さえている。

「どうしたんだ。何かされたのか」

まだ応接室には誰も入ってきていない。人の気配もない。いったい何が起きているというのか。

「ソファの後ろから、突然針みたいなのが飛び出して来て、痛い

と思った瞬間、胸が熱くなったの」

彼女の背中には、確かに針穴が空いている。だが、出血などはない。ひとまず命に別状はなさそうだ。

ガチャ

「おまたせしたわね」

長いコートを着た女性が姿を現した。四天王は女性が多いのか。

「いったい彼女に何をした！」

俺は銃口を四天王の一人に向けた。

「そちらの彼女の細胞を少し頂いたわ」

そういつて彼女は、どつしりとソファアに座って、煙草に火を点けた。

脇には大きな刀を刺している。この御時世に大刀を振り回すというのだろうか。

「私は四天王の一人、ファージよ。オンコジーンを開花させた方にお会いできるなんて光栄だわ」

彼女の武器は、刀以外にはなさそうだ。

「なぜ彼女の細胞など必要なんだ。目当ては俺じゃないのか」

俺は銃口をファージの方へ向け、引き金に指をかけ威嚇する。だが、ファージは微動だにしない。打てるものなら打ってみると言わんばかりの余裕だ。この国を支配する四天王の一人、何があるか分からない。

「ただ死んでもつまらないでしょ？ 余興よ。ついでに教えていてあげるわ」

ファージの説明によれば、残りの四天王は、ファージの他、双子

の兄弟、NKと呼ばれる謎の人物とがいるという。NKは我がままで、一人で行動するので、今回の話し合いには来ないという。

この国の方針は、双子の一人のティセルが頭脳となり決定しているという。彼の判断は常に正しい。そして双子のもう一人は、この国の守護神として祀られしブラザ。神頼みの大体は彼が引き受けているという。

これが四天王の全貌だった。

「あんたの役割は？」

まだ攻撃を仕掛けてくるようなそぶりはない。ゆっくり楽しんでいるといった感じだ。

「私？ 私は、そうね。ジョーカーかな。オールマイティーね！フフ」

そう言って不適な笑みを浮かべる。

朱里は細胞を奪われたというが、胸の痛みは消え、何の変化もない。

「さあ、そろそろ始めましょうか」

そう言々とファージは立ち上がり、踵を返し、部屋から出て行くとする。

「ま、待て。話はまだ終わっていない」

待たされたあげく、世間話だけで済まそうとでもいうのか。俺はファージの背中に標準を合わせ、いつでも打てるよう身構えた。

「勘違いしないでちょうだい。だれがあなたたちと話合おうと思う？
あなたたちを抹消するために呼んだのよ」

そのまま出て行くとするファージの背中に向けて、俺は引き金を引いた。ファージの強さを推し量るためだ。大刀一本で、いったい何が出来るというのか。

ダン

入り口の扉は開いている。だが、そこにはもうファージの姿はない。俺が引き金を引く瞬間、消えていなくなったのだ。

「朱里、ひとまず地上によう。ここじゃ袋のネズミだ」
やはり最初から話し合いなどするつもりはないのだ。

「きゃ」

突然どこからともなく、手裏剣が飛んで来て、朱里の腕をかすめた。

「大丈夫か？」

彼女の傷は浅い。だが、まともに命中してれば、死んでいたかもしれない。

「とにかく、逃げよう」

俺は朱里の手を引いて、来た道を戻り、教会へと上がった。

だが、またもや手裏剣がどこからともなく飛んで来る。

寸前のところで交わしても、またブーメランのように戻ってくるのだ。

ダン・ダン

拳銃で弾き飛ばすが、次から次へと手裏剣の数は増えてくる。しかも、朱里だけを狙って飛んで来ているのだ。

教会から急いで外へと出た。

車に置いてある盾『ヴィエ』を取り出し、朱里に持たせた。この盾は攻撃を察知して、その方向へ自動修正する機能をつけてある。彼女でも十分使いこなす事ができ、彼女の命を守ってくれるであろう。

「これでしばらく耐えるんだ」

手裏剣は、教会の裏から飛んで来ていることに気がついていた。急いで裏へと回る。なるべく手裏剣を打ち落としながら。

「ここまで来るのが、予想以上に早いですね」

ファージの言っていた双子だろう。どっちがどっちが見分けがつかない。

「すぐに止めるんだ」

双子の片方が、手裏剣を作り出し、もう一人が手裏剣を飛ばして

いる。

ダン

手裏剣を飛ばしている方を狙って撃った。

キン

俺と双子の間に、いつの間にか、ファージが立っている。そして、大きな剣で、俺の弾丸を弾き飛ばしたのだ。

「これが余興とでもいうのか」

ファージほどの力を持つてすれば、俺たちなどすぐに倒されてしまうであろう。しかし、それをしないのは、楽しんでいるだけじゃないかと思えない。

「そうよ。この手裏剣はね、朱里の細胞一つ一つに向かっているの分かる？」

先ほど取られた朱里の細胞の情報を分析し、追尾しているというのだ。そして、彼女の細胞が朽ち果てるまで、切り刻み続けるというのである。

「早くしないと、愛しの彼女が傷だらけになるわよ」

ファージは心から楽しんでいるようである。まずはファージを倒さないことには、手裏剣を止めることが出来ないということか。

「勝負を面白くしてあげるわ」

次の瞬間、ファージは俺の背後へと回った。

そのスピードを目で追うこともできない。

グサ

一瞬痛みが胸の辺りを襲う。朱里が受けたものと同じ攻撃なのだろう。

「TAAという技なの。あなたの細胞を頂いたわ」

その直後、もう背後にファージの姿はない。双子の方へと戻り、俺から採取した細胞を双子に渡していた。

ダン・ダン

俺は闇雲に発砲したが、すべてファージの剣によって弾かれてしまふ。力の差は歴然だ、というより、普通の人間が敵う相手ではない。常識を逸脱しているのだ。

直後、俺に向かって手裏剣が飛んで来る。寸前の所でかわしたが、弧を描いて戻ってくる。

銃で狙うが、数が増えてくると間に合わない。

肩や足などが手裏剣によりダメージを負った。

手裏剣はどんどん増えている。このままでは朱里もやられてしまふ。

なんとかしなければ。

手りゅう弾を投げてみたが、それもファージに切って落とされた。それも着火部分を正確に切り落とされている。何か突破口を見つけなければ。簡単に倒せる相手ではない。だが、時間もない。

焦りと無力感だけが先走る。

もう一度手りゅう弾を投げ、空中でそれを銃で爆発させた。その爆発を煙幕に、双子の方へと近づく。手りゅう弾を一個、また一個と投げては爆発させ、時間差で数十個のありったけの手りゅう弾を爆発させた。

あたり一面煙の渦となり、視界はほとんどない。

俺は一目散に双子へと走り、双子の一人、手裏剣を作っていた方へと銃口を向けた。至近距離であればファージとて弾くことは出来まい。

双子までの距離、わずかに五十センチ。

ダン

「まさか……」

ファージは倒れた。

俺は、自分自身のお腹に銃口を当てて引き金を引いたのだ。ファージが後ろから襲ってくることを想定し、双子を打つ振りをして。

だが、ファージの剣による一撃も食らうはめになった。

骨を切らせての、決死の選択だった。

「なんてね。期待させてごめんね。こんな攻撃では私は倒せないわ」一度は倒れたファージだったが、再び上半身を起こす。確かに銃弾は彼女を貫通していたが、急所は外れていた。それどころか、傷口が徐々に塞ぎ始めてるではないか。

「私、無敵なのよ。どんなに傷を負ってもすぐに回復するの。だからあなたには勝ち目はないわ」

俺の傷の方はまだそれほど回復していない。回復力も数段ファージの方が上なのだ。

その上、数十個の手裏剣が四方から飛んでくる。

もう逃げる術もない。

傷の痛みと、渾身の攻撃とが効かなかったことによるショックで、俺は立ちすくんだ。

万事休すか。

「さあ、終わりにしましょう」

ファージは大刀を振りかざしたその時である。

ゴゴゴゴ

突然の地鳴りが響く。だが、今回は地震ではない。地面に揺れない。空気の振動。張りつめた空気が歪むかのような感覚。風は止み、雲は静止する。まるで時間が止まっているような感じだった。

「こ、これは……。トレランス！」

ファージは目を見開き、苦しそうな表情を見せる。そして、お腹を押さえながら前のめりに倒れこんだ。よく見ると、先ほどまで治癒に向かっていた俺の放った銃弾の跡が、再び開き始めているではないか。血がドクドクの流れ出し、ファージは意識を失った。

先ほどまでこちらに向かって来ていた手裏剣も、あちらこちらへと飛んでいってしまった。いったに何が起こっているのか。

だが、この正気を逃す訳にはいかない。俺は、ファージに留めの一発を放ち、目の前にいる双子とも銃殺した。

「朱里、大丈夫だったか」

盾の『グイエ』はボロボロになりながらも、朱里を守り続けた。あと数分、いやあと数秒遅ければ、彼女は八つ裂きにされていたであろう。

「危なかったわ。倒したのね。四天王は、あと二人ね」
朱里の手足にも手裏剣による傷が痛々しく残っている。

「いや、今三人倒してきたから、あとはNKというの奴だけだと思う。一匹狼みたいだから、ここにいるのかどうか分からないが」
もう少してやられるところだったが、奇跡は続く。

「ファージが死ぬ前に、トレランスっていつていたんだけど、知ってる？」

地震ではない、何か。異常気象なのだろうか。

「聞いたことあるわ。大昔に何度か起こっているって。空間が歪んで磁場が発生するって聞いたような気がするわ。特殊な能力も、そのせいで使えなくなったのかもしれないわね」

何十年に一度起こるといわれているトレランス。それがたった今起こっているのだ。数分で終わるかもしれないし、数時間続くかもしれないという。

「四天王はもしかすると、何か特殊な力を持っている集団だったのかもしれないわね」

その強靱な力で世界を支配してきたのだろう。だが、その力さえもトレランスの中では無と化したのだ。

「さあ、帰ろう。治療が先決だ」

俺は朱里の肩を担ぎ、車へと戻ろうと歩き出した。途中、四天王の三人の屍の横を通り過ぎようとした時、突然真っ黒いマントの男が現れた。一瞬で空気が凍りつく。とてつもない殺気を放っている。

「運の悪いやつらだな。それともお前が幸運なだけなのか」

身長は高く体格は良いが、そこに突然現れた俊敏さは、ファージのものと同じだ。

「俺はお前と同じ、ただの殺し屋だ。だが、違うのは、世界最強と
いうことだけだ」

これがNKだ。間違いない。四天王の再後の一人、再後の刺客。
奴さえ倒せば、本当の自由が手に入る。

「俺にはトレランスは無用だ。さあ、かかって来い。お前が何者で
あるうとも、切るだけだ」

NKの気迫はすさまじい。世界最強の殺し屋。

「朱里は逃げるんだ。約束だろ。俺は奴を倒す」

車まではもう少し。俺は朱里を背中に隠すように少しずつ移動し、
ファージの持っていた剣を拾い上げた。

「分かったわ。きをつけてね。生きて帰って。それが約束よ」

朱里は車まで走り、乗り込んだ。これで何も気にせず戦う事が出
来る。

「逃がすか。G2D」

NKは、ブーメランのようなものを投げた。『G2D』という名
前なのだろう。孤を描き、車の窓ガラスを突き破って朱里のいる運
転席へと直撃した。車は方向性を失い、近くの電柱へとぶつかって

止まった。

攻撃の正確さ、殺傷能力、共に一流の殺し屋に違いない。

「朱里！」

ブーメランを止めることが出来ず、攻撃を許した自分の不甲斐なさが悔しかった。

衝突した車のドアを自力で開け、出てくる彼女の姿が確認できた。何とか一命は取り留めたようだ。だが重症には違いない。すぐにも手当てしないと。

「相手は俺だ！」

怒りと、恐怖とが入り混じり、力が入る。

ファージの持っていた剣を投げつけ、同時に、『ナイン』でNKを狙った。

だが、俺の攻撃は全て読まれているかのように、素早く避けられてしまった。

爆弾の類の手持ちもなく、残っている銃弾もわずかだ。

長引くと不利になる。

やはり、接近戦で撃ち抜くしか方法はなさそうだ。

先ほど撃った自分の腹部の弾痕も大分癒え始めていた。並外れた治癒能力、これがオンコジーンの力なのだ。

痛みはまだあるが、戦いに集中できないほどではない。

「これで終わりにしよう」

そう言っただけでNKは黒いマントの下から拳銃を出した。黒く光るその拳銃は、異質な存在に見えた。

「望むところだ」

俺も『ナイン』を構える。残る弾丸はあと三発。これで最後だ。

ダン

まずはNKが攻撃してきた。弾丸の発射位置から軌道を推測して、寸前の所で交わした。

その弾丸は後ろにあった家の壁へと当たった。

弾丸が壁に当たった直後、壁は見る見る砂となり、崩れ落ちたのだ。

「この銃の名をグランザイムという。そして、放たれる弾丸はパーフォリン。全てのモノを無に返す」

NKの持つ最強にして無敵の武器。触れれば最後、どんなものであっても無になるのである。

ダン

パーフォリンが、次から次へと放たれる。壁に隠れようと、すぐに砂のように崩れ去り、隠れる場所などすぐになくなってしまふ。俺も応戦するが、軌道は読まれ、当たらない。残る弾丸はあと二

発。

何度かNKの攻撃を交わしている間に、NKの持つグランザイムという銃は連射が出来ないのではないかということに気がついた。一回、一回引き金を引くのに随分と時間がかかっている。といったも二、三秒ではあるが。

この数秒が命取りだ。それだけあれば、NKに近づき、至近距離から撃てる。

一か八か賭けてみるしかない。

真正面から突っ込んで行った。全速でNKへと近づく。

ダン

NKの放ったパーフォリンをめがけて一発撃った。

俺の弾丸はパーフォリンに命中し、弾丸はすぐに消えてなくなり、パーフォリンも消滅した。

わずかコンマ何秒の出来事だ。

弾丸に弾丸を当てるというのも、オンコジーンによる能力向上のお陰で出来る芸当なのだ。

次の瞬間にはNKの懐に入った。グランザイムの引き金を引くだけの時間はない。

俺は避けられないように銃口をNKの心臓に向けて数センチの至近距離から再後の一発を撃った。

ダン

NKの左手には、もう一丁の拳銃が握られていた。これもグランザイムと同じもの。つまり二丁あったというわけだ。

今まで、引き金を引く時間を俺に見せるために、一丁しかないフリをしていたのだ。

その策に乗せられて、俺はNKの懐に入ってしまったのである。

もう一丁のグランザイムから放たれたパーフォリンが俺の胸に直撃した。

そして俺の再後の一撃は、寸前の所で手元が狂い、空へと舞った。

「終わりだな、小僧」

パーフォリンにより、俺は無となって消えてなくなる。服も何もかも。跡形も無く。

今まで、その事実例外などはなかった。

どんなモノであったとしても、パーフォリンには消滅させられる力があつた。

ダン

俺は、NKの持っていた右手のグランザイムを奪い、それでNKを撃った。

「パーフォリンが効かぬだと!？」

それがNKの再後の言葉となった。直後NKは砂となり、朽ち果てた。

カツ・カツ・カツ

「とうとう四天王まで倒してしまったのね」

ブーツのヒールを鳴らしながら現れたのはジェネだった。もともと彼女が仕掛けてきた戦いだったのだ。四天王をけし掛けることが彼女の目的であつたのだが、俺が勝利するという形で幕が下りた。

「残念だけど、四天王不在のこの国はやがて滅ぶわ。ルイ、別にあなたが悪いわけではないの。ただ、そういう運命だったというだけだから。気に病まないでね。後は、短いけど余生を楽しんでね」

ジェネは悲しそうにこちらを見据えている。それは、監獄レバからの脱出の時に遠めで見えた彼女の表情と同じだった。

「ジェネ、お前はいつたい何者なんだ。ただの金持ちの箱入り娘ではないんだろう？」

彼女には腑に落ちない点が多くあつた。一番最初に出会った時も、夜中のヒッチハイクだったし、コソコソと家へ帰るのを手助けしろというし。

レバから俺が逃げるのを先回りして知っていたのにも氣になる。そして今回の戦いだ。全てを知っていたとでもいうのであるうか。

「韻の一族には、昔から特殊な能力が宿ると言われているわ。代々受け継がれし能力。それは『千里眼』。遠くのものだけではなく、近未来も見ることが出来るの」

韻の一族が栄えて来た理由は、そこにあつたのだ。未来が見える能力だと。

「ルイと初めて出逢つた頃は、まだ能力が完全ではなくて、不安定

だったの。そのせいで、家出したりしたわ。あたなに頼めば連れて帰ってくれるって見えたから、頼んだのよ」

懐かしく語るジェネの目には涙が浮かんでいた。

「でも、あなたに上げた鉄片が、まさかオンコジーンといわれるものだったのなんて。私にも責任があるわね」

すべての始まりは、彼女から受け取ったオンコジーンだったのかもしれない。オンコジーンは引き合い、そして選ばれしものの能力を开花させ、不死鳥へと導く。

「終わったのね」

朱里が傷を抑えながら、肩で息をし、なんとかこちらへと歩いて来た。

「ジェネ、あなたが黒幕なの？」

朱里には全て話していたし、彼女はジェネとの面識もあった。お互いセレブなお嬢様として似たような境遇で育ってきたのだ。

「私の役目は、この国を守ること。でも、出来なかったわ。オンコジーンを集める段階で止めるべきだった。でも私の予知は完璧に見えるわけではないの。致し方ないわ」

もう全てが終わってしまったと、ジェネは告げる。その意味する事は分からなかったが、もう俺たちを狙ってくる刺客はいないということでもあるう。

「これで、やっと自由になれるんだな」

俺は朱里の肩を抱き、ジェネに別れを告げた。

近くに置いてあった車を拝借し、朱里の家へと戻る。

激しい戦いだったが、またも偶然に助けられ生き延びた。

そして奇跡は続く。

二時間かけて、朱里の家まで辿りついたところには、彼女はぐったりとしていた。だが命には別状はなさそうだ。

「あなたも撃たれたんでしょう？」

俺の服の胸の辺りに、パーフォリンによって出来た大きな穴が出来ていた。円形に服が焦げている。

「ああ。殺られたかと思ったけど、偶然、首から下げていたオンコジーンに当たったんだ。そして、奴の弾丸をオンコジーンが飲み込んだ」

NKとの戦いの最後、確かにパーフォリンは俺に命中したのだ。だが、運良くそれはオンコジーンに当たった。そして、その一瞬が運命を分けた。

NKは油断したのだ。パーフォリが命中するのを確認し、次に備えなかった。

全てを無に返す力を持つパーフォリンと、永遠の魂が宿るオンコジーンが衝突したのである。

結果は俺に生きると語ったのだ。

オンコジーンを見ると、少し熱っぽくなっているのに気がついた。以前と少し色合いも変わっているようだ。少し半透明になり、輝きを放っている。それはオンコジーンを合体させた時に見た光と同じものだった。

何か変化が起こっていることは確かだが、それが何なのかは分からない。

「でも、これで俺達の邪魔をするものは誰もいない。やっと本当の

幸せが訪れるんだ」

傷ついた朱里を抱きしめ、朱里を医務室へと連れて行った。

その後、数日が過ぎ、俺達の周囲には平穏が訪れた。

栗夏もすっかり大人しくなり、街は活気を取り戻しつつあった。異血を持つ俺が、朱里と一緒にになることも、皆受け入れてくれ、一緒に幸せに暮らすことができるようになったのである。

だが、四天王が消えた影響は少しずつではあるが出始めていた。突然の地震、異常気象、バツタの大量発生、海の魚の異常死、異常スモッグの発生。少しずつではあるが、何かが狂い始めていたのである。

俺達でさえも、単なる環境の異常だと思っていた。

だが、それらの天変地異が、四天王不在が原因で起こっていることを知っているのは、ジェネくらいであった。

そんな数日が過ぎたある日、俺を訪ねてくる者がいた。

「久しぶりだね、ルイ」

それはアデノだった。四天王が居なくなつて、爺とのパイプが断たれたのだという。今まで爺へと命令していたのは、四天王だったのだ。つまり、俺は四天王の駒使いをしていたというわけだ。

「もう仕事もしなくて良くなったの。で、行くところがないんだけど、一緒に住んじゃダメ？」

爺は仕事がなくなり、隠居したらしい。アデノも、本来は殺しなと続けていたくはなかったのかもしれない。

「いいわよ！ルイの兄弟なら大歓迎だわ」

朱里は快く引き受けてくれた。血は繋がっていないことも承知し、

一緒に暮らすことになった。

アデノに仕事も世話をしてくれて、毎日が楽しいものとなった。

「兄弟闘わなくて済んで良かったわね。本当はどっちが強いのか？」
朱里が興味本位で聞いた。

「アデノの方が強いよ。質がいい。俺なんかより俊敏だし。闘ってたら負けてたな」

今となっては昔の話だ。もうお互いを傷つけあう道理などないのだから。

それからは、アデノも含め誰からも追われることのない生活が送れるはずだった。

もう争いはない。真の平和が訪れるはずだった。

やっと自由になれるはずだった。

異人血を持つ俺でも、なんら変わらぬ生活を送り、生涯を幸せに全う出来る、はずだった。

だが、現実には俺の、俺たちの予想するものとは違う方向へと動いていたのである。

「ちょっと環境の様子がおかしいわ。何かが起こっているのかもしれない」

朱里の下へと入ってくる全国からの情報は、メディアなどで公表されているものとは異なる。つまり、機密事項なのであった。全て公表すれば、国中がパニックになるであろうと思われる、一部メディアの規制が行われていた。

毎日飛び込んでくる新しいニュースは、どれも異常気象を告げるものばかりだ。

まるで世紀末。この世の崩壊を示唆しているかのようでもある。

だが、その事実が気がついているのはほんの一部の人間だけだった。

「いったい何が原因なの？」

興奮気味に朱里は情報の精査をしていた。無理もない。今までの常識では考えられないほどの異常気象が各地で起こっているのだ。

「俺のせいなのかもしれない。四天王を倒したから、その影響なのかも」

ジェネの予言だ。だが、それは誰にも話してはいない。朱里にさえも。せつかく手に入れた平穏を、無用な危惧で壊したくはなかったのだ。

「そんなはずはないわ。四天王の後釜の仕事は、インフェやサイモシンがしっかりとやってくれているもの」

朱里は韻一族の実権を受け継いでいた。国家の中枢を支配する能力を持つ一族なのだ。

「だとしたら……。異人血を持つ俺が生きている影響なのかな」
異人血を持つものはすぐに処刑される。それが世の常であった。だが俺は生き延びた。オンコジーンという奇跡のお陰で。

「隠れ異血人はたくさんいると聞くわ。だから、ルイー人が生きていたって影響はないはずよ」

朱里は励ますように反論する。異血人との恋愛は御法度。ましてや結婚など。世間からはどのように揶揄されているのであろう。それを乗り越え、彼女は強く生きている。

「もしかしたらオンコジーンの影響なのか」

パIFOリンを吸収したオンコジーンは以前のものとは少し違う様相を呈していた。

まるで、何かを呼び寄せているような鼓動が聞こえる。

「まさか。だってオンコジーンは奇跡を起こすものなのよ。破滅に向かうなんて方向が逆じゃない」

確かに朱里の言うとおりだ。今まで俺たちはオンコジーンの奇跡によって生き延びていた。オンコジーンが無ければすぐに死んでし

まっていただろう。永遠の命。不死の力。それが奇跡だと。

俺は仙人の言っていた言葉を思い出していた。オンコジーンは変化を起こす三枚と、永遠の魂を呼ぶ三枚とが合わさって出来るのだと。

変化と永遠。それらの行き着く先とはいったい。

日に日に、環境異変は大きくなっていく。海水温の上昇に始まり、火山の噴火。突然の雹の嵐。竜巻の大発生。地震に津波、台風の連鎖。

各地で死傷者が続出し、街も機能を失っていた。

「いったい、何がどうなっているというの!」

朱里は焦り、限界に来ていた。原因もさっぱり分からず打つ手がないのだ。

「ジエネに聞いてみるしかない。この破滅を止める、何かいい方法があるかもしれない」

俺達はジエネの家へと向かった。興味本位でアデノも着いて来ていた。

地図に載らない城。神に一番近い場所カプジ。これで三度目の訪問となった。

「そろそろ来る頃だと思っていたわ」

千里眼を持つ娘ジエネ。彼女の能力であれば、解決策も何か分かるかもしれない。

「これが、この世の破滅の始まりなのか？」

各地で起こっている異常気象はどれも原因不明のものばかりだ。

「そう…かもしれないわね」

歯切れの悪い返事をよこす。彼女には全てが見えているわけではないのだろう。

「でも。こんなことを出来るのは彼しかないわ」

EPIの城の最上階から、窓の外を眺めながらジエネは言う。

これらの異常気象が、誰かの意思によって起こされているのだと。そして、それは恐らく、オンコジーンのパワーを止めるためにしている事なのだと。

「だれがいったいそんなことを。国民を偽性にしてもいいというの？」

朱里も怒りを募らせる。オンコジーンを得て自分たちは生き延び、やっと幸せを手に入れようとしているのに、何故国民がその犠牲にならなければならないというのか。

「それは……。神よ」

誰にも語られることのない真実。誰も知りえない事実。

「ここが神に近い場所って呼ばれているのは知っているわね。それは本当なの。神はいるわ。実在する。彼はこの世の全てを支配しているのよ」

そんな宗教じみた話、と、今までなら思ったかもしれないが、ジエネが話すと信憑性がある。

「彼の名はブレイン。今は六野にいるのかしら。あちこち移動する人だから、会えないことも多いけど」

ジエネの話によると、このカプジの地下のずっと下に、神の住む場所があるという。いくつかのテリトリーを持ち、支配する領域ごとに分かれているという。

「会わせてくれ。オンコジーンの方が原因なら、なにか解決方法があるかもしれない」

他に打つ手立てはないのだ。

このままこの世の破滅を迎えるなどとは考えたくはない。

「原因は、四天王を倒したこともかもしれないけど」

四天王は、この国の統制。神より選ばれし護衛。特殊の能力を持つ彼等の代役は誰にも務まらないのかもしれない。

「でも、やっぱりオンコジーンでしょうね。諸悪の根源は。行つてきなさい。どうなるか想像もできないけど」

ジエネの話によれば、今までブレインと会ったこととなる人は誰一人としていないという。ジエネの特殊な能力のお陰でその存在が知りえるだけなのである。

だが、会いに行く方法が無いわけではないというのだ。

ジエネの案内で、EPIの城を地下へと降りる。

地上の光が届かない地下へは、懐中電灯片手に降りるしかない。暗く続くらせん階段。いつたいどこまで続くのであろうか。

「ここまでよ。私がついて行けるのは。ここから先は一人で行くしかないわ」

らせん階段の終段は、洞窟の入り口へとつながっていた。真つ暗な洞窟の先には何があるのか分からない。

「ここを通って、今まで生きて帰って来た人はいないわ」

神のいる聖地へと入り口。聖域へと扉。ここが未来への掛け橋となるのか。

「よし。じゃ、俺一人で行く。すべては俺の播いた種だ。運がよければまた戻ってこれるさ」

多くの人たちを犠牲にしてきた。そんな上で幸せを手に入れたとしても、それは本当の幸せではない。ただ平穩に、何もいらぬ、何も起きない。そんな幸せが欲しかっただけなのだ。

「ダメ。私もついてく。死ぬときも一緒よ」

朱里の決意は固い。もう、離れるなど考えらない。一人で生きていくなんて無理だと訴える。

「それじゃ、意味がない。朱里はここに、この世界に残るんだ。そして俺がこの世界を救った事実を見届けて欲しい。もし、出来なかったときは、朱里が神に頼んでくれ」

俺か、朱里かがやらなければならない。できれば俺が成し遂げた

い。この世界の破滅と止めるという使命を。

「運よく帰ってこれたなら、その時こそ、本当に幸せになろう」

俺は、朱里に力いっぱい抱きしめ、キスをした。ジエネとアデノの前だったが、恥を忘れて。これで最後かもしれない。そんな予感がそこにいた四人を包んでいた。

「分かったわ。もし、あなたが失敗したら、私が後を追います」

朱里の顔を伝う涙は、彼女をより強く魅せていた。くしゃくしゃの顔とへの字に曲がった噛み締めた口元が忘れることが出来なかった。

「愛してるよ、朱里」

出会えてよかった。一緒に生きてよかったと、心から感謝した。

「ここから、先は試練の門『グリア』があるわ。そこを抜けると、六野と呼ばれる空間へと道が繋がっているはずよ」

ジエネには先が見える。俺が神の起こす天災を止めるかどうか、ジエネであれば確認ができる。

「私も行くわ。この世に、未練なんてないから。ルイの手助けになるかもしれないし。それに、神にも会ってみたいし」

突然口を挟んだのは、アデノだった。今まで興味本意でついてきただけかしら思っていなかったが、意外だった。アデノも俺と同じ、小さい頃に親に捨てられ、そして爺に育てられたのだ。殺し屋として。感情などというものは遠に忘れているであろう。神に会いたい気持ちも少なからず理解できた。

「助かるよ。じゃ、二人で行こう」

俺とアデノの二人で、試練の門『グリア』へと向かった。もう後

戻りはできない。朱里とジエネはその場で立ち尽くす。きっと戻る。そして、今度こそ幸せを手に入れる。相手が神であろうが、何であろうが、俺達の幸せの邪魔などはさせない。

しばらく洞窟を進むと、前に扉が見えてきた。これがジエネの言う、試練の門『グリア』なのだろう。

高さ三メートルくらいはあるだろうか。大きな扉には鍵などついていない。アデノと二人で、片方ずつの扉を力いっぱい引っ張った。扉はゆっくりと開く。

「本当にいいのか？生きて戻れないかもしれないんだぞ」

アデノは、首を縦に振る。迷いなどはないようだ。俺にとっては心強いが、死を覚悟させなければならぬのは心苦しい。

「行こう。神とやらに会いに」

アデノに促され、俺は『グリア』の中へと入った。

グリアとは、ネバネバしたジャムのような空間だった。スライムの中にいるような、そんな感じた。

手足は自由に動かせるが、ジャムの抵抗が大きく、ゆっくりとしか動かせない。

何メートルか先には、光が見える。そこが出口なのだろう。

ジャムは口や鼻の中にも埋め尽くされ、息が全くできない。急いで行かなければ、神と会うまでに息絶えてしまう。

必至にもがきながら『グリア』を前へ前へと進んだ。その後アデノも続く。

あと少しで、出口の光が見えた所まで来たとき、俺体が止まった。

グサ

胸の中央に、剣が突き刺さっている。

背中からまっすぐに貫いて。

「アデノ……」

ジャムが口にも入ってきているので声に出すことはできない。

だが、肺に貯めていた最後の空気が漏れる。

振り返ると、アデノがもう一本の剣をこちらめがけて振り下ろすところだった。

ダン

俺は瞬時に『ナイン』の引き金を引いた。グリアの中でも、銃弾は発射でき、アデノを貫いた。

彼女は間もなく息絶えた。

「はぁ、はぁ。なぜだ」

やつとのことで『グリア』を脱出した。胸に刺さっている剣はそのままだ。抜けば致命傷となるだろう。

なぜ、アデノが俺を殺そうとしたのかまったく分からなかった。

そのために、俺に付いて来たともいうのか。

息が苦しい。いつもはオンコジーンのおかげで回復するが、ここでは回復する兆しがない。このまま死んでしまうのか。早く神に会わなければ。

光の方へと真っ直ぐに進む。

眩いばかりの光の奥に進むと、一人の老人が椅子に座っていた。

「よくぞ辿り着いたな」

話てはいない。脳の中に直接話しかけてくる感覚だった。

「お前がブレインか」

俺の声も、口に出さなくても会話できるようだ。

「如何にも。わしがこの世を治めしブレインじゃ」
頭の中に直接届く声が告げる。神など、本当に存在しているとは、
この時まで信じていなかった。

最後の意識を振り絞り、ブレインとの交渉に挑む。

「最後の試練によく耐えたな。アデノはわしが送り込んだ刺客じゃ」
始めから、アデノは俺を殺すつもりだったという。最後の最後で、俺を止めるのが彼女に課せられた使命だったのだと。

「何故そこまで」

昔から知っているアデノ。どんな経緯で刺客にならねばならなかったというのだ。

「世を支配しているわしに、出来ないことはない。……というよりも、お前を仕留める手だてはそれくらいしかなかったと言ったほうが正確じゃな」

俺を殺すために、オンコジーンを消滅させるために、そこまでしなければならぬというのか。

「オンコジーンは奇跡を起こすものではなかったというのか」

全てはオンコジーンから始まった。引き合うことで、ひとつの形となり、花開く。

「確かに、お前からすれば奇跡なのかもしれないな。だが、わしにとってそれは驚異じゃ。オンコジーンは変化と永遠を可能にする。つまり、今ある現状を好まず様相を変え、終わりにき生命を可能にする。そのパワーを封じる方法はない。だから、すべてを破壊するしか方法がないのじゃ」

神にすら変えられないオンコジーンの力。

神は、なんでもできる存在などではないのだ。

神は、すべきことをする存在。

選択こそが神の使命なのかもしれない。

「このままオンコジーンを見過ごせば、やがて地は滅ぶ。全て、オンコジーンのパワーの源となって吸収されつくすのじゃ」

変化するのにも、永遠の命を存続させるのにも、それなりのパワーが必要だという。

「では、このオンコジーンを破壊すれば問題は解決するのか」

俺はオンコジーンを神へと差し出した。すべての悪凶はこのオンコジーンなのだ。

「破壊……は、残念ながらできまい。それが永遠という意味じゃ。だが、もしかすると、封印ならできるやもしぬ」

オンコジーンの封印。現状のまま力を抑え込む。

「どうやる。教えてくれ」

それが何を意味するのか分からない。

「封印にもパワーが必要となる。お主の命と引き換えに封印する。どうだ、やるか？」

これが神、ブレインとの取引だった。

オンコジーンの手に入れた俺の手で、封印しろというのだ。その方法を教えるという。

そして、それは命をかけるものだ。

「だが、封印したからといって、いつその封印が解けるか分からん。お前の覚悟次第であろう。残された愛するものを思う気持ちが強ければ強いほど、きっと封印は長く守られるであろう」

封印が解ければ、間違いなくこの世は破滅する、いやさせるとい

平穩が少しでも続くのであれば、俺の命ひとつ、安いものだ。

「朱里に、伝言は頼めるか」

俺は腹を決めた。いや、ここに来る前にもう決まっていたのかもしれない。何があっても、朱里の、朱里のいる世界を守るのだと。

「うむ。話してみい。朱里の脳へ直接つないでやろう。特別にな」
そう言うのと、ブレインは俺の頭へと手を当てた。

「朱里、聞こえるか。俺だ、ルイだ。今ブレインを通じて話している」

目を閉じて、朱里を想像しながら話した。

「ええ。聞こえるわ。無事に着いたのね」

朱里の返事もちゃんと聞こえる。愛おしい彼女の声。これが最後の会話となるであろう。

「ブレインとの話し合いはついた。オンコジーンを封印することにする。だが、それには俺の命が必要なんだ。分かって欲しい」

二人の未来に、奇跡など、最初からなかったのかもしれない。

「結局そうなるのね。分かっているわ。わたしのためにそうしてくれようとしているのよね。愛してるわルイ」

多くは語らなくとも、二人の間に絆はしっかりと出来ていた。俺の意志も希望も全て飲み込んで、その上で受け入れようと努力してくれている。

朱里には朱里のしなければならぬ事がある。世の平和を維持するために尽力しなければならぬ使命にある。

俺には、俺にしかできないことがある。

たったそれだけの事なのだ。

「さようなら朱里。本当に楽しかった。ありがとう」

それ以上の言葉はもう出て来ない。いくら伝えても伝えきれない。

「俺の分まで、幸せになってくれ」

俺の後を追うような真似だけはしないで欲しい。彼女ならきっと強く生きて行ける。

「ルイ。これから先もずっと、私の心のなかであなたは生き続けるわ」

初めて朱里を見た日、話した時、恋に落ちた瞬間、会いたかった日々、一緒に過ごした時間、一緒に愛し合った思い出、喧嘩した日々、寄り添いあった温かさ。全ての記憶が走馬灯の様に脳裏を巡る。そして、その一つ一つがかけがえのない宝石のように輝いていた。

「最後にひとつだけ教えてくれ」

朱里との意思疎通は途絶えた。それは、封印の儀式の始まりを意味していた。

「俺が異人血を持つからオンコジーンが破滅へと向かったのか」

未だにオンコジーンの謎は解けてはいない。いったい何のために開花し、何が目的で永遠に魂を存続させようとしているのだろうか。

「それは、恐らくじゃが、たまたまであろう。だが、異人血を持つお前でなければ、オンコジーンはもつとゆつくりと開花していたのかもしれない。そして、NKから受けたパーフォリンがその成長を著しく速めたのは事実じゃろう」

ブレインは俺の頭に手を当てたまま答える。

あの時、トレレンスが起こらなければ。あの時、偶然オンコジーンにパーフォリンが命中していなければ。幾重にも重なる偶然と、意志によって生き延び、開花し、進化し、そして加速したのである。

「さあ、オンコジーンを」

俺はブレインのもう片方の手にオンコジーンを渡した。

ブレインは意味不明の言葉を唱え始めた。

やがて意識が遠のく感覚へと導かれる。

目を閉じ、瞼の向こうには、明るい光を感じた。

これがオンコジーンの封印となるのであろう。

残された朱里のことを思い、彼女が生きている世界が平和であることを希。

愛する人のために、この身を捧げられることが、とても幸せな気持ちだった。

永遠の命を、無限の力によって封印する。

あらゆる変化を抑え込み、これ以上変化をさせないように。

自ら望んだ奇跡であったが、それが結局、自身を滅ぼす結果になるうとは。

運命とは、皮肉なものである。

「ついに終わったわね」

静まり返った暗い洞窟の奥を見つめながらジエネは朱里の手を取り、抱きかかえる。朱里はまだ立ち上がるだけの気力を持ち合わせてはいなかった。

「これできつと世界に平穏は戻るわ。これでよかったのよ」

ジエネは未来を見通せる能力を持っている。彼女が言うのなら、本当であろう。

「本当の奇跡は起こらないものなのね」

ルイの帰りを信じて疑わなかった朱里には、重く辛い現実を受け止めるのに時間がかかるであろう。

だが、それを乗り越え、生きていく強さをもっている、それが朱里という女性なのだ。

「そんなことはないわ。十分、今まで奇跡だったじゃないの」
振り返るジエネは全てを飲み込み、見守る。

「もしかして……朱里、いや、そんなはずはないわね」

ジエネが何を言わんとしていたか、朱里には分からなかった。

朱里がルイの後を追うとしても考えたのだろうか。

「大丈夫よ、きつと大丈夫。時間がかかるかもしれないけど。彼の最後の言葉忘れないわ。そして、彼の分まで生きてみせる。この身が滅ぶまで、最後の最後まで」

朱里の意志と覚悟が、この世界を救う。

ジエネはそんな朱里を見守り、導く。

四天王が不在となったこの不安定な世界でも、きっと平穏を保てる何かがあるはずである。

その為に努力し、尽力し、まっすぐに生きていしかないのだ。

世界に起きていた異常気象は徐々になくなり、天変地異は起こらなくなった。

そして、今日もまた日は昇る。

そこは病院の一室だった。昨夜遅く、救急車で搬送され、そのままずっと眠っていたらしい。左腕は点滴の管が天井から降りてきている。まだ完全に目は覚めていない。枕もとでは看護師の話声が聞こえた。

「あの奥さん、大丈夫かしらね。もうすぐ子供が迎えにくるらしいけど」

だんだんと意識が戻ってきていた。看護師の会話もはっきりと聞こえてくる。

「あの……、私はいつたい……」

目を明け、話途中の看護師に意識が戻ったことを伝えた。体はどこも異常はなさそうだし、痛みなども一切ない。少し倦怠感が残っているが、固いベットで寝ていたせいだろうと思う。

「あつ、目が覚められたのね。先生を呼んできます」

そう言つと看護師は慌てて部屋から飛び出して行った。看護師の話相手は、どうやら事務員のようだ。看護師がいなくなると、そそくさ自分の持ち場へと戻る。

数分すると、先ほどの看護師が医師を連れて戻ってきた。

「お加減はいかがですか？」

愛想のいい五十代くらいの男性医師であつた。どう見てもメタボリックなお腹を隠そうともせず、白衣のボタンは今にもはち切れて飛んでいきそうである。頭の毛も薄くなってしまうているが、愛嬌があるので、可愛らしいと評されることが多いだろう。

「ええ。もう大丈夫です。何か病気なのでしょうが」

どうして意識を失ったかまでは思い出せない。貧血かなにかだろうか。今まで貧血になったことはなかったので、貧血の症状がどんなものかは知らなかった。

「今、詳しい検査の結果待ちなのですよ。あと二、三日入院してもらわなければなりません、結果次第ではすぐに退院できると思いますよ」

五十を超えてからも、特に病気という病気はしたことがなかった。風邪を引いても医者になどかかったことはない。年に一回の会社の健診も真面目に受けており、異常を指摘されたことなど一度もなかった。

「この後は病棟へと移ってもらいますね」

そう言つて中年医師は、看護師にあれこれと支持を出し、去つて行つた。彼が主治医なのだろう。

「パンクレー先生は面白い先生ですけど、名医よ、安心してくださいね」

看護師の微笑ましい笑顔にも救われ、すこしほつとした。あの風貌とキャラクターから、患者受けは良さそうだ。

看護師に言われるまま、病棟へと移され、そこには妻が待っていた。

「心配掛けたが、もう大丈夫だ。検査が残っているみたいだから、たまにはのんびりするよ」

三歳年下の妻は、専業主婦でいつも家事に追われている生活を送っているが、今回ばかりは彼女にも主婦業を休ませてあげることが出来てよかったと思つた。

「仕事の無理が祟ったのよ。これからは働きすぎないように気を付けてね」

普段は、夫婦の会話らしい会話もなく、慌ただしい日々の繰り返しだ。妻の優しい声が、こんなにも心地良いものだと思えて気付かされた。

しばらくすると一人息子が顔を見せた。大学を卒業した後、電力会社へと就職したばかりだった。隣の街だが、会社の寮へと入り、一人暮らしをしている。俺の顔を見ると、一言二言話をしただけで、妻をつれて帰っていった。

病院で寝泊りするのはこの歳にして初めての経験である。退屈なのは予想していたが、これほどとは思わなかった。体はどこも悪くないのに、ベットで寝ていなければならぬ理不尽な環境に耐え切れず、看護師を呼んで睡眠薬を頼んだ。

「タバはよく眠れました？」

朝の回診で、主治医のパンクレー先生が顔を見せた。いつものニコニコした笑顔を振りまいている。カルテを見ながら、血圧などを測って行く。

「睡眠薬のお陰で、なんとか眠れました」

今日にも退院できますかと聞きたかったが、検査の結果異常などなければ、向こうから出て行けと言われることが分かっていたので、余計な問答は避けた。

「今日の午後には検査の結果が出るはずだが、午後四時にカンファレンスルームまで来てください」

ものの三分もしないうちに診察は終了した。これで検査の結果に何も異常がなければ、今日にも退院できるかもしれない。

日中は病院の中にある庭などを散歩して過ごした。病院食は口に合わないが、食欲がそれほどなかったので、多くを残した。そのせいか、売店でスナック菓子を買って食べた。することが無いので、煙草に火をつけるのに忙しい。

「そろそろだな」

俺は事務員に教えてもらったカンファレンスルームへと向かった。いくつも同じような部屋が並んでいる廊下を進み、パンクレー先生と書かれた表札のある一室のドアをノックした。

中にはパンクレー先生一人が椅子に座って、慌しくパソコンを打っている。

「そこへ座ってください」

パンクレー医師と対面の位置に座り、検査の結果とやらを聞く。いつもの検診では結果など紙一枚なので、緊張することもないのだが、今回は合格発表を待つ気分にも似ていた。もちろん、ほとんどの人が合格する予定の簡単なテストのようなものではあるが。

「実は……、あなたの命はあと一ヶ月くらいしか持ちません」

パンクレー医師は、検査の結果の紙を三枚を並べて言った。

「え。今なんと？」

思わず耳を疑う。せつかくの合格発表だというのに、ノイズが走る。

「奥様には、さきほどお話をさせて頂きました。そしてあなたが余命宣告を受けた時には、必ず告知するようにと日頃から仰っていたということなので、お話ししようと思います」

愛想のいいパンクレー医師の面持ちが、今回ばかりは真面目で嘘はないと語っている。

「あなたの病気は、病気ステージ四の膵臓癌です」

医師の声が遠くのほうで聞こえているような感覚である。これは現実なのだろうか。夢なのだろうか。夢であるならば、これ以上は

見たくはない。早く現実の世界へと戻してもらいたい。

「治る見込みはないということですか？」

難しい話は理解できない。イエスかノーかで答えてもらうしかない。

「これから検討はしてみますが、今の所特効薬はありません」

後一ヶ月の命だと、治る見込みがないのだと。もうすぐ動く事も、考えることも出来なくなるというのだと。

今まで、煙草やお酒は続けてきたが、誰もがしていることであるうし、自分だけが特別何か悪いことをしてきたつもりなどはない。ただ、運が悪いというだけというのであるうか。これが天命なのだと。

「先生、教えて下さい。いったい何が原因で、何がいけなかったというのですか」

懇願する私の熱意に折れて、パンクレー医師は話してくれた。現段階の医療技術と、医師の想像とを交えて、恐らくという前置きをつけて、体内の神秘へと思いを馳せる。

パンクレー医師は、その外見に劣らず、性格も温厚だった。

「原因は、感染したウイルスが原因でしょうね」

そういつてウイルスの写真を一枚みせてくれた。楕円形からいくつも足が生えている生物。これがウイルスなのか。初めて目にする異物に心が奪われる。

「羽の衣を着たような生き物でしょう？ 私には彼等が悪者には思えなくてね。分かりやすいように、『ルイ』と呼んでいます。ルイがあなたの体内に潜入したのは、随分昔なのだと思いますよ」

全てはパンクレー医師の推測に過ぎない。だが、彼の話には、引き込まれるだけの説得力があった。

「つまり、ウイルスであっても、予防するとか、そういう類の話とは違うということです」

私は、身乗りだし、真実を聞こう、知ろうと必死だった。

「そうです。ルイはずっと以前からあなたの中であなたと共存の道を選択して来たのでしょう。だが、ある時、その均衡が崩れるときがやってきたのです。ルイは、生体内ホルモンのインシュリンの製造遺伝子に接触してしまったのです」

パンクレー医師の話の全て理解できるわけではない。広告会社で長年働いてきた私にとって、医療や医術などとは縁のない世界の話なのだから致し方ない。

「もう少し分かりやすく説明してもらってもいいですか？」

パンクレー医師は、嫌な顔ひとつせず、あれこれ考えながら話を

続けてくれた。

「つまり、ルイはインシュリンに恋をしたのですなあ。インシュリンは『シュリ』と呼ばせてくださいね。女性風にね。ルイの片思いなのかな、と思っていたんですが、どうやら、シュリもその思いに答えたのですよ」

いつの間にか病気の話が、恋愛の話にすり替わっていたが、分かりやすく例え話にしてくれているのだと感謝した。

「なぜ、答えたと分かるんですか？」

勝手なウイルスの恋に、なぜ私の生体内のホルモンが答えなければならなかったというのだろうか。

「ま、気まぐれな恋ですから、何故かはわかりませんが。その結果、ルイとシュリは一緒に生きていくことになったことは事実です。そして、そのおかげで、あなたは今まで健康だったのかもしれないしね」

パンクレー医師は、三枚目の検査値の数値に鉛筆で丸を付けながら続きを話した。

「この数値は、グルカゴンというホルモンの値を示すものなのですが、あなたの数値は普通の人と比べて多いのです。このグルカゴンは『栗夏』と私は呼んでいます。この栗夏とシュリは本当は仲がよくて、愛し合うべき理想の相手となるはずなのですが、どちらかがそれを拒否したのでしょうか。栗夏の性格の悪さが際立ったのか、シュリの意固地からそうなったのか、今となってはどちらかは判断が付きませんが。とにかく、あなたの生活習慣が、どちらかの結果へと結びついたことは想像できます」

生活習慣病、医師はそう言っているのだ。原因の一端は私にあるのだと。

「もしかすると、ルイは、シュリを救おうとしていたのかもしれない。バランスの崩れた世界から。それはちょうど押さえ付けられた権力から逃れるかのように。だが、ルイはシュリを救うことが出来なかった。仲間などいないルイには、シュリを自由にすることが出来なかったのです。だから、シュリを奪い逃げるしか道がなかった。そしてシュリもそれに賛同したのです。そうして二人は結ばれた」

まるで自分の新婚時代でも思い出しているかのように、パンクレー医師は熱く語る。素人には分からないが、未知なる世界を知る人たちは、皆同じように魅せられているのかもしれない。

「奪い、逃げるといふのはどういう意味ですか？」

恋愛の話を真に受けているわけではないが、パンクレー医師がそう表現したからには、何か根拠があるのではと思った。

「それは、つまり……。オンコジーンという名前は聞いたことがありますか？」

医療の知識が乏しい私には皆目見当がつかない。首をかしげていると、医師は続けた。

「オンコジーンというのは、オンコはガンを意味し、ジーンは遺伝子を意味する言葉です。分かりやすく言えば、ガンを作るための設計図といったところでしょうか。これによってガンは作られたのです」

医師は冷めたコピーをすすりながら、もう一枚違う写真を見せてくれた。英語の文字や記号が立体的に並んでいる。二重らせん構造や、そこから作り出されるタンパク質の分子などなのだろう。

「オンコジーンは、六つの領域から出来ています。変化変異を表す領域の『ras』系の三種類、増殖系領域の『myc』系の三種類があつて、全てが共鳴してガン化することが知られています。ルイが生きていくためには、このオンコジーンの地図が必要だったのかもしれません。彼が生きていくたった一つの残された選択肢だったのでしょうか。なるべくしてそうなたとしか言いようがありませんが」

ウイルスが生きていくために選んだ道、それがガン化だという。ウイルスにとって、それは奇跡に近い出来事なのだと。だが、それを許したのは宿主、つまり私自身なのだ。

「だが、あなたの体もそれを黙って見過ごしていたわけではありま
せんよ。そう、頑張ったはずです。ルイを体内で生育させないため
に、みんなで協力したはずです」

医師はますます力が入る。

「まずは、ルイがシユリに出会って『刺激』を受けた段階。この段
階では、免疫機能ではする術はありません。まだルイが悪者かどう
か分からないからです。仕方ありませんね。普通のウイルスなどでは、
その場で駆逐されるタイプのものが多いですが、ルイのような
特殊なウイルスはその防犯網を潜り抜けることができるのです。実
際、一分間に数十個のガンの基になる遺伝子損傷などが起きていま
すが、そのほとんどは修復され、残りは自滅するようにプログラミ
ングされているのです」

刺激は、日常の事のように起きており、防ぐ類のものではないと
いう。

「次に、『進化』を遂げる。ルイの中に今までになかった感情が芽
生え、あらたな境地へと進む。もしかすると自己犠牲などもあつた
かもしれない。宿主に寄生して生きるウイルスにとっては、普通な
らありえないことですが。そんなルイが、オンコジーンを手にする
のです。それがガン化というプロセスを歩むことになるうとは露も
知らず、生き延びるためのたった一つの残された手段として」

今まで共存の道を歩んできたウイルスとの決別。彼等を駆逐する
か、それともされるのか。その道を分けたものとはいったい。

「オンコジーンを紐解いたルイも、それだけではまだガン化には至
りません。前段階ということです。だけでも、ガン化したことには
変わりない。この時より、あなたの体内の免疫機構が、ありとあら
ゆる作戦でガン化したルイを退治しようと目論んだはずです。そう

しなければ、宿主のあなたの生命が脅かされるということをインプットされているからです。ですが、この時期などに、暴飲暴食などは、細胞にとってみれば災難、つまり天災みたいなものです。それによって、免疫から守られていた可能性もあります」

ガンの芽と免疫機構との戦い。それに勝利しなければ、未来はない。つまり、俺の免疫は負けたということなのか。それも免疫を下げる努力を自らしていたというのである。

「おっと、その前に大事な人物の紹介を忘れていました。全ての段階で何からかの影響を与えていると考えられているエピジェネティクス。名前がややこしいので、『ジエネ』にしますね。細胞分裂時に伝えられる染色体以外の情報というのが、このジエネなのです。彼女には、近未来が想像できていたのかもしれない。まだガン化の前段階で気付けるのは、彼女くらいなものかもしれません。だが、彼女にはそれを阻止することも、伝えることも出来ない。術がないのです。あるとすれば、活性酸素を阻止する野菜などに含まれるカルテノイドのリコピンの『リコ』を連れてきて、ガン化細胞の増殖を抑えることくらいしか出来なかったのかもしれませんが、オンコジーンを手にしたルイにしてみれば、何の障害にもならなかったでしょう」

体内に、ガン化を知る者がいたという。だが伝えれない。伝える術があれば、また違った結果となっていたのかもしれない。

「そうして、ガン化して行くのですが、まだこのままではガンは大きくはなりません。イニシエーション、つまり開花しなければならぬ。ガンの芽が開く。やはり、開花するには、ルイだけの力だとは思えません。何か手助けがあつたに違いない。もしかすると、シユリがそれを導いたのかもしれない。栗夏との破局から、シユリの生きる道に少し変化があつたのかもしれない。とにかく、オンコジーンは開花した。そしてルイは生き延びたのです」

私の中の因子が、ガン化に手を貸したというのか。どこかで狂い初めていたというのだろうか。

「ですが、まだまだこの段階でも、ガンは大きくはなりません。成長しなければならぬのです。これが次ぎのステップのプロモーションです。成長の促進です。少しずつ大きくなり始めたガンはようやく免疫機構の本格的な駆逐作戦と戦うことになります。体内でも最強の免疫四天王とルイとの戦いなのです」

この段階まで来ないと、大御所は動かないのか。だが、それは駆逐できる自身がるからであろう。もしくは、ここまでまたないと駆逐できないのかもしれない。各々の段階において、各々の免疫機構があるのだろう。

「四天王の最初の一人は、顆粒球を放出して敵を討つグラニュー。グラニューの攻撃では残念ながらルイは倒せなかった。本来であれば、四天王全員が一致団結して討伐に向かうのですが、このバランスが悪いと一人ずつ戦うことになるのです。次に出てきたのは、マクロファージの『ファージ』です。彼女は免疫の要です。ありとあらゆる体外生物やガン細胞などを膠原提示し、例えば、T A A などというように識別記号のようなものをつけて駆逐するのですが、この識別を受けて、T細胞の『ティセル』と、B細胞の『ブラザ』が抗体を作りだし、総攻撃をかけるのです。本来であれば、この段階でガン細胞は駆逐されるはずでした。よほどの例外が無い限り」

すさまじい四天王のと戦い。生死をかけての一騎打ち。

「ですが、ここで、何かが起こります。何かは分かりませんが、もしかすると……トレランスかもしれません。免疫寛容、つまり免疫機構が一時ダウンする瞬間があるといわれています。そのトレランスが、たまたま戦いの最中で起こったとしたら、いくら四天王でも勝てません。」

ですが、まだ希はありました。NKです。四天王の再後の皆にして、最強の戦士。ナチュラルキラーと呼ばれる由来は、全てのものをたちまち絶滅させる能力を持っているのです。その方法は、グランザイムというもので穴を開け、そこから、パーフォリンと呼ばれるセリンプロテアーゼという酵素を注入し破壊しつくすのです。

あ、ちよつと話が難しくなつてしまいましたね、すみません。とにかく、再後の戦士NKの攻撃によってルイは死ぬはずだった。だが、ルイは生き延びた。ここは謎です。なぜ攻撃が効かなかったのか、どうやってNKを倒したのか。ただの偶然だったのかもしれない。

このように、多くの必然と、ほんの少しの偶然とが積み重なり、ガンは増殖していったのです。

そして、再後の段階がプログレッション、いよいよ増殖に入ります。もう手の付けようはありません。これが今の現状となります。お分かりになりますか？」

一気に話終えて、パンクレー医師は一息ついた。そして、再後の一枚の検査結果を見せてくれた。

「CA119-9という数値が上がっていますね。これがマーカーです。全ては結果から想像したに過ぎませんが、治療の難しさも知って貰いたくお話ししました」

全てがまだ現実と認識できていない。もしかすると、自分は宿主ではなく、ウイルスなのではないのかとさえ思う。天災なのか、人災なのかは、今となってはもうどうでもよい。ただ、現実が受け入れられずに、さ迷うしかなかった。

「では治療を始めましょう」

医師の話が終わり、数日が過ぎて、家族との話合いの結果、放射線治療で効果を試してみようということになった。というか、それ

以外の方法といえば、死を待つという選択枝以外にないのだからしょうがない。

副作用によって体がボロボロになろうとも、生きる希を断ち切る勇氣はなかった。

病氣ステージ四とは、癌の転移を意味する。治療というよりは、少しでも延命しようというだけの方法でしかない。それでも、すがるしか道はないのだ。

放射線治療が始まって、その副作用も出始める。体がボロボロになつていくのを日に日に感じる。体の細胞達にとっては、天災のようなものなのかもしれない。

「ついに脳へと転移が見られました」

放射線治療を開始して二週間が過ぎた時だった。パンクレー医師からそう告げられた。

「最後の手段が効果あればよいのですが」

それは、放射線治療に入る前に試すだけ試してみようということで、ウイルスによるウイルスの治療というものがあるという。仲間のウイルスを使って、目的のウイルスを駆逐しようというのだ。その結果がそろそろ出るころだという。治療効果はそれほど高くないが、藁にもすがるしかない。

「やはり、だめだったようです。アデノウイルスでは、ルイは殺せなかったようです」

検査の結果を見ながら医師は残念そうに肩を落とす。放射線治療もうまく行っていない様子である。結局は当初医師より告げられた余命一ヶ月という判断が正しかったということである。

もう、打つ手は他にない。

残された命はあと二週間。

その頃は、入院生活を余儀なくされ、毎日検査の連続だった。

痛みを止めるための麻薬のせいで、頭がはつきりしない。

何人ものお見舞いにと面会に訪れたか、誰が誰だか、はつきりとは覚えていない。

病室の窓の外の変わらぬ風景に、雨だったのか晴れだったのかはつきりしない。

そんな時だった。

血燥を変えて、パンクレー先生が検査結果を持って病室へと飛び込んできた。

「何か異変が起こっているかもしれません」

余命幾許も無い私の体にとって、異変とは、良いニュースではない。

「脳転移までは認められたのですが、その後ガンの進展がピタッと止まったのです。放射線治療の効果だとは思えません。体の中で、なにか異変が起きているに違いない」

医師は初めての体験とばかりに興奮している。このままガンが増えずに沈静へと向かへば、とりあえずは死なずにすむというのである。

「これは奇跡かもしれません」

それ以外に言葉が見つからない。そう医師は告げた。

そもそもウイルスの増殖を許し、生きながらえさせたのは宿主の責任なのだろう。免疫がしっかり機能していれば。天変地異のような例外さえおこさなければ。反省の点は多くある。それを除外視して、ウイルスだけを悪者に仕立て上げることが出来ない。

体内に潜伏しているウイルスにとって、ガン化は残された最後の生きる道だったのかもしれない。そのウイルスが、宿主を破壊しつくしてまで生き続けようとは考えなかったのだろう。どこかで自己を犠牲にすることを学んだのかもしれない。

それは愛の力だったのかもしれない。

決して出会っていけない、ウイルスと体内の細胞との恋。

決して結ばれはいなかった、ルイとシユリ。

決して運命に背いてはいけなかった、二人。

決して開いてはいけなかった、オンコジーンの扉。

それは間違いないなく奇跡だった。

後戻りの出来ない、奇跡だった。

このオンコジーンの伝説は後世へと伝えられることは無い。

全ての細胞が、ガン化する遺伝子〓オンコジーンを持ちながら、その内容は一切伝えられない。

決して開かれる事はない、解いてはいけないパズルなのである。

だが、もし。

もしもそのパンドラの箱を開く者が現れ、それが、偶然にウイルスのような体外異生物であつたとしたら。

その時、免疫を衰えさせる愚行を繰り返していたのなら。

それは、もう奇跡でもなんでもない。
ガン化は必然である。

「ルイ。いつかきつと戻って来てね。それまで、私は負けないわ」
生きる力、彼女の思い。
それが奇跡を起こしたことは間違いない。

第一幕 おわり

第二幕 CANCER? (不滅のオンコジーン) ヘ

<http://ncode.syosetu.com/n2620r/>

終章

C A N C E R

7（後書き）

長らくお付き合いいただき有難う御座いました。

多くの方々に読んで頂いて感謝の言葉もあります。

もう少し文章力があればと後悔しておりますが、本当に有難う御座いました。

第二幕へ

平穩は訪れ、だれもが平和を当たり前となつた今、奇跡も伝説も忘れ去られる。

ウィルの死は、誰にも伝えられることなく、誰からも触れられることもなく、ただそこにある。

朱里は運命を受け入れ、前へと一步を踏み出した。

だが、現実はそのほど艶やかではない。

彼等を取り巻く運命が、日陰の下に蠕きだす。

オンコジーンの伝説はまだ終わらない…

いや、始まつたばかりなのかもしれない。

時は過ぎ、伝説は再び幕を開けようとしていた。

第二幕、不滅のオンコジーンへ…

<http://ncode.syosetu.com/n2620r/11/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1319m/>

C A N C E R（禁断のオンコジーン伝説）

2011年3月16日17時25分発行